

二次元

高浜太郎の描く「精霊騎士アクエアル」のマンガも載ってるよ!

2D DREAM MAGAZINE

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

新連載小説
キャッスルプリズナー
夜士郎×
吉飛雄馬

特別
付録

NET NOVELS

2D DREAM NOVELS

2D DREAM POCKET NOVELS

特製
トレーディングしおり

今号の特集

触手奉仕

ひっそりスーツの奉仕ヒロインを描くのは

ぼっしい

マンガ大好評連載中!

超昂閃忍ハルカ
魔法少女イスカ
~after school~

特別
付録

ピンナップポスター



いるまかみり / イノウエマキト / ぼっしい

原画・カガミの
描き下ろしイラストも掲載!

立ち読み版

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

vol.52
2010

06

DIGITAL
EDITION
デジタル版

BackLith最新作
鋼鉄の魔女アンネローゼ
徹底紹介!



勝手に動かさないでっ!!!
私が...するから.....!!!

んぐっ!!!
んんんんんんん!!!

ニジマガ触手奉仕コレクション

さあご主人様
入浴のお時間ですわ

そんなに暴れては
キレになりますわ
ご主人様あ



もあつとつかい...
あつとつかい...
ください...
ださい...
う!

こんなにたくさん
溺れてしまいます...



皇國の戦乙女^{ヴァルキューラ}に迫る淫謀!
長い長い陵辱の夜が幕を開ける……!!



CASTLE PRISONER
キャッスルプリズナー 雌将校隷属調教

小説
NOVEL

よしろう
夜士郎

挿絵
ILLUSTRATION

よしひゅうま
吉飛雄馬

蒼穹に銃声が轟いている。
重なりあう、悲鳴。血飛沫を撒き散らし、見えない何かに弾かれたように、ばたばたと人が倒れていく。
戦場であった。

「くそつたれ……！」

戦場の中で、パウアーは毒づく。頭上で、無数に飛び交う銃弾を忌々しげに睨みつける。途切れなく続く銃撃に、様子を窺うことすらできないのだ。

胸元に結わえつけてある、王冠に茨の絡みついた国章はヴィスパ皇国のもの。ヴィスパ皇国第三師団、パウアー少尉は、憎たらしい程に暗れ渡った青空を見上げ、嘆息する。

「俺の人生、ここで終わりかよ……」

その表情には諦めの色が濃い。彼一人だけではない。同じく銃撃から身を隠す仲間達——彼らの表情もまた、多かれ少なかれ諦念の色がある。すでに周囲は包囲され、逃げ場はない。味方は遠く、援軍はなく。

「あ、悪魔さえないなけりやなあ」

「あ、悪魔さえないなけりやなあ」

火のように紅い女であった。

「あはははっ！ もう終わりなの、この屑どももっ！ こそこそ逃げ回って、みすばらしいっ！」

戦場に響くは焦げつく哄笑。
遠目にもはつきりと見える、胸元に

盛り上がる巨峰を揺らし、その哄笑は耳障りなほど響き渡る。

「ちつ……くしようおおっ！」

「ばっ、馬鹿っ！ よせっ！」

一人の兵士が、侮蔑に耐えかね、身を起こし狙いを定めて——瞬間、脳漿をぶちまけた。

「あはっ！ 一匹駆除っ！」

硝煙を上げるライフルを掲げ、女は心底愉しげであった。

「紅い悪魔……ヒルダ……」

そう——あの悪魔。ヒルダ・ローシャッテがこの戦場に現れた、それが運の尽きであった。

まるで手足をもがれていくように、左右に陣する隊が討ち取られ——そして今、この陣も陥落しようとしている。

「……どうします、少尉」

と、部下に訊かれても、打開策は見えてこない。——このまま座して殲滅を待つのなら、いっそ。

「……あの人が、来てくれたなら……」

部下が、呟く。それを一瞥し、パウアーは空に、一人の女の幻影を見た。

「ああ。最後には、あの人を見て死にてえなあ。まったく、心残りが増えたじゃねえか」

「ごつと、部下のヘルメットを叩く。」

「さて、死にいきますか。どうせなら一人でも道連れを——」

と、覚悟を決めた、その時。
「情けないことを言うな。少しばかり、諦めがよすぎるんじゃないか、パウ

アー少尉？」

空気を漂と震わせる、涼風じみたその声に、パウアーは耳を疑った。

「気がつけば——銃撃がやんでいる。戦場の全てが、彼女を見ていた。」

戦場の上、こちらを見下ろし、ライフルを肩に担いで涼やかな笑みを送る彼女を。

それは羽はたく銀の翼に見えた。

黄塵舞うこの戦場で、太陽の光に燦然と輝く銀の髪。敵から見ればいい的だろう、風に舞うその銀糸の羽をまともせず、彼女は銃弾行き交う鉄火場のただ中で、背筋を伸ばし颯爽と立っている。

細い眉と、切れ長の瞳。眼窩にはまるブルーサファイアの瞳は、敵を前にしては冷たく輝くけれど、今、味方へと向ける眼差しは風いだ海のようにどこまでも優しい。

真っ白な肌は、貴族が一財産をかけて織らせてもまるで届かぬ、最上級の絹のよう。埃まみれの戦場で、その肌はあちこち汚れているけれど、それがノエル的美を少しでも損なっているのかと問われれば、答えは否だ。

薄い笑みを形作る桃色の唇は艶やかで、まるで少女のように小さい。真っ白な歯が、その隙間から覗いていた。無骨な軍服に包まれた肢体は、けれど流れるようなラインを描き、しなやかな、女性らしさを醸し出す。張り出した二つの膨らみは実に豊かで、こわついた戦闘服にもくつきりと、連なる

肉の半球を描き出しているのだ。真横から見れば挑戦的にまで突き出した円錐の穂先であった。

「ノエル大尉……」

呆然と、パウアーは呟いていた。なぜ、ここに。彼女の戦場は、北の彼方はずだ。

だが、彼女はにやりと笑うと、

「ぼおっとするんじゃない。お前達は誇り高きヴィスパの兵だろ？」

と。凛と声を張り上げて。

「さあ立てっ！ 我々の強さを、ヴィスパの力を、あの泥まみれどもに思い知らせやれっ！」

腰から提げた細身のサーベルを引き抜き、高々と天へと掲げたのだ。

「ノエル様っ！」

「おっ、おとおおおとおおおっ！」

「やるぞ、やってやるっ！」

沈んでいた兵達の意気が、高まっていく。ノエルを中心にして、何か熱いようなものが、兵士達の間に伝播していくのだ。

「戦女神……」

呆然と、あるいは陶然と、パウアーは呟く。彼はそこに確かに見たのだ。戦いを勝利に導く、女神の姿を。

さあ——風が巻き、背中に伸びる銀色の髪が、きらきらと輝く。

ノエルの、背後。そこに——銃身掲げる一隊が、立ち並んでいた。銃口はその全てが敵へと向かっている。

帝国の銃撃がやんだ理由であった。すうと。ノエルの剣が水平を向く。

その切っ先に、赤毛の女を串刺しにして。

「よくぞあの女を相手に、ここまで持ちこたえてくれた。使命を果たしたな、パウアー」

不意に、そんなことを言われて、胸が詰まった。目の前が、滲む。

「い、いえ……」

ノエルが、一際に眩しさを増す。彼女はきつと正面を睨みつけると。

「ヴィスバ軍師団長、ノエル・セリエンテリ！」

「推して参る！」

高らかに名乗りを上げる、その銀狼のような誇り高き姿に。

パウアーは、戦の勝利を確信した。

毒々しい紅の唇が、震えていた。

「ば……馬鹿な……」

次々に、討ち取られていく。たった今まで、自分が指揮していた部隊が。

「隊長っ、逃げてくたつ、ぐぎゃ！」

傍らの声が、不意に途絶えた。そちらに目を向ければ、胸板に穴を開けて、倒れ伏す部下の姿。

「こんな、こんなことが……」

目の前の現実が信じられず、ヒルダ、ローシャッテはただ呆然と立ちつくしていた。

陽炎で揺らめく景色に、銀色の光が瞬いている。ノエル・セリエンテリの銀髪だ。

「この役立たずどもっ！ 怯えるんじゃない、敵は高だか一個隊でしょっ！ 押し包め、踏み砕けっ！」

乗馬鞭を振り、ヒルダは叫ぶ。

けれど兵の動きは鈍い。

勝てる、生きて帰れると。一度でもそう思ったら、人は命を惜しむのだ。

そして敵は、一度は死を覚悟して、そこから生を得ようとしている集団だ。

戦いの意志が、違う。

「くっ……、負けたというの、この私がつっ！ そんなこと……！」

ざりと——奥歯を噛みしめ、ヒルダは憎々しげに銀色の女を睨みつけた。

「あんな女さえ現れなければ……」

「ノエル・セリエンテリ……」

口角を吊り上げ、唸る。その時。

目が、合った。

——まるで、凍える刃の如き視線。

怒りが、燃えあがる。ライフルを肩に支持し、その照準をノエルに合わせ

「右のこめかみに駆け抜けた、焦げついでに衝撃に、身体ごと吹っ飛んだ。」

「が……、あつ、グアあつ……！」

視界が赤い。頭の中が赤い。

「たっ、隊長っ！ おいつ、誰かつ」

部下の声が、遠く響く。襟首を掴まれ、身体が引きずられていく。

「ぐう……、うう……」

焦げついたこめかみに手を当ててみれば、ぬるりと、生温い液体が指を濡らすのであった。

「は……、は……、は……、は……」

右目には、何も映らない。

いや——違う。

網膜に、焼きついている。

こちらに向けライフルを構えたノエ

ルの、煌めく銀翼の髪を。

「おのれ、おのれええ……」

どろどろと、脳の奥から湧き出てくる、熱く煮えたぎった憎悪。たまらぬ衝動が、全身を駆け抜ける。

「た、隊長っ、落ち着いてっ！」

「うああああああああああつっ！」

喉奥から絞り出す、喀血にも似た、叫び。

「必ず、殺してやる……壊してやる……、ノエルうううあ！」

遁走していく帝国軍を見据え、ノエルはそつと胸中で息を吐く。

ざりざりだった。北方の軍が陽動だと気づかなければ、この一隊は瞬間に蹂躞され、国の奥深くまで敵兵の侵入を許していたことだろう。

「大尉っ、ありがとうございましたっ！」

駆け寄ってきたパウアーに、笑みを返す。皆——傷ついている。

犠牲は多い。だが。

「貴交らの力が私を間に合わせてくれた。礼を言うのはこちらのほうだよ」

額に手を当て、敬礼をする。

ざつ、と踵を合わせて礼を返すパウアーの目に、涙が浮かんでいた。

「おいおい、男が泣くんだ」

苦笑する、ノエル。と。その時。

「お姉様——っ！」

遠くから、近づいてくる大音声。土埃を巻き上げて、ぶんぶかと手を振りながら、こちらに向けて全力疾走して

くる少女が一人。

「相変わらず、元気ですね」

おかしそうにパウアーが言う。

愛嬌のある顔に満面の笑みを浮かべた、可愛らしい少女である。まん丸い目に、小さな鼻梁。陽光に輝く、ライトブラウンの髪を、こめかみのあたりで三つ編みにして左右から垂らしている。結わえた赤いリボンが、彼女の歩みに合わせてぶらぶらと躍っていた。

「はは、アン。転ばない——」

ように、と。言いさるよりも先に。

「おね——はぶしゅ！」

ずべしゅああつっ！ と、盛大に転がった少女が、勢いそのままにノエルの足下まで滑り込んできた。

「ナイススライディング……」

「ふえええ……、痛い……」

少女だけない顔は、涙目であった。

少女——アンは立ち上がると、ノエルの目の前に濡れたタオルを差し出す。土まみれの顔でにっこりと笑い、

「はい、お姉様！ お顔をお拭き下さいっ」

「……まずあなたが拭きなさいな」

彼女の手から濡れたタオルを受け取ると、それでごしごしと拭いてやる。

「はふううん……」

目を細め、ひびく幸せそうだった。

「おお、よしよし。可愛いなあ」

ノエルの怜悧な顔も、どこか緩んでいる。

「よし、奇麗になった」

と、アンの頭を撫でてやると、彼女

は照れ笑いを浮かべばつと離れる。「お姉様もつ。ああ、こんなに髪を汚して。綺麗な髪なんですから」

アンはポケットから櫛を取り出すと、ノエルの背後に回り、その長い髪を梳る。さらさら流れる、銀糸。

「うーん、本当に綺麗」と、アン。背景に百合でも描かれそうな二人の姿に、遠巻きに見守る兵士達の顔にも緩やかな笑みが浮かぶのだ。

「も、もういいよ、アン？」
何となく気恥ずかしくなつて、アンに声をかけ、再び兵士達へと視線を向ける。その表情は、凛とした指揮者のそれであった。

「戦士に唄を。死に唄いを。戦いに散つた同胞は、ヴァルハラにて我らを見守っている——祈ろう」

静謐な、声。サーベルを引き抜き、顔の前に掲げ、目を閉じる。

シンと、戦場がやんだ。

ノエルの声に、皆、目を閉じ。
彼女に合わせ、鎮魂に沈んでいる。身動きする者なく、様に口を噤んで。銀色の戦女神へと祈るかのように。

—あの、女

瞳を閉じたノエルの、臉の裏に浮かぶのは、紅蓮の如き赤髪の子だ。弾丸はわずかに額を逸れて、撃ち殺すことは叶わなかつた。

—それが何か、致命的なことであつたような。漠然とした不安感が、胸を締めつけていた。

ウィスバ王国とギアガ帝国との戦争は、すでに十年の時を超えていた。

その初期こそ総力戦の態を成していた二国間の争いは、けれどともに相手に対する決め手を欠き、長期戦へと移行する。周辺諸国へ対しての圧力もかけ続けなければならぬ、大国である二国にとつて、長引く戦争は決して有益なものにはなりえない。

民の生活は時と共に貧しく。
市民の間で漂う厭戦ムード。停戦協定を結ぶべきだとの声も上がり始めるけれど、領地を管理する貴族達は、その声に耳を傾けない。

戦争は、彼らにとつて財を成す機会なのだ。税を搾り、そこそこに戦つて、そこそこに成果を上げて。それだけで、貴族は貴族でいられるのだ。

——馬鹿げている

と、ノエルは、眼前で繰り広げられていた茶番を苦々しく見やり、ひとりごちた。

円を描くように備えつけられた卓に、二十人ほどの貴族が並び座つている。誰も彼もが着飾つて、その自己主張が目障りであった。

貴族連盟——ウィスバの貴族達

がやがやと部屋の中に響く、彼らの談笑の音が、神経を苛立たせる。「楽しみにですね、今日のパーティー——」

「娘を、ええ、連れてきました。年頃ですから。いい相手が見つかる」と

「城のシェフは腕が確かですから……」
(まったく。お茶会か？ これは)

艶やかな唇をむつつりと引き結び、形のよい柳眉を吊り上げて、それでも必死で怒りを堪えている。

今は執務用の、ネイビーカラーの制服である。戦闘服に比べ布地も薄く、タイトな制服は、ノエルの鍛えられ、それでいて女性らしいしなやかなさを失わない、魅力的なボディラインを露わとさせている。

貴族達の目がちらちらと、その胸元で膨らむ肉風船に伸びてくる。母性の匂い立つような、豊かな肉乳房は組んだノエルの腕から零れんばかりであった。ぐつとせり上がった肉山は、腕の形にぐにやりと歪んで、その内の魅惑の柔肉を夢想させてやまない。

左胸には、幾つもの勲章が飾られていて、彼女の栄光を物語っている。膝丈のタイトスカートを包まれた黒いパンティストッキングに包まれた脚は、男なら思わず目を引きつけられることだろう。鍛え上げられた筋肉と、その表面を覆う脂肪にむつちりと張り詰めた太股は、黒い薄布に覆われてきゅつと引き締まり、つやつやとした蠱惑的な輝きを発していた。

さらに、その足をアダルトに彩る、黒光りするハイヒール。鋭利なまでの踵が、美脚をくくっと持ち上げて、人より長いその脚を、なおすらりと見せつけるのだ。

(何がパーティーだ、お気楽な) 苛立たしげに腕を組み、指を叩く。帝国相手の、作戦会議のはずだ。だ

が、どいつもこいつも夜に開かれる舞踏会のことしか頭にないようで、けちらと笑っている。

まったく、気に入らない。

「おや、ご機嫌な前めですな——」

不意の声に、背筋が粟立たった。

それはノエルに嫌悪しか抱かせぬ。「……いえ。そんなことはありません、

——ゴルム大臣——」

と、否定するノエルの顔は、まるで能面のように冷淡であった。

「くひつ、そんな顔をしなないで下さいよ。お美しい顔が台無しだ」
肥えた腹を揺らして苦笑するのは、この国の外務大臣である、ゴルム。

欲望が服を着て歩いているような男だ。でつぶりと太った身体に、脂ぎつた禿げ頭。ノエルの身体をまさぐる視線は、肌の上に芋虫が這うような気色悪さを感じさせる。

「大臣？ あなたはこの会議の議長で——。私語を放つて、こんなところで何をしているのです」

訊く。ノエルにあてがわれた位置は、円卓から外れた部屋の隅。軍人などとりあえず、座らせておけばよいと言わんばかりだ。

「おかしなことを言わつしやる。よお見なさいノエル大尉。会議は、つづがなく、進行していきましょう」

ぬらりと、生臭い吐息を漂わせ、ゴルムが円卓を指し示す。その、戦とはまるで関係のない、賑やかな語らいの場を。

「なるほど。これが——会議だと」

「ええ。……ノエル、あなたももう少し利口になったほうがよろしい。いいですか？」

ぼんと、ノエルの肩に手の平を乗せ、さわさわと撫でてくる。

——ぞっとした。

「あなたがた軍人など、我々の指先一つで、どうにでもなるのです。——どうです？」

粘りつくようなゴルムの手が、すうと胸元に伸びてくる。

「そんなに戦を行いたいのですか？ 違うでしょう、欲しいのは、手柄だ。恩賞だ。私と組むのなら、あなたに望みのものを差し上げましょう」

「私の、望み」
それは——

「ええ、そうです。望みは……？」
脂ぎった声が先を促し、勲章ごと、

柔らかかな膨らみを驚つかみにする。
——刹那。その身体が宙を舞った。

「ぐげぶううう——！」
空中で三回転を披露した巨軀は固い床に背中を打ちつけ、豚のような声で悶絶する。

「ひ、ぐい……な、何を……」
「ひ、私の望みは国を護ること。そのためにまず、排せねばならん輩が、目の前にいるようだな？」

こつこつと、ことさらに足音を響かせて、ゴルムの元へと歩み寄る。

「ひ、ひいひい……、私に、私に、

こんなことをしてただで済むとでもっ……」

「さて。まあ、まずはあなたに突撃隊の盾となつてもらおうかな。その豚のような泣き声は、いい感じに敵の注意を引きつけてくれることだろう」

そこに、敵兵を撃つ間際の殺意を込めて、睨みつける。するとゴルムの股間がぶるりと震え、じわじわと、濡れ色に染まっていくではないか。

周囲から、どつと笑いが上がる。

失禁した股間を両手で隠し、顔面をどす黒く染め、ゴルムはぶるぶると震えていた。その、無様な姿に。

「お騒がせしました。皆さんは、会議を続けて下さい。それでは——」

と、言い残し、ノエルは退出する。

——凄まじい視線が、背中に突き刺さるのを感じながら。

「怖っ！ お姉様、怖っ！」
……外で、アンがはしゃいでいた。

広い、舞踏場である。

高い天井には、精緻な絵画が描かれて、ぶら下がるシャンデリアがそれを幻想的に照らし出していた。耳には心地よく流れる音楽、テーブルの上には趣向を凝らした料理の数々が香しい匂いを放っている。

目と、耳と、鼻と。五感の全てを満足させる、まさに上流階級の舞踏会。

そんな華やかな場にあって、壁際の花と化すノエルは、やはり不機嫌な御

面相であった。

「前線では、兵達が芋で飢えを凌いでいるというのに……」

湯気上げる、骨つきの鳥も肉を見やり、憎々しげに呟いた。

隣で、アンも、

「まつぶあくでひゅね、けひからん」と、同意してくれる。

「……呑み込んでから喋りなさい」

「ふあい」

もぎゅりもぎゅりとリスのように頬を膨らませるアンを見て、嘆息する。

彼女曰く「このまま誰も食べなくて捨てられてしまうのもそれはそれで罪悪ですよ」と。

それはまあ、その通りだ。

「しかし、これも全て税金なのだが」

「もぐ……だからこそ、ですよ。むぐもぐ……無駄をなくす……もぐ……ために……残すのは、つむぐ」

「いや、もういい」
アンの口元についていたソースを指先で拭い、べろりと舐め取る。

えへへ、と、恥ずかしそうに彼女は笑う。その、愛嬌のある顔に、苛立つ心が落ち着いてゆく。

場内にも流れわたった音楽が、変わった緩やかなそれから、リズムの効いたメロディへと。ダンスタイムだ。

「うるさくなってきそう。外へ出ないか？」

アンは、嬉しそうに頷くと、ノエルの腕にもたれかかっていた。

テラスへの扉を開く。夜気が、室内

に流れ込む。

雲が出ているのだろうか、空には星一つない。月すら朧な、闇夜である。

「これで星が見えたら、とーってもロマンチックなのになあ……」

空を見上げ、アン。

「おいおい、私達は女同士だぞ？」

「それが何ですか。愛の前には性別なんて関係ありません！」

拳を握りしめ、力説する。

と、その顔が怪訝に曇り、

「あれ？ ……あれ、何ですか？」

夜空を指さし、つられて見上げてみて、そこに不審なものはない。

ただ闇夜が広がるのみ。

「何か見えるのか、アン？」

「気のせい……かな？ 何か丸っぽいものが、空を飛んでいるように見えるんです……」

その言葉に、じつと空を凝視する。

霞がかかる月に、黒い影が落ちた。

——雲が、目を隠したというものではない。その黒は、はつきりと円を描いていた。

背中に怖気が駆け抜ける——。

「舞踏場……！ 敵襲だっ！」

「無路つ……！ 敵襲だっ！」
貴族達の間け込み、叫ぶ。
それは小さな波となって消えていく。誰も、本気にしていない。ここはヴィスバの王城なのだ。敵の軍勢はまだ遠く、この城だけは安全だと、そう思いこんでいるのだ。

(まったく！)

心中で毒つき、警備兵を呼びつけようとして——天窓が、砕け散った。

姿を現す、黒い影。戦闘服に身を包んだそれは、高い天井から飛び降りると、見事な五点接地を決めて着地した。すぐに体勢を整え、銃を構える。

——その行動を瞥て、侵入者の実力が窺えた。警備兵程度では、どうしようもない。

ノエルとアンはすでに出口へ向け駆け出している。

貴族達は——呆然としていた。何が起こっているのか、理解できていない。彼らは銃を突きつけられて、なお、曖昧な笑みに顔を歪めるだけだった。

「一カ所に集まれ！」「座れっ！」
叩きつけるような怒号が響く。

ふらふらと、それに従う貴族達——彼らを尻目に、ノエルとアンは、出口の扉を開く。

「そこにも、侵入兵がいた。」

——三人。
動揺も躊躇もなくノエルは一人の股間を蹴り上げる。足首に伝わるぐにやりとした何かが潰れる感触。

「ごっ……！」
びくん！と震える男を盾に、サーベルを引き抜いた。

膝を折る男を、また別の一人へと蹴り飛ばす。

「はあっ！」
陰囊を潰された男を遮蔽物に、その

腋から一閃、弧を描く刃。

ぐつと広がる股間で、タイトスカートのサイドが裂けていく。真っ黒なパンティストッキングを根本まで晒して、その両足は黒豹の如くであった。

肉房が上下に激しく揺れ、サーベルの一撃が兵士の首筋に叩き込まれる。

「ごはっ——」
意識を脳髓から跳ね出して、昏倒する。一撃は、剣の鎧であった。

——あと一人っ！
と、視線を巡らせて、アンのチョークスリパーに気絶する兵士の姿を見た。軍式格闘技だ。

「走るぞっ！」「はいっ！」
目指すは——王の居室。

保護しなければ、王の身柄を押さえられたら、この国は終わりだ。

(それにしても——)
何なのだ、この作戦は。

足下も見えぬ暗闇の中、地面への高度差も測れない急降下の降下など。

——常軌を逸している。それに、不可解なこともある。この城に今日、貴族が集まっていることを、なぜ知っていたのだ。天窓から突入した兵も、扉の外にいた兵も最初から舞踏場の占拠が目的のようだった。

つまりは貴族達の動向を把握されていたということになる。それは——。

「……アン」

「はい？ 何ですか、お姉様」

と、長い距離を駆けて、息一つ切らしていない部下へと声をかける。

「——この城を出るんだ。そして地方の貴族へと伝令を飛ばして。城は占拠された、応援を求めろ、と」

「そ、そんなっ……城が、落ちるっ？」

「ああ。——内通者がいる。それにこれだけ周到に用意された作戦なら、もう覆らない」

ノエルはそう、現状を読み取った。

「だったら、一緒にっ！」

「駄目。私は目立つ。だから私が囮になったほうが、確実性が高い」

「ダメ、駄目ですっ！ お姉様っ！」
立ち止まり、涙目で、アンは叫ぶ。

「囮になら、私がつ、だからっ！」
「……これは命令だ、アン」

その目を見据え強く言い聞かせる。

「アン少尉、お前に伝令兵の務めを命じる。——あなただけが頼りなの」

そう告げて、ぐつと彼女の肩を抱く。しばしアンは俯いて、そして、再び面を上げたその表情には、決意を込めた力強さがあった。

と、少女は左の三つ編みから赤いリボンを解く。そして、ノエルの髪を一つ、手に取り、そこにきゅつと結びつけたのだ。

銀糸に赤い花が咲く。

「必ず返してもらいますから。だから……大事に持っていて下さいねっ——」

と、自分のもう一つのリボンを指さして、にこりと笑うのだった。

「うん。必ず返す。頼んだ、アン」

二人は笑いあい、そして長く伸びる廊下の左右へと、分かれ、駆け出した。

(アン。どうか、無事で……)

心の中で、そう、祈りながら。王室の扉に、辿り着く。

半開きであった。

——はっ！
もはや室内の状況を確認する余裕もなく、ノエルは扉を蹴り開く。

火のような。

紅の女がそこにいた。

ああ、そして。

「……王……」

女の足に縋るように、崩れ伏す王の姿。鮮血が、割れた頭蓋から広がって床の上に円を描く。

確認するまでもなく、死んでいた。女が、こちらを振り向く。

右目を覆う、黒い眼帯が異様だ。細い眉は剃刀のようで、赤く燃える猛き瞳をなお癡狂に印象づける。滑らかな鼻筋は上品で、けれどその毒々しいほどに紅の唇は、人の心を惑わせる禍々しい淫気に満ちていた。

背丈はノエルと同じくらいだろうか。差異は、胸に現れている。大きい。まるで小玉の西瓜を二つ、突っ込んだような乳房であった。あらゆる行動を阻害するとしか思えない、膨れあがった肉双山を窮屈に押し込めて、閉じたボタンが弾け飛びはさだめて。

「……ああ、ははは……」

女は、左目を利那、見開いて。

「ああははは、くはははっ！ これはこれは、ようこそ戦女神！ 運がいいわ、貴様のほうから来てくれるとはね……」

嬉しそうに、笑い出す。

「くっ、き……きさま、まああ……」

ぎらりと輝くサーベルを、紅い女へと突きつける。

〔赤髪〕 ヒルダ・ロージャッテ!

その紅蓮のような髪を見て、ノエルは敵を看破する。

〔あ〕 戦場の悪魔、死を運ぶ紅。

〔は〕 はははははははははは! あなたたちの

王の死に様は見物だったわよっ! 私を銃を向けただけで、泣き喚き命乞いをしてきたわ!

口の端を吊り上げてヒルダは笑う。〔靴を舐めると言えは、卑屈にも探り寄ってきたわ。さすがはヴイスバの王よねえっ! はははははははははは!〕

重たげな胸を揺らし、身体を震わせ、心底愉しげであった。

〔貴様はっ! 降伏勧告すら行わず、

一国の王を射殺したのかっ!〕

「はっ! ヴイスバに、降伏など不用っ! 害虫は駆除するだけだっ!」

もう、その声が耳障りだった。

床を蹴る。剣の切っ先が、ヒルダの喉元へ襲いかかる。狙いすました剣突の一撃から素早く身を逸らすヒルダ。

「おやおや、降伏勧告は?」

「黙れっ!」

横へ薙ぐ、一閃。それもまたかわされる。だが。

〔反撃する暇など与えないっ!〕

剣突——斬撃、フェイントからの打

撃。鍛え抜かれた肉体が躍動する。

「くっ!」

焦りの色が、ヒルダに浮かぶ。塞がった右目が足を引く張っているのだろう。戦闘服のあちこちを切り裂かれ、日焼けした筋肉が露わとなる。

「はあっ!」「くうっ!」

そしてヒルダは剣撃を避け損ね転倒する。勝機であった。追撃を。

「——っ! きさま……っ!」

振り下ろした刃は、寸前で止めさせられた。

盾となる、王の亡骸の寸前で。

プシュッ!

「うあうっ!」

刹那、顔に何か吹きつけられた。たちまち眼球と鼻孔に強烈な刺激が駆け抜けて、涙がぼろぼろと溢れ出す。

「ううっ、卑怯なっ!」

視界が歪む。頭蓋の奥で、きいいん——と何かの鳴り響く。

「卑怯お? 何を甘いことを!」

「がはあっ!」

強烈なヒルダの前蹴りが、腹筋を貫き内臓にまで衝撃を叩きつける。床に涎を吐き散らし、後ずさるノエル。

「ぐう、ううおっ……!」

胃の奥から、灼熱が湧き上がる。膝から力が抜けていく。ダメだ、倒れてはいけない。踏ん張らないと……!

「う——うあっ!ぐううっ!」

だが、背後へと回られ、髪を掴まれ引き倒される。指先を踏みにじられ剣を手放すと、それは蹴り離れた。

「あはははははははははは!」

笑いながら、ヒルダはその爪先で、何度もノエルの腹を蹴りつける。苦悶に、美貌が歪み、四肢が戦慄く。

「ぐ、ぐ、きい……っ、はっ」

「ノエル……私の右目に……!」

「ううやく、この手の中に……!」

顔を、固いブーツで踏みにじられる。頭蓋が、軋む。

「簡単に殺しはしないわ。私の屈辱を、

痛みを、その身に贈ってもらうわよ、ノエル……!」

「粘ついた、血のように濃い怨嗟を吐

き、ヒルダは嗔う。それは、この先の絶望を予感させるような、暗い哄笑であった。

後ろ手に縛られ、左右を兵に囚われ

連行されていく。

見慣れたヴイスバの城内が、何か別のものに見える。このまま、牢獄にでも繋かれるのかと思っていたのだが、果たして辿り着いた場所は、一つの執務室であった。

中へ押し込まれる。そこには、

ヒルダと、彼女の前に、卑屈な笑みを浮かべている、ゴルム大臣の姿があった。

「もうそれで、全てを理解する。

「ゴルムっ! 貴様あああっ!」

叫び、飛びかかろうとして、傍らの兵に床に組み伏せられた。

「はっは……無様ですなあ」

ノエルを見下げ、嘲笑するゴルム。

「さて、ヒルダ様? 情報は確かだったでしょう、次は私の報酬の番ですよ」

「ああ。そうだったわね。ええ」

と。ヒルダは——その顔を艶治に歪め、ノエルのそばへ歩み寄る。

「あなた——こいつにご奉仕さない」

そして、そんなことを、言ったのだ。 「……何、を?」

意味が分からず、問い返すノエル。

「だから、この男を飲ばせると言ったの。分らない?」

「にこりと——ヒルダ。」

その意味が、徐々に脳に染みこんで、ざつと奥歯を噛みしめる。

「わっ、私を愚弄するなっ! そんな恥ずべき真似をするくらいなら」

自決をする——その覚悟は、ある。ノエルの胸中を察したのでろう、ヒルダは鼻で笑い、兵士に何かを指示した。飛び出した兵が、ややあって、戻ってくる。

一人の、貴族の男を連れていた。

顔は、知っている。名は——なんと

いったか。

「あ、あのお……」

床にはノエルが組み敷かれ、ゴルム

大臣が、敵と思しき女と仲良くしている。その状況が理解できなくて、男は

ただ、曖昧な笑みを浮かべるだけだ。

「もう一度聞くな、ノエル大尉」

と、ヒルダ。

「本当に、奉仕する気はないのね?」

「……当たり前だ、そのような」

01 FOUN



ちちよっと
待ってください!

何だ…

何がおこった!?

ガッ

沈黙するナリカは

現時点ではバイタル
オールグリーン

戦闘服の再構築に
ついては—

術式回路が切断
されつつあります



…し…っ



はっ!?

どうした!?
報告しろ
スズモリ!!

ガッ

識別信号

青…!

な…!?

小難しい理屈は
知らねえが

ありやあ
見慣れたモンだ

何か憎くて
しょうがねえ
奴の目だ

青…って…怪忍…って事か!?
ナリカが!?
機械の故障じゃないのか?!

ありえなくは
ないですが回路の
断線が酷くて…

とにかく外的な何か
がナリカさんの何かに
作用して…

それは…

ナリカさん



好評発売中!

単行本第一巻

超次元戦士 ミスブラック

MISS BLACK

原作 アリスソフト

©ALICESOFT

外法印を
……!?

どうして…
あなたが



ナリカさんの
状況不明です!

術式回路
完全に断裂

四道城「青龍」の構造が崩壊しはじめました！

瘴気濃度の低下により封結界の圧力に耐えられなくなりつつあるようです

居待月「遊器栗」

凶凶凶

あう…
うう…

痛い…
いたい…

ナリカさん
しっかり！

ひい!?

ややだ

また
生えてるうっ!?

嫌あああああつ

あつ！

ズル

出っくらー！

もう出てって
よお！！

ええい
城主が負け犬なら
城まで使えぬのう

やめじゃ！

興が削がれたわ

ま待ちなさい！

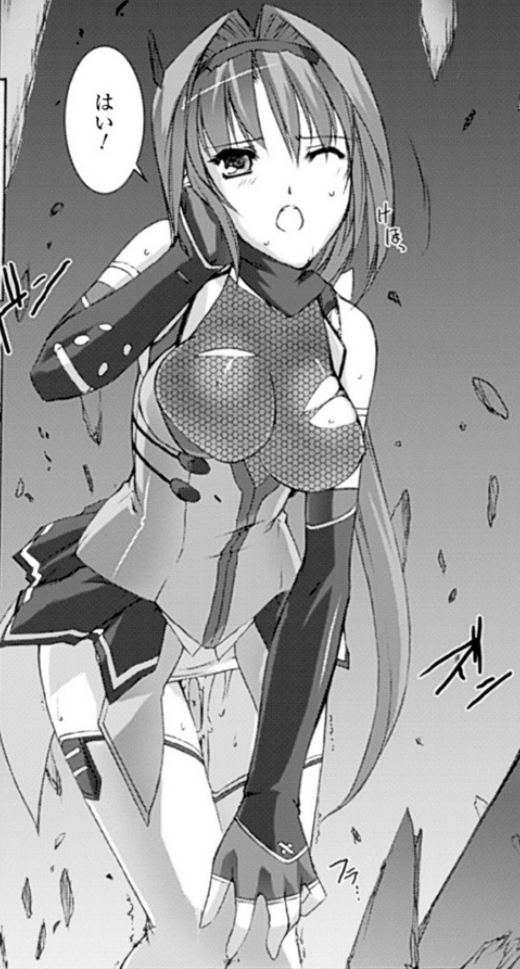
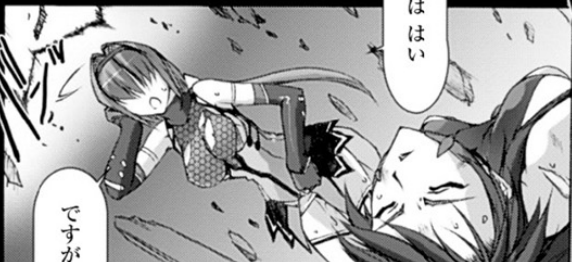
吠えるな雌犬

その首しばし
預けてやる

…力

く…っ

聞こえるか
ハル力！



今閃忍全てを失って

ノロイ党と
闘えるのか…!

たすけて…

ハルカさん…

あたみたい…
おちんちん苦しい…

タカマルの声が…
聞こえないよ…

あ…

あ…!

ああっ!!

…ル…

タカ…ル…う



ナリカが
生きてるんだよ！

声
が
す
る

青龍城の崩壊が
止まりました
何らかの…
恐らく四道封者級の
…その…何者かが…

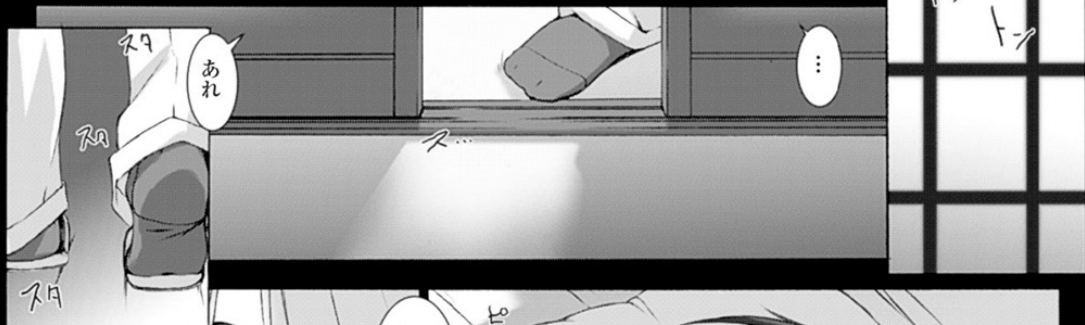


メール…
ハルカさん？
…



…くそ…
うまくあわない
ナリカ…っ

…そうか



触手愛する暗殺姫

闇騎士リオン

小説
NOVEL

さくらそら
桜空

挿絵
ILLUSTRATION

BLASTBEAT

媚肉を焦らし蕩かされ、気高き暗殺者は
やがて自ら触手にしゃぶりついてゆく――

「くひい。そこ弱いの、感じちやううう」
 中でもつい三日前に飾ったばかりの細剣は見事で、部屋の主も気に入っている一品だ。全身黒塗りの直刃で、光る事のないよう丁寧に漆黒に染め上げられた刃は驚く程切れ味抜群である。驚異の軽さを誇っていて腕の細い女性が扱うには適していそうだ。

そしてその使い手が今、屋敷の主の腹の上に跨り跳ねている。
 「んあつあひ気持ちいい、気持ちいいの。もつと下して下さいロスク様」
 ロスクと呼ばれたのでつぶり太った貴族は、嬉しそうに女と繋がる肉棒を動かして奥まで突く。

彼と繋がりが、悦びを全身で表現する女性は、すれ違った人間は男女問わず誰もが振り返る美貌の持ち主であった。腰まで届く長い長い銀色の髪はさらさらで流麗に揺れなびく。顔は小さくシユッと先鋭の、切れ長の瞳が今でこそ垂れてはいるが美しさを損なうものではない。鼻梁の通った鼻は高く様に立つており小さな唇は紅く気高い。「はああああ。うきゅつ、あつアン

あん奥ま、ひやおう」

本来凛々しい女性だったろう銀髪美女は恍惚に湧け、その美貌の全てを口スクリに捧げていた。
 「ぐふふ可愛いのうリオンは」

「ふあひ、ありはとうほらいます。ロスクリやまの触手手」
 「はひ、私触手手」
 騎乗位で繋がるリオンを下から押し上げるように突くと、スタイリッシュな身体に似合わぬ美巨乳が揺れ弾む。

だがそれだけではない、リオンの口を責めるのは床より出現した長く赤黒い触手。人外の長肉棒を口腔に含み舌で亀頭を舐めカリ傘を擦って滲むカウパー腺液を啜り飲む。
 不気味さなど微塵も感じていない様子で、むしろ愛しい恋人にするように猥褻的に尽くす。
 はしたない音が部屋中に響き濃厚な牝のフェロモンが女から発せられて部屋を満たし、汗でテカる女体が妖艶で彼の視線を釘付けにする。じゅく、じゅぶつと股間の結合部で鳴る愛液や精液の混合液の淫音に恥じる事なく腰を大胆にグラインドさせる。
 「んきゅうううううう、そほおとおおおそこっすこ！ ああういいのオ」

腔内で自在に形を変え角度を変える異形の触手肉棒が彼女の弱い部分を擦って、淫乱な腰振りが激化。触手ベニスからエキスを搾り取ろうと膣壁が蠢き、抱きしめて男を悦ばせたま自らも悦楽に表情が蕩ける。

触手が女陰の中で子宮口を叩き発情した牝を嬲り、対抗して口腔をまさぐる肉蛇に鼻息荒くフェラチオに励む。
 「んじゅじゅず、ふあつんぶ、ロスクリの触手手」
 「ポおいふい」

「そうか美味いか、ならじつくり味わうがいい。リオン的大好物だからな」
 「はひ、私触手手」
 甘い媚びた視線をロスクリに絡ませとろつとろに甘い吐息と声が彼の脳を、刺激する。
 「だったら——」

透明な液体がなみなみと満たされている小瓶を手に取り見せつける。
 「これはもう要らぬであろう？」
 「はい。そんな物なくても私は幸せです、ロスクリ様」
 特別甘えた声で彼の名を呼ぶ。
 (あれからもう一ヶ月……)

ざんつ！ 漆黒の直刃が眼前に迫り悲鳴を上げる暇もなく斬られ、腰布がふわりと舞いその後には兵士が倒れる。呻然としている隣の見張りに数瞬で詰り寄り、素早くすくう様に首筋を断つ。
 「五人目。少しは減ったか」
 息をつくとき大きな胸が揺れる。
 「遠くで怒号が飛び交う中、隙を突き窓を割って廊下に飛び込む。廊下を素早く駆けると腰布が舞い麗しい太腿がちらりと覗く。

時刻は夜遅く、辺りは闇が支配し道行く人は存在しない。ミクレイアの王都ファイノ、その都市部からはやや外れた郊外に位置する大きな屋敷だけが喧騒に包まれていた。
 「やつと、やつとこの日が来たのか」
 全身に黒を纏いて黒に身を包んだ復讐の闇騎士は想いを堪えきれず咬いた足元は黒のニーソックスが隠し、絶対領域からは透明感のある白い肌が覗く。黒の胸当てで腰当てに黒のマントと黒の仮面、だが復讐に燃える双眸だけは隠しきれずぎらぎら仮面の内側で輝く。
 「ひつ」
 小さな悲鳴が漏れる。たまたま通りすがっただけであろうメイドが血塗れの銀髪騎士を目撃して立ち竦む。
 「静かに。騒がなければ傷つけるつもりはない、ロスクリの部屋はどこだ」
 「二階のお、奥。行けばわか、わかります」
 主に不満でもあるのか怯えつつもずんなり教えてくれた。
 無駄に派手できらびやかな美術品を横目に呆れていると、確かに行けば分かった。ここでずといわんばかりに周りと違う豪華な扉。
 その前に一人の細身の男、明らかにその他大勢のボディガードとは違う雰囲気を持っている。
 「本当に一人とはな」
 扉の前の男が意外そうに呟いた。一日身を隠したつもりだったがどうやら気付かれていたらしい。
 男の持つ武器は刀、最近東方の国よりもたらされた武器だが、美術品とし

て扱われる事が多い。

だが、どうやらあれは只愛でるだけの美術品嗜好品ではないようだ。鞘から抜いていないがなんとなく分かる、あれは人を殺す為の武器だ。

「最近噂の闇騎士か」

「そうだ」

男と正面から対峙する。筋骨隆々の大男であったなら柔な相手だったが、そうではない。ひよろつとした長身で、細いといつてもいいぐらいの体型で手足が長い。

（カタナといい体型からしても抜刀術か……）

制空圏が広ければそれだけ有利という事に繋がる——実力差が明白であれば関係ない——が、さてどうしたものかと悩み出した答は——

攻める。まず攻める、それだけ。

足に力を入れて踏み込み、剣を振り抜くと同時に彼も閃光の如き速さで抜刀。鉄と鉄のぶつかりあう鈍い音が廊下を駆け、飛び散る火花が互いの速さを物語っていた。二人とも一歩も譲らず刀と剣を押しあい、噂が明かないと踏むと同時に引く。

男はほくそ笑む。闇騎士は仮面の下でも微笑まない、それがダーククナイトの闘い方だからだ。

「重戦車、ケルニクを屠つた化け物もこの程度か。噂程ではないな」

もつとスリルを味わわせてもらいたかったんだがなど続け、いよいよ勝負を終わらせにきたのか再び刀を鞘に仕

舞う。

「勝手に人の限界を決めるな！」

ぐつと足に力を溜め、一気に解放。だんつと地を蹴りマントをはためかせ、稲妻より速くポディガードの腕に潜り込み剣を振る。男の右腕が驕に潜る首を水平に薙いでいき、唇を歪ませたまま右腕を振り抜いた。

「遅い」

勝利に歪めた三日月の唇から悲鳴が滑り出る。

「せいやああああああああ!! なぜ、なぜだ」

振り抜いた彼の腕は肘から先が存在せず、故に、振り抜いたところで血がびしゃつと仮面にかかるだけに終わる。肘の骨と骨の間、関節の繋ぎ目を神業で切断した断面からは血が激しく噴き出し、肘からは黒騎士の遙か後方の事態を理解し表情の強張る男の視線の先には血の付着した仮面の黒騎士——漆黒の細剣が振り下ろされた。

「スリルは味わえたか？」

胸を張り脇を抜ける。男は過ぎた背中で膝をつき、頷れた。確認することもなく一際豪華な扉を開けた。

「ひっ?! お、お前は一体何者だ。誰かおい、誰かおらぬか、早う来い！」

廊下での状況に気付いていたのだから、扉から遠く離れた間いかける。

「闇騎士。お前を地獄へ案内する者だ」

「誰に頼まれた、シィグル公爵かそれともイザベルか？」

「はっ、クスは心配事が絶えないな」

肩を練め首を左右に振る。

「金、金なら依頼した奴の倍払うぞ。これでどうだ」

女性を好き勝手に弄び金で全て済ませようとする、様々な黒い噂が絶えない醜い男は、政財界にまで及ぶ影響力で何一つ罪に問われていない。

「金では動かん、安心しろ。薬には殺さないからな」

交渉が決裂したとみるや顔を真っ赤にし逆上する。

「こんな事をしてタダで済むと思うな！」

「こんな事とは……こんな事、か？」

神速、且つなめらかに切断。斬り口が完璧過ぎて出血もなく斬られた本人でさえ未だ気付かない。

——カッソ。

大理石の床に靴を打ち鳴らす、すると脂肪だらけの右手が落ちていく。

「ヒィヒィヒィヒィヒィヒィヒィヒィヒィ!! てっ、ウシの手がああああああ」

泣きじやくり喚き散らす口スツクに対し、仮面を取り素顔を見せつける。

「痛いのか、だがアドルの痛みはこんなものではなかったはずだ」

「お前は……っつ、リオンデルナターシャヤ!!」

正体を知った口スツクは驚愕する。

「本当ならリオン・デル・アーサーになっっているはずだがな」

市民を守るフィーノ騎士団の前団長、アドル・イシユ・アーサーはリオンの

恋人だった。彼が団長でリオンは副団長として活躍していたが、彼女は婚約を機に退職していた。

アドルが騎士団のバトロンドった口スツクと呼ばれた家を出ていったのは結婚式の一ヶ月前。

結婚式を控えた幸せの絶頂で彼はそのまま姿を消して、未だに死体も発見されていない。生きている確率もゼロではない、が絶望的であるのは明白で、皆次の恋愛を勧めた。

でも真相が知りたいて、その一心でどんな汚い事でもやってきた。悪事を働く人間の情報は汚い事をしてこそ得られるというもの。

特定の主を持たず誰の依頼だろうと請け負い誰でも斬り、暗殺してきた。それが善人でも悪人でもミキレイアの英雄だろうと。そして気がつけば件の二つ名持ちになつていた。

（おかげでもう純白のウエディングドレスは着れそうにない）

ただ口スツクを殺す、それだけの為に「行方不明と聞いていたが——」

「言え、アドルをどうした」

眼光鋭くグレイの恰かな瞳で睨み高い聲で詰問する。

「アドル? 知らないな」

「とぼけるな! あの日、あの晩貴様

が呼び出したのだろうっ」

「ああ、あの小汚い騎士か。さあなあちゃんど帰したはずだが、その辺の女にでも惚れて逃げたのではないか？」

とても追い詰められて生命の危機に

潮している人間の態度ではない、が、安い挑発を受けてリオンは動く。

眉をびくりとも動かさず唇は凄艶な微笑を演出。威圧するように迫り胸を袈裟懸けに斬り、噴き出した血が腕や顔に勢よくしぶいて一層水の微笑に涙みが増す。

「ぐをおおおたす、助け——」

どこまでも深く暗く冷たい瞳で恋人の仇を見つめ、

「死ぬ」

「あが、ぐはっ」

身体ごと飛び込み漆黒の細剣で胸を刺し貫いて全身に濃厚な血を浴びる。

剣を抜くとロスクが数歩下がり、仰向けに倒れ血が床に広がる。感慨深くもないが死体に視線を投げかけ、確認だけして部屋を後にしようとした。

結局真相は闇のまま。

「……アドル」

仇と対面したからか、いつもはこれくらいでは汗もかかないのに呼吸が浅く身体がどこに濡れていた。帰って水でも浴びようとか、終わったものと油断していたのでその接近を許してしまった。

「なんだ?！」

何かが後ろから足首に絡みつき引つ張られて血の海に手をつく。身を捻り足を引き抜こうと足掻く。黒剣で切り離そうとしたのだが両手も黒色の手袋ごと柄め捕られ、四肢の自由を奪われてから立たされる。うねうねと揺らめく触手が地面から這い出ている。

「まさか」

死体に視線を向けると胸に風穴開けたまま立ち上がるロスクの姿。腕を振り身体を振り必死になって抜け出そうと焦る。

「この触手……魔蛇肉槍と契約していたのか」

苦笑しげに呟く。

「単体では何もできず、気配さえない魔物だな。それ故に扱い易い」

見る見るうちに傷は塞がり右手も繋がって無傷の状態でリオンの眼前に立ちはだかる。

いきなりだった。

「丸む!!」

唇を奪われた。舌が口腔を這い回り怖気に毛が逆立ち、正気に戻って嘔み切つてやろうとしたら離れていき、反撃の機を逸して吐き捨てる。

「下種が」

「そう言うな。いい事を教えてやるんだからな」

「いい事だと、貴様がか? フフ、冗談は顔だけにしてくれ」

青筋立てるロスクだがぐつと堪え、引き撃らせた顔が不気味に笑う。何か不穏な気配を感じた。

「あの日は頼み込んだのだ、頭を下げてな。だが奴は断りおった。だからあなになってしまったのは断つた奴が悪い、自業自得だ」

「(なんだ、なにを言っている? なんの……話だ) 急な展開に脳がついていけない。な

のに彼は独り善がりはまだ続ける。

「ワシは騎士団にいた頃からリオン、お前を欲しいと思っていたのだ。だからリオンを譲れと頼んだというのに、このワシがだぞ。なにに奴は拒みおつた! ま、当然の報いだな」

血の気が引いて殺気が漲り、どす黒い感情が渦巻く。

アドルは私の為に、私の所為で。

「…………るな」

「ん?」

「ふざけるな! そんな事の為に……」

「そうだそんな事の為に魔物と契約して、ずつとずつとお前が来る今日という日を持った、待ち侘びたぞ!!」

左の胸当てを触手に叩き割られ、剥き出しとなった下着ごと、強く掌で握り潰さんとばかりに圧搾されて形を変えるふくよかな乳房。

「全てはお前を手に入れる為だ、リオン。仮面を取った時嬉しくて震えそうだった、狂喜乱舞したい気持ちを抑えるのは苦勞したぞ」

(全てが最初から仕組まれた罠だったのか。くそつくそくそ)

最後の最後で油断した己に腹が立つ。触手に嘔みつき足を抜き振り解こうと躍起になるのだが、びくともせず拘束は解けない。

自己嫌悪に陥っている最中だというのになぜか股間が、子宮が疼く。カモシカのようにすらつと長い美脚をもじもじとすりあわせ、どこかそわそわし

ていた。

「因みに言っておくとワシの血は強力な媚薬に変換されるぞ? ぐつふふあれだけ浴びたのだ、さぞや悶えてくれるのだろうな」

信じ難い事実を告げられて愕然とし、納得するともにも安い挑発に乗らなければよかったと運過ぎる後悔に胸を痛める。

「やはりエロい身体をしておる。この身体を今から自由にできると想像するだけで興奮が収まらぬわ」

首筋を生温かい舌が這って嫌悪が込み上げ、汗を舐めとられて眉を蹙め不快感を露にする。

ブラジャーがずらされ真円で大き過ぎず小さ過ぎない、芸術的な乳輪に愛らしい乳頭が視線にさらされる。舐められて怖気が背筋を這い、こうなつたら声を漏らすまいと必死で口を真一文字に引き結ぶ。

びくくん、びくんと反応してしまふ女体、盛り上がる乳輪を男の汚い舌先で觸られる。

(気持ち悪いのに身体が、熱く火照ってくる。う、ああ)

媚薬血液はとっくに身体中を巡り黒いショーツがしつとり濡れるまでになり、マントや髪も汗で肌張りついて不快。

それに目敵く気付いたロスクは銀色に輝く髪をマントの外側に出して不快から解放した。マントは依然張りついたらまだがいたし方あるまい。

「よせ、私に触れるな！」

嫌悪感を剥き出しに吼える。だが、
「……………」

呼吸が荒くロスクが太腿を撫でた
だけで息が詰まりそうになる。過敏な反
応を示し、奴の思う壺だと考えると腹
立たしい限りだが耐えるしかない。少
しも集中をきらすとはしたなく甘い
嬌声が漏れてしまいそうで怖い。

過度に躍る女体、その都度解放され
た髪が流麗に跳ねてしやしらしら微か
な女騎士の身体から汗が飛沫となっ
て散った。

ショーツの上から秘裂をなぞられる、
それだけなのにぶわっと汗が噴き出す。
どんどん吐息が甘く桃色に、鼻息荒く
脳内にピンクフィルターが貼られその
割合は増えていく。

「こんなに敏感だというのいつまで
そうしていられるかな。ほれ乳首も勃
起してきたぞ」

一度手を休めると憔悴しきった表情
で息をつく。そんな彼女の姿を目に焼
きつけてほくそ笑み、豊乳の先端、桜
色にほんのり色ついた乳頭を勢いよく
赤ん坊のように吸いついばんだ。

「ふああ乳首、乳首吸うなっんゅう」
「気色悪い、だがそれ以上に乳悦を感
じていた。」

がくがくと長い足が揺れ無様に震え
る。ロスクがぐしょぐしょに濡れた黒
のショーツを太腿の付け根までずり下
げると、ショーツから解放された銀の

草薙がそよぐ。

「待ちに待ったリオンのマコ、とく
と拝ませてもらうぞ」

「くそおみ、るな。見るなこの下種！
」
股布を膝下まで下ろすと切望してい
たヴァギナが姿を現す。大陰唇の周囲
は濡れ、白磁器の如く白い肌に紅花が
咲き映えるヴァギナはどろどろに湧け
ていてじつに美味しそう。

ロスクの唇から思わず涎が垂れてこ
くつと喉が鳴る。
ペロリと秘裂を縦に舐められるおぞ
ましさに身震いし顔が青褪める。
膣内に舌を割り入れ悶々までまぎぐ
られて気色悪さや嫌悪に拒絶恐怖、そ
ういった負の感情が溢れる。

襲を撲り肉壁をさらつく肉厚の舌で
舐め、じゅるると吸られて口がやつ
と離れていく。
「ぐふふ美味。美味じゃたまらんな、
色んな女を貪ってきたが格別で特別な
マコだ。くんくん、ふひひ芳醇、且
つ濃厚で匂い味ともに絶品かな」

仇に恥部の匂いを嗅がれ羞恥に頬を
染める。ひくつく女陰からは淫液がと
ろと湧き出してきて広い部屋の中発
情した香りが深い充満しつつあった。
「どここの匂いを嗅いでるんだ愛慾！」
「このような屈辱、くううう……許し
てアドル」

口汚い言葉とは裏腹に肉体は牡に感
化され始めていて、ジンジンとそこか
しこが熱を帯びていた。
悔しさを内心に押し込め唇を噛む。

「ではそろそろいただくとしよわか」

何を、と問うまでもないが激しい憎
悪が込み上げてきて信じたくなかった。
ロスクが床に寝転がる間に拘束して
いた触手が活動を再開。

女性体とはいき長身で鎧も着ている彼
女を唇と持ち上げる。M字開脚で両
手を頭の上で括り、宙に吊って彼の下
腹部の上まで移動させる。腰をくねら
せ動かない手足をばたつかせ必死に抵
抗するも触手は意に介さない。

眼下に広がる視界の一部に見ては
いけない高くそり勃つ肉棒を目にして
息を呑む。
「……………」 やめる、それ以上近づけ
たら殺す！」

緊張、これから犯され感じる事実に
絶望。高まるそれらの気持ちはどれも
が事実で認めたくはないけれど、欲し
いと思ってしまう自分も存在して
媚薬に子宮が疼く。

ちゅぐ。亀頭と秘裂が触れあうと濡
れた音がしてリオンの耳に強く響く。
身体は降下していき拒絶する間もなく
肉棒を半ばまで咥え、呻く。
「ぐふふリオンのマコがワシの魔羅
を呑み込んでいきおるわ。どろどろで
すんなり挿入していきおるが、そんなに欲
しかったのか？ スケベな女だ」
「くううう、あんツ。スケ——!! 照
れそんな訳ないだろ、これは貴様の血
の所為だ！」

熱くて灼けてしまいそう。肉の塊が
埋まっていく女陰も灼熱で溶けそうだ

し心も肉欲に湧ける感覚に襲われた。
虚勢を張る事でなんとか気を保って
はいるが時間の問題かもしれない、弱
気な考えを懸命に振り払い敵を睨みつ
ける。

「まだそんな瞳をできるのか、想像以
上の女だな。強気でいられるのも今の
内だけれど、もう少しでその凛とした
美貌が濁るかと思うと……ぐふふ」
（ヘンな想像するな、ああ私の膣内で
また大きくなっていく）

「ひ、イあ……奥まで届いている」
触手に押さえつけられるようにして
陰茎を最奥まで咥え込みその巨大さ、
長さ硬さに女陰はもうメロメロ。加え
て復讐の為に努力し続けた結果、久々
の牡に身体が本能として喜び、媚薬を
受け入れた。

奥まで挿入され息が詰まるというの
に触手はおかまなしに上下動をさせ
る、これではまるで……。
（まるで私が奉仕しているみたいじゃ
ない）

触手の上下に合わせてリオンの身体
も上下し抽送しているみたいに映り、
ロスクも一時の満足は得たものの肉體
の深い満足とは程遠く、自ら律動を
開始する。

「ひっぴん、あああうう、動くな！ そ
れ以上腰を振るなあ」
胸に、刺さる。心の奥底アドルしか
触れていない部分が抉られて苦しい。
痛。アドルとの絆が踏み躪られる。
腕を括つていた肉塊が二の腕や手首

の手袋に巻きついて、胸の前で待つて
いる他よりも大きく逞しい触手を強制
的に握らせる。

「おい、やめる何させる気だ！」

両手で極太の一本を掴みしゅつ
しゅつと前後動きせられる。肌触りの
いい手袋がカウパーにぬめり恥垢がこ
びりついていく。

むわつと臭う汚臭に吐き気を催し不
快極まりないが強く歯を噛み締めて堪
える。

「あつかひ。いざい！」

下から上へ突き上げられるだけで脊
髓を駆け抜け脳みそを掻き混ぜられる
そんな快感が脳を揺らし今度は脳から
全身へ伝播する。

荒々しいピストンで穿たれ肉壁を刮
ぎ削られ、快楽の嵐に流されてしまふ
直前唐突にピストンは止まる。

肉欲の淫熱は昂つたまま蕩けた視線
を彼に向けて。すると大きく肩で息す
る黒騎士の双眸にソレは映る。

「ぐふふ一本では寂しいじゃろ。どれ、
別の穴にも媚薬を直接塗り込んでやる
うかの」

一際赤く細い触手が下半身へ接近
元々赤いのではなく赤黒い極細触手が
彼の血で染まっっているのだと理解して
も既に遅く更に恐慌に陥る。

「や、やめやめろ！ 今そんな物を入
れられたらああひん、ひやくう。そん
なところに!? こわ、れる壊れるか
らっああああああああああ」

尿道口への極細触手による異物挿入

は不快ではなく圧倒的なまでの快楽
だった。違和感を覚えたのは挿入して
一往復するまで。

尿道責めという異常、恐怖が銀髪の
騎士を女性へと戻す。

「あ、あ……やめ、て。やだうそ、こ
れヘンだからっくひい、嫌ああああ
ん擦れてる、二本が中でござれ、ん
んっ」

奥へ進むと尿道に擦れて電気が走っ
た。歯を喰ひ縛って耐えようとするの
だが、軽い摩擦だけで腰がかくくか
んと揺れる。

肉の壁を隔てて擦れあう灼熱の牡楕
に意識が白濁、ぐずぐずに蕩ける。全
身が火照り熱に包まれた乳頭が痲り勃
ち胸当てを押し上げる。

肌に付着しただけでこんなにも発情
しているのだ、体内に、粘膜に直接摺
り込まれればとだけ狂ってしまうの
か想像さえもしたくなかった。

「そんな物を入られたら気持ちよ
くてイってしまいそう、か？」

嘲笑する声とともに尿道孔への抽送
が始められた上、肉壺へのピストンま
で再開されて煩悶する。

「そんな事あるもんか、ふざああアン
アン、なんで気持ちいいの？」

剛直が胎内を挟り穿つ、それだけで
も感じってしまったのに尿道を犯さ
れる人外のセックスに背筋がぞわぞわ
と浮き肌が粟立つ。

そこへまたも極細の肉紐が動き、大
きく勃起している肉芽に巻きついて

キュッキュと締めつける。
「そこだめえ。そこびんつかんだから
にやふっ」

可愛らしい喘ぎ声を上げるリオンの
声をもつと聞きたいと二穴への責めを

苛酷なものに聞きたい。速くりズミカルに
突き触手が引けば剛直が突く、剛直が
引くと触手が突き、慣れてくるといき
なり二本同時に奥まで穿つ。

充血した秘芽への責めも加わり三重
奏が奏でられ、苦悶の表情を浮かべる
リオンを下からロスクが満足気に眺め
ていた。

「こ、こここんな、くヒイイイイ
イ！ あつあすご、凄いなこれこん
なの初めて。ふああだめ、だめだ」

下から突き上げられて嬌声が漏れ出
てしまう。堪えようとしているのに彼
女の気持ちなど無視して反応する情け
ない身体を恨めしく思いながらも、懸
念に声を押し殺す。

強靱な精神力と想像を遥かに超えた
憎悪で、肉体は感じて心までは許さ
ない。

太い陰茎にヴァギナを拡張、襲が押
し潰され苛烈な上下動にカカリが襲を削
り亀頭が子宮をノックする。

速いだけでなく尿道への抽送は焦
れつたい程にじっとりくねつこく、
それでいていきなりトッススピードへ
加速して予測不能の抽送が襲う。

「尿道がおかしはあ、奥までつ膀胱
に届いて、るんきゅううう」

普通ではあり得ない尿道の圧迫に内

側から削られる異常が彼女の理性を溶
かす。

「貴様なんか屈する、ものか！ ん
ふうううう、んんっあついい」

眉を顰めぐずぐずしに蕩けた思考で、
しかはつきりと拒絶するリオンに彼
れ目を見開き驚愕した。驚くロスクの
陰で彼女はこぼりと湧き上がる一つの
肉体の欲求にぞくぞく震える。

（あつあ……おしつこしたくなつ
ちゃった。どうしよう耐えないと、こ
いつの前で漏らすなんて絶対にイ
ヤ！）

自覚したが最後、ぶるるつと震え尿
意はどんどん切迫してその衝動は堪え
難いものにまで成長していく。

ごり、ごりり！

脳にまで響くピストンに跳ねて波打
つ長い髪、たぶんたぶん揺れる巨乳
噴き出した珠の汗でテカる艶かしい女
体。

吐き出される吐息までが色つぼく牝
へと生まれ変わろうとしていた。

先走り汁でぐしょぐしょの手袋とす
れて粘着音が忌々しい。だが手は脈打
つ静脈伝いに摩擦、胴幹から亀頭まで
扱かされる。

女騎士はされるがままではない、無
意識だろうが抜き差しに合わせ腰をく
ねらせ身を振って敵を惚はせる。

「どうした、ワシの動きに合わせて腰
が淫らにくねつておるぞ。そんなにお
ねだりして、欲しいのかワシの触手が」
「そんな訳、はあはあ……ないでしよ。」



ナマコ男よ

やーって
おしまい!

人間どもを
苦しめろ!

貴様らの負の
エナジーを
大首領様に
捧げるのだ

行くわよ
タマ吉!

ウーン?

お待ちな
さい!!

M A I D
メイド

I N
イン

悪を正付け平和を守る
正義の魔法メイド登場!

平和を乱す
悪者め

わたくしが
綺麗にお掃除
してさしあげ
ましてよ♥

まじかる
魔法メイド
さくら

参上!!

まじかる

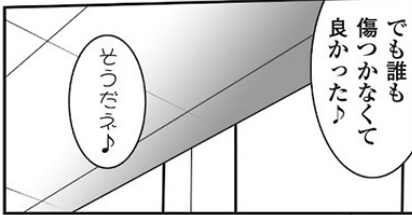
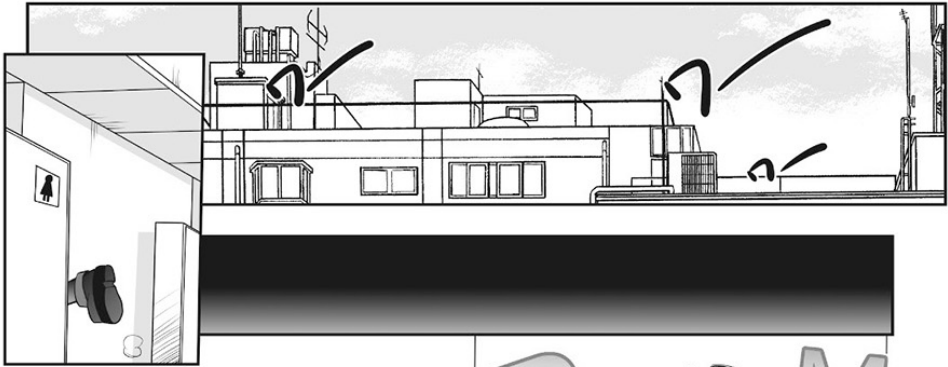
魔法メイド

さくら

漫画
COMIC

ぱふえ









どどど
しましょ？







あーあ

うおお

あーあ

そのまま
吸いながら
奥まで



あーあ

ん…ふ
ん…う

早く早く



あーあ

なっ!!
口…で?

それじゃあ
くわえてよ



くそっ
早く替われ

あーあ

ふん…
ふう



そんな女では
ありませんわ

初めてですの

あれ? 結構
慣れてね?

すっげー
魔法メイドの
フェラ奉仕だ

おー!
たまんねえ

んく

ん…っ
ん…ん



早く…
早く…
早く…



みなさんを
助け出したい
だけですの!

うおおッ
舌すげッ

あーあ

あーあ

あーあ

あーあ



しほ...が
うは...ああ

おおお

吸いながら
頭...して
そおっ



出るっ



さくらちゃん
飲んで!!



んんん

んんん

んんん

んんん



やっと
一人…目

うええっ
苦い…
ですの



良かった
ですわ♡
助かって

さ次に
ご奉仕して
欲しい方は
どなた
ですか？



きや

俺もっ
俺も

次は
俺だあ!!

ごぉごぉ
もっ遠慮
しねーぞ!!

ちよっ…
待って



ソーサラー アトリア

Sorcerer
Atria

師匠と触手と
ツンな弟子

師匠が触手になっちゃった!?
禁断の解呪に巨乳の愛弟子が挑戦します!

小説
NOVEL

せんやよみ
千夜詠

挿絵
ILLUSTRATION

DigDug

王都より西方に位置する深いブラツクウッドの森は普段はその不気味な様相に反して、心穏やかな動物達の住み処である。静まり返り、ただ微かな生物の息遣いと気配、時折吹く風の音だけが聞こえるそんな場所である。嵐を予感させる暗雲が空を覆いつくした本日においては、獣も鳥も昆虫も、皆避難するように木立の陰に身を潜めていた。そこに突然甲高い叫びが木霊する。「キユーブバインド！」

森の中央を流れる小川の辺で、大空を飛び異形の魔物がその動きを完全に封じられた。石造体の肌と質、二足歩行であつて大きな蝙蝠に似た翼と鋭利な鉤爪を持ったガーゴイルである。目に見えぬ魔法の箱に閉じ込められ、変わらぬはずの表情に確かな焦りが滲んでいるように思えた。「てこずらせてくれませしたね。今案に壊して差し上げます」

灰色の瞳が捉えたのは若い人間の女だつた。ゆつくりと距離を詰めてくる彼女は、非情さを滲ませる瞳で魔物を見つめ、左手を翳して束縛の呪文を継続させている。可憐な容姿に少し大人びた雰囲気を持った少女だつた。琥珀色の長い髪をツインテールに結わしている。涼しげな瞳もまた琥珀色をしていて。魔術師らしい黒いマントとミニ丈のブリッツスカートが微かに風に揺れている。肩と胸元が開いたデザインワンピースで、その胸脂肪だけがやけに目立つほど前に迫り出していた。非常

に柔らかそうな球体がその内側で二つ重なり夾つている。弾力を誘示するように豊富な脂肪がぶるんと揺れ動き、人ならざるものの視線をも釘付けにしてしまう。黒いニーソックスに包まれた足を僅かに開いて、彼女は邪な魂を注ぎ込まれた石獸と対峙する。正確で素早い呪文の詠唱が静かに唱えられた。

「……奈落の業火、灼熱の炎柱よ、理に反する邪なる命を燃やし尽くせ！」
 灰色の体を痺れさせたガーゴイルの真下に大きな光の魔法円が描かれる。完成と同時にマグマの炎が吹き上げ、ズゴゴッ！ 硬石の体を焼き尽くした。

「グギアアアア——ッ！」
 断末魔の叫びが紅蓮に飲み込まれていく。

一時、森に静けさが戻つた。不意に敵に襲われ、二つの呪文を同時に駆使する高度な技でそれを撃退し、少女はほつと小さく息を吐く。だが、次の瞬間には不機嫌そうに振り返つていった。「アトリア、よくやつた。流石、俺の弟子だ」

何をおっしゃつているのですか、このお方は！ そんな想いを込めた冷淡な瞳が捉えたのは、彼女の魔法の師匠であるアマデスである。年齢不詳、背は比較的高く、顔立ちも端正な方だとアトリアも思う。だがこの真つ黒なローブを着た男のその性格と行動に、いつも彼女は頭を悩ませていた。

「誰のせいだ、こういうことになつたと……、へっ!? い、いやあああああっ！」

彼の格好に違和感を覚え、視線が僅かに下がつたその瞬間、そこには生々しい動物色の、でろんと垂れ下がり、先端が黒光りして、長く、太く、あれは何？ 処女の思考が拒絶した。「そ、そ、そんなもの、早くしまつてください！」

「えつ、おお、そうか……」
 国王からの密命を帯びて、二人はとある仕事の帰り道だつた。この森の中心まで来た所で、師匠アマデスは用足しに離れたのだが、そこを刺客に狙われたのだつた。

（み、見てしまいました。師匠の、あ、あれを……。男性の、オ、オチ……。なんて、いやらしい形、あんなの普通じゃないいいいっ！）

真つ赤になつて横向いていた顔をキツと睨みつけるようにして戻す。「師匠、そこに正座してください」

怒りの限界点を越えた時、彼女がいきなり怒鳴りつけることはない。身をもつて知る男アマデスは、うんざりしながら口を開いた。

「ああ、アトリア……、ここは、川原だ。石がいつばりあつて、ゴツゴツしている。きつと痛いだろう。うん、間違ひなく痛い……」

凍りつかせるような冷たい瞳の中に、メラメラと燃え上がる怒りを感じさせる。

「正座してください。師匠……」
 「うっ……、はい」

襲つてきた刺客の魔物は、今回の仕事と一切関係がない。ガーゴイルの腋の下にあつた刻印にアトリアは見覚えがあつた。北の魔女が放つたものだ。女性に対して節操のない男、アマデス。彼は魔女の可愛がっていたら若き侍女に手を出して、恨みを買つていたので。しかも今回の一件に限つたことではなく、平民から貴族、果ては魔族の娘にまで手を出しては、常に女の敵と狙われている。

「今日という今日は言わせてもらいます。いったいこれで何回目なんですか！ 師匠が勝手に殺されるならまだ我慢します。自業自得ですから。でもついこの間は修羅場に巻き込まれ、先だつても私、師匠の愛人に間違われて刺されかけたんですから！ いいですか、貴方には、国王陛下付きの魔道士としての自覚がまつたく足りなく……」

人差し指を何度も突きつけ、捲し立てるアトリア。延々と続く弟子の説教。師匠はただ俯きながら頷き続けるしかなかった。

王宮の宝物庫から一冊の魔道書が盗み出されたのは丁度十日前のことである。賊の侵入を許した事実が世間に公表されるのを恐れた国王よりさつそく次の日にお呼びが掛かり、希代の伝説級魔道士アマデスとその弟子アトリア

は奪還の任につく。賊の居所を突き止めるのに二日。その後、三日かけて西方の廃棄砦に到着し、首尾よく一日で仕事を終えた。そして今はその帰路の途中というわけだ。

「やだ、もう、日が沈みかけている」
「誰かさんの説教のお陰でな……」
「ようやく森を抜けたと鴉が鳴いていた。空は厚い雲に覆われていて夕焼けは見えない。」
「元はと言えば……」

「言いかけてアトリアは言葉を飲み込んだ。堂々巡りになりそうで、話題を変えてみる。」
「師匠……、その魔法書って、いったい何なんでしょうか？」
「んっ？ これはだ……、禁呪書の一つであつて、まあ、なんだ、恋する男が喉から手が出るほど欲しがらる代物だ」

「恋する……男女……」
「師匠の横を歩きながら、チラチラと彼の顔を見てしまふ。」
「恋……、私の、恋……」

アトリアがまだ両親と暮らしていた頃、父の出世争いに巻き込まれ誘拐されたのがアマデスであつた。当時まだ幼かつた彼女の純粋な瞳には、彼は正義の味方であり、英雄であり、強さと優しさを兼ね備えた素敵な男性に映つたものだ。今思えば、そんな姿に世の女どもは騙されるのかとげんなりもするのだが、あの日の彼の姿は今も脳裏に

焼きついてた。

憧れ、親の反対を押しきって、アトリアはアマデスの家に押しかけて半ば無理やり弟子になつたのだが、その生活の荒み具合に何度実家に戻ろうと思つたことか。度重なる刺客の襲撃と退けるうちに、アトリアの魔法士としての実力は既にこの地方の五本の指に数えられるほどになつたのだが、何時の間にか、この人には私がついていないと何もできない、と考えるようになっていて、こうして一緒に行動を続けている。

「ちよ、ちよつと、見せてもらつてもいいですか？」
「駄目だ。お前にはまだ早い。なんだ？ 恋する男女の魔法に、興味でもあるのか？ ふーん、あのちびっ子アトリアも、もう恋に身を焦がすような歳になつたか」

普段はクールに作られた顔が真っ赤に染まつた。
「べ、別に、魔法の研究資料として、気になるだけです！」
「ああ、まあ、と息遣いが荒くなるほど強く否定するアトリア。そこにポツポツと空から水滴が落ちてきた。」
「やばいな。降つてきたぞ。本降りになる前に町まで走るぞ」

不意にアマデスが走り出す。
「やだ。まっつてください」
「だけどなんだかんだでやっぱり彼のことを憶れていて、彼を追つてしまふのだつた。」

★

日の沈む刻に降りだした雨は、宿につく頃には嵐の様に「一帯を包んだ。恐ろしい魔物の出現も始まらなかつた。先は夜通しに旅路を急ぐ者も少くないのだが、この豪雨の影響で川は増水し足止めを食らつてしまふ。節約して野宿するには厳しすぎる天候とあつて宿はごつた返した。」

「べ、別にこの格好に変な意味はありませんから。雨で靴の中まで濡れちゃつて、無事だつたのが、これだけだつただけだ、か、か、か、勘違いしないでください」

なんとか確保したシングル部屋のベッドも一つきり。こうした事態を想定していなかったアトリアは寝間着に透けるような白いペビードールしか用意していなかった。

薄生地からはきめ細かなミルク色の艶肌が滲み出て、気になる体重の何割かを稼いでいる巨乳の張りと弾力の柔らかさかような釣鐘形状が露になつている。球体状に肉付いたお尻の上半分までしかないペビードールの下下にはやはり純白のショーツ一枚きりで、小さな薄布の切れ端が股間の中心にある土手肉の縁を覆って、脇から花卉が食み出しそう。

「やや俯き加減で真っ赤になつている魔術師少女。ドキンドキンと鼓動がなつて、今宵何が起こりそうかな期待を秘めている。」
「んっ？ 何か言つたか？」

「へ……っ？」

「な、なんで……？ こ、この姿を見て、なんでそんな薄い反応なのおっ！」
「……別に、何も……」
「果然とするように一言が絞り出た。」
「じゃあ、とつとと寝るぞ。明日は早いんだ」
「……はい。つて、ちよつと何してるんですかあつ！」

ベッドを前にしてアマデスは身に着けていた物全てを脱ぎだした。更に真っ赤になつて後ろを向くアトリア。ハツと気付く。二人きりの部屋。ベッドは一つ。裸の師匠とほげ裸に近い見目麗しき少女弟子。

「こ、これつて、これつて、まさかあ……っ！」
「茹で蛸状態に熱くなつた顔を両掌で挟み込む。——とつとと寝るぞ——と彼は言った。その意味は？」

「雨に濡れた服が乾かん。替えもやられてしまつたからな。うん。安宿のわりに綺麗なショーツだ」
「ああ……そうですすよね……」
「あ、あつち向いていてください。絶対、変なことしないでくださいね」
「しねえよ」

眠るような声がグサリと心に突き刺さ

る。きつとそれは本心だ。あれほど大勢の女性に手を出しているというのに、一緒に暮らしているアトリアには口説き文句の一つもなかった。幼い頃からずつと顔をつきあわせていて、この胸が膨らみだした頃からは、肩を抱いてもらったことすらない。

(一つのベッド……。私だけ、こんなにドキドキしてるのに……)

何時の間にか両音が消えて、代わりに泉の鳴き声が聞こえてきた。背中越しに彼の温もりが伝ってきて、切なくて眠れない。

(師匠は、もう、眠ったのかしら?)
 ゆっくりと身体を回転させるようにして、寝ながら彼の方に向き直る。すると大きな背中が不意に倒れて、

「はい……っ!」

仰向けになったアマデスの片手が、むんずと巨乳を掴んだ。

(き、き、来たああああっ!)

ムニユ、ムニユと、と確かな指先の圧迫を乳房に感じるたびに、

「あん……っ」

瞬間強張った身体がビクッと跳ねあがりそうになる。期待して裏切られ、でもやっぱり待ち望んでしまっていた出来事にも細められた瞳は潤み、身体の色から熱を感じてしまう。胸の柔肌を通して彼の掌に伝ってしまうのではないかと思うほど鼓動は高鳴った。

「し、師匠……。そんな、ダメ……。私達、師匠と弟子、なんですから……。でも、師匠が、ど、どうしても我

慢できないんですしたら、ちよつとくらい目を瞑ってあげても……」

鼠蹊部の内奥から急速に蒸れ籠つて、ぢゅん、と漏らしてしまふ。もそもぞと膝を擦り合わせて、熱っぽく潤ませた瞳を半開きにして、情熱的に見つめ返してくれる彼を求めた。が……。

「スー、スー」

アマデスは仰向けのまま瞳は閉じていて心地よさそうな寝息を立てていた。

「ね、寝てる……? な、なんでっ」

何かが起こりそうだった夜。アトリアは本気で師匠に殺意を覚えた。

★

翌朝、殆ど眠れぬままベッドから這い出したアトリアは、師匠のまだ目覚めぬうちに川沿いの様子を見に出かけた。昨晩の嵐が嘘のように晴れ渡り、増水も早々に落ち着き、これなら昼過ぎには橋の通行止めも解除されるだろう。

「ただいま戻りました」

まだ眠そうに大きく欠伸をしてしまう。宿屋のシングルに戻ると、まだベッドでは一人一人分の質量が盛り上がっていた。ビクッと少女の額に背筋が立つ。

「私が全然眠れなかったというのに、師匠はのうのうとバク睡されていらっしやるのですね」

アトリアの覚えている限り、アマデスはベッドの中で一度も瞳を開いていない。それなのに片手は彼女の端々しい肉峰に張りついたままで、時折寝ぼけてむにゅむにゅと揉みだしてくる。

切なさど苛立ちと乳悦の刺激に、身体は火照り、心地よさと寝苦しさを交互に感じては悩ましく一人眠れぬ夜を過ごした。

「いい加減に起きてください、この馬鹿師匠!」

彼が全裸であった事実も忘れて、掛け布をバサッと剥ぎ取った。その次の瞬間、その存在の受け入れを思考が拒絶した。強張った顔で、ビクと眉根が上り上がる。

「へ……っ!?! な、な、なんでっ!」

醜悪な生物がそこにいた。脳ミソのような形状で塊を成し、よく見れば蛇か大蚯蚓のような長い触手の集合体である。無数のそれらが重なりあい、絡みあい、一本一本の太さも様々で、毛先のような極細いものから、自分の腕のように凶太いものまであった。色は人の肌似て、粘膜のようなヌメヌメした皮質全体から、ねつとりとした透明な液を滴らせている。ズルズル、ぬちゃぬちゃと音を立ててベッドの上で蠢き這いずっていた。ツンと鼻につく腐臭を放ち、悪寒を感じずにはいられない。

(き、気色悪うっ!)

唾た瞬間見つめて、飛び退いた。キツと睨みつけるようにして、片手を翳す。敵愾心を露に対峙したその時だった。

「え……? 怯えて……いる?」

凍えるように触手の集合体はブルブルと震えていた。そこから二本だけ鎌

首もたげる蛇のように伸び出し、先端についていた瞳が開く。悲しそうに涙ぐんでいた。

「え、えいと……。なんだか、攻撃しづらいんですけど……」

何かを伝えたが……というようにも思えてよく見ると、先端に瞳のついたもの他は、耳のついたもの、鼻腔のついたものがあり、それ以外の大多数はどこかで見たことのあるような形状だった。先端がやけにカリ高く、黒く光沢し、縦筋が切れ込んだんだかどとも卑猥なものだ。それはつい昨日見たアレとそっくりそのまま。アトリアは思わず呟く。

「師匠……!」

目の前の存在は噂に聞く、女の敵と呼ばれる触手の魔物に違いない。生殖本能が異様に強く、牝と見れば種族関係なしに肉孔に入り込み、体内に溜め込んだ精液を全て吐き出すまで交尾行為を続けるのだ。欲求を満たすまでは執拗に獲物を齧り、終わればとっとと姿を消すその習性と女の敵というワードが完璧にある男と一致した。

「ま、まさか、師匠……! なのですか?」

ギクッとするように魔物は震え、焦った様子で頷くように何度も触手を傾げる。床にあの禁呪書がページを開いた状態で落ちていた。微かに黄ばんだ紙面に章題目は、変化の法、と書かれている。少女魔道士の中では、もはや疑いようもない事実になった。

「嘘……、師匠が触手の魔物になつて

しまった……」

クラクラと目眩を感じる。額に手をやったその時には、もはや抑えようのない怒りが込み上げてきた。

「し、師匠！ そこに正座してください！」

無理だ。足はたぶんない。触手は怯えてそのヌメヌメと柔らかな体さえ強張ったように見えた。

「もう！ いったいどうする気ですか。明日には国王陛下に師匠が直に禁呪書を手渡さなくてはならないのですよ。そんな姿じゃ、ここから外に出歩くことすらできないじゃありませんか。だいたい普段の行いが悪いからこんなことになるんです。いいですか師匠、今日という今日は言わせてもらいますけど……」

アトリアの触手への説教は延々と一時間は続いた。

★

「はあ……」
溜め息を漏らしてベッドの上の醜悪な猥褻物を見る。一つの意識を持った触手の集合体はまるで申し訳なさそうにじっとしていた。

いつまでどうんざりしているわけにもいかず、少女魔道士は対策を講じようと思案を巡らせた。ふと、床に落ちた禁呪書が目に入る。

「これに……解除の呪文も書いてあるかしら」

王宮の宝物庫に大切に保管されていた禁じられた魔道を記した書物。手に

したその時、ついで他のページにも興味を湧いてバラバラと捲つて見てしまう。「ひゃ……っ！ な、なに……これは……」

男女のまぐわいを示した図が三ページごとに描かれていて、アトリアの顔は真っ赤に染まる。しかも中には女性が荒縄で縛られたり、陰部に異物が捻じ込まれている図が詳細に描かれているものもあつて、説明文によれば魔道によって拘束したり、張り型を激しく振動させる呪文を使った責めの例が……

「な、な、なんていやらしい……、なんなの、この禁呪書はあ！ で、でも……」

頭から湯気が出そうなくらいに熱くなる。それが全身に伝つてしまったように身体が火照りを覚えて、急速にドレスワンピースの裾内側が蒸れてきてしまう。

「やだ、こんな口で……、いやっ、こっちはお尻に……、し、信じられない。こんな風に入れられちゃつたら……、はあ、はあ……」

小さくワレメに食い込みぎみのショーツの内側から強い肉芽からの違和感を覚えてしまう。もぞもぞと膝を擦り合わせて、クネクネと勝手に腰が動いていた。じゅわつと奥から染み出してきてしまい、呼吸は小さく喘ぐように乱れている。ジーと見つめられている視線にハッと気付いた。

「こ、こんな破廉恥な書物はどつとど燃やしてしまふべきです！」

触手の瞳は完全に怪しんでいるように細められている。

「うっ……、ま、まあでも、これは国王陛下の物です、勝手なことはできませんものね。それに早く師匠を元に戻さなくては……。え、えーと、あつ、ありました」

変化の法の章の最後のページ。そこに短い文で書かれていた。

「なになに……この触手変化の法を解くには、彼の視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を全て満足させればよい、と……。満足？」

隣の挿絵では、何人もの女性が触手に絡みつかれ、または自ら口にそれを頬張り、両手で掴み、乳房に押しつけている。

「えっと、まさか、そんな、いや、でも、いきなりこんな展開……でも他に師匠を満足させられる素材、というか、女の人もいないし……、こ、心の準備つてものがあつ」

少女の頭の中が混乱をきたした。蒼白となった顔を振り向かせるとヌメヌメした魔物は一本の触手をお願ひするように前に擦り合わせている。

「ど、どうしよう。だつて私、そんなことしたことはない……でも師匠……、やっぱりこのまま放つてはおけない。それに……ひよつとしたら、チャンスかも……」

アマデスが手を出してこないのは、

きつとまだ弟子になりたての頃の子供のイメージがあるからに違いない。この機会にどれほど成長したかを見せつけ、更にこの状況を上手く利用すれば他の女の子を追いかけ回すのをやめさせることだつてできるかもしれない。そう考えた途端、アトリアの口角が冷淡に上がった。

「わ、分かりました師匠。しようがないので、こ、この私が、師匠を満足させてあげますので、感謝してください」醜悪な触手魔物に近づいて、ゴクリと唾を一つ飲み込んだ。怖気を催すような姿も、これが師匠であつて、殆どが彼の肉棒が変化したものだと思うと、嫌悪はすっかり消えてしまう。それどころか、

「こ、これ……全部師匠の、オ、オチチ……」

瞳に潤みが生じて、じわじわと肉裂の奥から痺れるような高揚感を感じてしまった。乳首は心地よい痛みを感じるほど勃つている。充分すぎるほど女性らしい部分が成長したこの肉体。それを今、発情させてしまつていた。（やだ……。変な気分。わ、私がかんなんてどうするのよ）

鎮んでようやく一つ息を吐いた。

「本当はこんなことしたくはないんですけど、仕方ないので、み、み、見せますから……」

襟首を掴んだ。すると察したかのようになんかの触手が伸びて間近に迫ってくる。

(こ、こんなに近づいてきて……)

身体の微かな動きにも振動してぶるんと揺れる巨乳。アトリアの知る限り、それはアマデスが手をつけたどの女の子よりも大きいはずだ。収縮性の高い生地で、少女魔道士はぐっと襟首を下げる。豊満な乳房を圧迫しながらその弾力を感じ、両手は頂を越えた。ぶるるん、ぶるんっ!

白いブラジャーのカップになんとか収められている爆乳が、弾力の反発で激しく上下に揺れ動く。襟首を下乳の付け根に収め、そのお陰で乳房は猥褻にその大きさを際立たせた。

緊張していた顔がまた真っ赤に染まる。昨晩のペビードール姿の方が透けていたのに、普段着から乳房だけを剥き出させたこちらの方が卑猥なように思ってしまうのだ。

だがこんなものではあの師匠の視覚を満足させられたとは思えない。「じゃ、じゃあ師匠。プ、プラも、は、外しちゃいますから……」

背中にも手を回し、ホックに指先を掛ける。緊張と高揚感が身体を駆け巡り、はあ、と一息吐いた。とうとう見せてしまう。微かな戸惑いを強い想いと視姦される悦びで掻き消して、パチツ、それを外した。

(こ、これと興奮しない男なんて、いなんですかっ!)

圧迫されていた柔らかな脂肪肉がぶるっ、たぶんっ、大きく揺れながら体積を増す。カップが艶やかな乳肌を

滑りゆつくりと落ちていき、前に戻した両手で抜き取った。美しい釣鐘状は一つ一つが彼女の顔を覆い隠せるほどに実り、強引に下げられた襟首によって強調される肌は突き出された。新雪のような白い肌は僅かに汗ばみ、そこから馨香の甘い匂いと逆上させたような火照った体温が放たれている。経験の少なさを物語る桜色の乳首は、自らの心の高まりを示してツンと円錐状に勃ち、凝視する触手の瞳は瞬きを忘れて血走っていた。

(よ、よし、見せて。あ、あの師匠が、こんな、真剣に……)

強い羞恥が心地よく、物言えぬ彼の興奮を確かに感じて悦びが湧く。証明するように鼻触手の息は荒立ち、ズルズルとした無数の蠢きが活発になった。全ての肉棒触手の先端が張りを増して大きく膨らむ。それらはもう乳に種付けする臨戦状態に入ったのだ。

「ど、どうです。ち、乳首だっ、満足させるために、わざと、た、勃たせてるんですから、見られて感じるとか、う、嬉しい、とか、全然、これっぽっちもないんですから」

必要以上に大きく成長した乳房は、男性の目を楽しませるためだけに感じるようである。だがこれを男性が喜び崇拝してくれることも事実で、女としての大きな武器であることを知っていた。

(さあ、師匠、か、覚悟はすつとできているんです。我慢できないでしょ?)

だが触手達は、確かに興奮しているように見えるのに、どこかモジモジとして襲ってはきてくれない。

(意外と、シャイ? 師匠にそんな一面あったかしら? あつ! もしかして自分の今の姿に負い目を感じているとか、でしょうか? んっ、だ、だっ、たら……)

両手を膝上まで伸ばす。ワンピースドレスの裾を掴んで、「師匠、もう十分に視覚的に満足してるとは思いますけど、あ、あくまでも念のため、も、もつと凄いもの、見せます!」

えいつ、と捲り上げた。ふわつと広がったスカート部から外気が入り込み、蒸れた股間を撫でるように風が流れる。むん、と熱気と恥臭が舞い上がり、それらを濃厚に吸い込んでいた純白の小さな下着が晒された。

鼻触手の何本かがすぐさま彼女の腹部の方へと移動する。「ふあ、つはあ、あそこ、熱い……) どんな情熱的な瞳で見られていたのだろう? 頬を桜色に染め、どこかうっとりとした表情になった少女は、自分の鼠蹊部へと視線を下ろしてみた。

(え……っ?! や、やだっ!)

思っていた以上に凄いなってしまった。デルタ地帯ではショーツの縁から何本か縮れた恥毛が食み出している、更に中心部は、おそらく昨晩漏らした発情液によって、大きく黄ばんだ染み

がはつきりと浮かび上がっている。

(ああ、そうでした。雨に濡れて、替えの下着なくて、昨日からそのままだったってこと、す、すっかり忘れてましたあ!)

魅力的な身体を見せる羞恥と、猥褻な状態であった証拠を見せる羞恥は別物だ。顔色は桜色から真っ赤に変わり、でも今更隠しては余計に恥ずかしいことをしたように思われてしまう。キッと睨むように言った。

「こ、こんな事態もあろうかと、よりエッチに見える状態にしておいたんです。け、決して昨晩師匠の隣で寝たから濡らしちゃつたとか、そんなんじやありませんから!」

必死に形相で否定する彼女の迫力に圧されて、触手の魔物に汗が滲んだ。困ったように魔道士少女は唇を噛む。(ああん、恥ずかしい……。で、でも、これで師匠をもつと興奮させられました。たぶん……。よ、よし……)

引き撃つたように笑みを浮かべるアトリア。それでも本人は妖艶さを演出しているつもりだ。細い眉毛がビクビク痙攣している。

「し、師匠……。どんな風にして、ここを汚したいか、み、み、み、見せてあげても、いいんですよ」

かなり声が上がっている。「見たいんですよね? し、仕方がないので、じ、じ、実演して、あ、あ、あげますから。見るだけですからね。その汚らしい、チ、チ、チ、チ、チ、チ、ボ、みたいな触手は、まだ、絶対に、近づ

けないでください。はあ、はあ、はあ……」

これを言うだけで息が上がりそうになつてしまふ。

片手で裾を引き上げたまま、少女はもう一方を下腹部に添わせた。ゾクゾクッとそれだけで性悦が湧き起り、女陰の奥に熱いものが籠りだす。何本かの膣触手がむつちりした太股の合間に入り込み、下からじつと覗きこんできた。誰かに見られながらオナニーする。そんな経験は勿論初めてだ、この

視姦してやるのが彼だと思つて、この強烈な恥ずかしさはそれと同等の露出快楽へと変わつてしまふ。

「はあつ、はああ……。なんだか、いつもより、敏感になつてます。ふあつ、はんつ」

指先を立てるようにしてどこか湿りを帯びた下着の上をツツと這わせていく。薄布上からサワサワした陰毛の茂みを越えたとこでワレメの上端に到達し、微かに裂いて沈み込む。その直後に、普段より余計に膨らんだ突起に差ししかかった。

「ほうっ……っ！」

電撃のような強い刺激を感じて、背が跳ね反つてしまふ。ブルツと身を震わさせて、そこから広がってくる快感に刹那蕩けそうになつた。

「あはああつ、はあ、はあ……。やだ……、何時の間にか、お豆が飛び出していたのね。ああん、今のでまた……出てきちゃう」

恥ずかしがりやで寂しがりやのアトリアのクリトリス。普段は包皮に隠れているくせに、一度募りだすと自ら捲り上げ、構つて欲しいと訴えかける。女の子の勃起はもつと気持ちよくなるためだに起きるとつてもいやらしい現象。

「直接触れたら……、すぐに変になつちゃうかもしれない……」

感じた瞬間に反射的に一度離れた指先をそつとワレメの上端に置いてみる。肉芽の根元を圧迫せ、上皮下に隠れた凶牙の根元を圧迫せ、ふわつと腰が浮き上がるような悦楽が卑肉を巡つた。

「あふあ……っ、はあ……」

震えるように湿つた唇が微かに開かれ、熱くて甘つた吐息が漏れてしまふ。膣触手の一本が眼前に昇り、感ぜだした表情を見つめてくる。劣情の籠つたような瞳に自身の蕩けだした表情が映つていた。

「いや……っ、なんだか、いやらしい」

ぐいっ、ぐいっ、と根元からきつく指先を押しつけると、クリトリスの剥き出した先端部が下着を内から盛り上げる。最も過敏な部分が生地には擦られ、自身で弄ぶ悪戯に酔いそうになつた。

「あはああつ、い、いい……」

急速に溢れてくるのが分かる。凝視するいくつもの膣の間近で、牝の粘膜から滲みだした淫蜜が布地を濡らしていく。じわじわと染み込み、大きく広がり、そこから透けて桃色の肉ピラの形状を浮き上がらせた。

「ど、どうです。師匠のために、こんな、はっ、あはあ……っ、ことまで、して、はあはあ、あげているんです……から」

無数にある触手全体が真っ赤に染まった。まるで純情な少年のような反応。師匠らしくない違和感を覚えても、彼の男性を自分が十分に刺激できていることに嬉しさは隠せない。

もう一押し。そこから湧き上がる悦楽の期待にゾクゾク感じながら、アトリアは指先を過敏な肉芽の先端に触れさせる。

「はあつ！ くふあ……っ」

ビクウツ！ また身をブルブル震わせた。

「や、やだ……っ、よくなりすぎちゃいます。でも、つくはっ！ どうして？ とめられない……」

物理的な刺激と、倒錯的な快感を同時に味わい、ついつい堪能してしまふ。淫蜜が広がらだし、濃い恥毛が透け見える下着越しに肉芽の先端を自ら翳つて、くにゅ、くにゅつ、と転がされる様を見せつけた。膣が自然に落ち、じんじん感じて、夢中になつてしまひそうなる牝本能をどうにか抑えている。

「んっ、はあ、はあ……、わざと感じてみせているんですから、あふつ、はあ……、勘違いしないで、はあつ、ああんっ！」

潤みきつて震んだ膣に、興奮して息遣いを流くした鼻触手が這い寄り寄つてきているのが映つた。

「快楽にぼんやりしだした思考が思い出す。」

「噢覚も、満足させるんでした……。あうんっ、はああつ、そんなの、どうすれば……」

性的に満足する臭いつてなんだろう？ つたない知識、それは師匠の行動から覚えたものばかりだが、で考えついたのはとても恥ずかしくて、いつもの彼女なら変態と蔑む行為だった。

「でも、きつと……、ああん、もうっ）一番近くにあつた鼻触手に手を伸ばし掴んだ。ぬめぬめした肌触り、指間から粘液がグチャッと漏れる。動物的な生暖かさに、軟体動物のような感觸だつた。

「あ、あくまでも、師匠を元に戻すためですから……、こんなことされて悦ぶ趣味はありませんからね！」

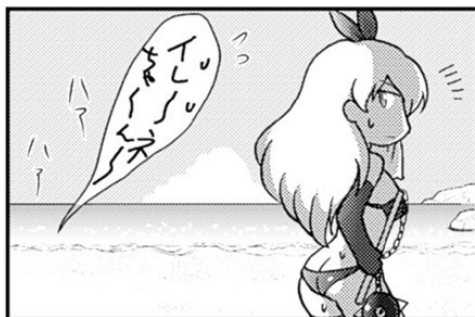
体中のどこもかしこも熱くなつている中で、顔と股間の奥は沸騰したような状態になつてい。蒸れきつて濃厚な湿度で、この発情してしまつた肉体の中で最も臭いを発してしまつている部分に、少女は彼の鼻先をぐいっつと近づける。

「うっ、くうう……っ、なんて……恥ずかしい。へ、変態みたい……」

ぬちゃぬちゃと淫蜜に濡れた股間の中央、下着は汗蒸れて、ぐちゃぐちゃした肉裂の奥から絶えず下ろしていたバッテリーのような甘つた臭い淫臭を濃厚に吸い込んでいる。それを間近で吸い込んだ触手の鼻腔は大きく膨らんで、



宝たぐねて三千里？



ツンデレ☆クエスト

シークラへようこそ!? Vol.2

かのう 漫画 COMIC 嘉納あいら



触手+女戦士+ツンデレ+アンチなまはら!!

華麗にホームラン

一先が目先にあるものを



イレーネ
勇者のお供をする女戦士
勇者の幼馴染み。



勇者
イレーネに振り回される少年。
あまり役に立たない勇者。



いざ 竜宮城!?



タコ危機一髪



俺の唄を聞け!!



おいませ!! シークラ



タコの正体は…!?



この上ないアホ



触獄

～宇宙に囚われしもの～

うつせみ
小説 空蝉 NOVEL
挿絵 ほっせい ILLUSTRATION

バトリン・インプで宇宙を駆け回る少女が
謎の異形生物と対峙する!!



侵入者は巨大な口腔の周囲に肉根を密生させた、それ以外には目鼻も、知能すら持たぬ、下等生物だった。

「くつ、いつの間に入り込んだ!!」
おそらく、昨日食料調達に立ち寄った星で紛れ込んだのだ。

にゅぢゅゆるりゅぢゅ……。
「ひああ!? こ、この! くつつくなく気持悪い……!」

インナースーツ一枚でくつろいでいたクリスの肢体に、異形の触手が這い寄り、張りついてきた。

血が通っているのか、ドクドクと脈打ち生ぬるい肉の感触と、全体にじっとり帯びたぬめり気とに、生理的な嫌悪感が噴き上がる。

「う、うぶ……!」

おまけにひどい悪臭を放っていた。垢なのか、ぼろぼろと白くこびりついたものをこぼしながら、後から後から染み出る生臭い体液の臭気がいつそう娘の鼻孔と喉とを刺激する。

(吐きそう……ううっ)

父が遺してくれた、パワードスーツさえ纏っていたれば、こんな下等生物は瞬き一つする間に焼却処分できるのに。

己のうかつさを呪い仰いだ視線の先に、頼みすれば届きそうな室内の壁際に、頬ひの綱のパワードスーツは立てかけられている。

「つ……なんとかあそこまで、行かないとっ!」

絡む異形の触手を手ではたき落としたり、足に巻きつくそれをむしろうとして。

ぢゅぢゅつ! ぢゅゆるりゅぢゅうう!

「うあつ?! や……!」
足首ごと、力いっぱい引き倒された。予想をはるかに超える相手の膂力。前めりに倒れ込みながら、敵を侮っていた己の浅慮を重ねて悔いる。

「ぐ、こ、この……!」
異形の口腔——ぼつかり開いた地獄の釜の底のような深紅の粘膜が迫ってきたのを見計らい、恐怖を押し殺して、人型であれば鼻があるであろうあたり

に肘鉄を打ちおろす。
——びちっ! びちびちびちイイ!

(拘束が緩んだ……!)

今だ……。千載一遇のチャンスに、足に巻きついた触手を蹴り飛ばし、即座に起き上がって反転し、

壁方向に向き直った視線の先で。

「そ、んな……!」
クリスの脇をこれまでに倍する速度で突き抜けた無数の肉触手が、この世にたった一つしかいない専用のパワードスーツを貫いていく。船とともに譲り受けた、父の大切な遺品でもある装甲

をいともたやすく……。
「い、いやあつ……!」

目の前に晒された絶望と恐怖が、現実のものであると信じられず、まるで少女の如き悲鳴を上げそうになるのをどうにか堪え、ようやく短い拒絶の言葉を絞り出した。

パワードスーツは人の組織と反応して、驚異的な強度を完成させる。誰も纏っていない状態では、ただの鋼の塊

に過ぎなかった。

それでも。特殊な合金で編まれた装甲に幾本も突き刺さり、虫が食ったような大穴を無数に開けている。

再度向き直った先で異形の巨大な口腔がニタリと歪んだ瞬間に、クリスはすべてを悟る。

この、知能すら希薄な生物に弄ばれていた。敵は、パワードスーツにいち早く到達できるスピードと、軽々破壊できる力を持ちながら、捕食した獲物のあがく様を余興の如く楽しんでいたので、と。

「き、貴様あああつ!」
はらわたが煮えくりかえるほどの憤怒が喉を焼く。食欲と生存本能しか持ち合わせぬ生物の手のひらで踊らされたという屈辱。

そして父の遺品をむざむざ目の前で破壊された、自分自身の無力さに、震えるほどの憤りが、鼓動に合わせ息づく胸の奥で激しくたぎる。

「死ねッ死んでしまえッこのチンカス野郎オオツ!!」

気づけば、異形めがけ腰から抜いた光線銃をぶっ放していた。

にゅぢゅゆるりゅぢゅ……。
「最初の一撃をかわれて、あつさりと銃を叩き落とされる。そのまま右手に這い寄り寄ってきた触手を、左手で抜いたナイフで斬り飛ばしてやった。

ビチッ!! ビチビチビチッ!!
「言葉もしやべれないカスがッ!」

まるでのたうつように不格好な体軀を跳ね転げ回らせる本体と、腕に巻きついたままの、肉瘤状になった触手の先端とを見下ろし、復讐の留飲が毛先ほど下がるのを感じた。

銃はすでにやつた体液で浸され、使い物にならずもうない。手にした高圧縮ナイフだけが、手元に残された最後の武器だった。

「これ以上父さんの船を汚え身体で転がり散らすんじやねええつ!」
激昂そのままに口汚く吠え盛り、飛びついた先から異形の腕を——生ぬるい触手を斬り飛ばしていった。
「なによ。はは、傷口をなめて欲しいって? ……臭いのよツツ!!」
ビチビチッ!! ずりずりゅうう!
鼻先に寄ってきた切れかけの肉傘を、右手で無造作に引き千切る。
怒りに狂ったらしい異形に引き倒され、巻きつかれながらもクリスは決してナイフを振るう手を止めようとはしなかった。
「……ツツ!! 近づけんなって言っただろろろが!」
わざと大声を張り上げたのは、虚勢。怒りに濡れた言動もすべて——そうしてないこと、膨ら上がった恐怖に押し潰されてしまいたい、そうだったから。
まだ、敵の勢いは衰えない。斬った端から再生し、分裂増殖を繰り返してますます醜く大きくなった異形の生臭い触手の海に、徐々に、徐々にクリスのシルエットは吞まれていった。

望まぬ密航者の襲撃から、五日後。クリスはまだ生き延びて——いや、生き長らえさせられている。

「五日つ、やあつ、だあれ……アッ！」丸五寸断なり身を翻られ、初日の威勢はすっかりなきを潜めていた。

「驚声を強制的に上げさせられ続けた喉には唯一の糧である異形の体液が注がれつばなしで、濁く暇もない。」

「うえ、え……れるつ、れちゅう……」突き出された肉根に、反射的に舌を伸ばし奉仕する。嚥下した生温い体液が喉と胃を潤すたび、胎の奥が熱く疼くと知つていながら。

「ぢゅつ、ちゅうううう……えはつ、は、ああ……ちゅぶ、ちゅつ、ちゅうううう」生き延びるためか、強制的に仕込まれた快樂の味を食らなためか。延々舌先で触手先端の割れ目をほじっては、噴き出す生臭汁をまた嚥下。

「ヤな、顔……」腹に溜めた体液が粘つきながら吸収されるのを感じて、否応のない恍惚を覚え、蕩けてしまふ。

そんな己の顔と、それを見て卑しく歪む醜悪なほどの姿。双方に吐き気をよもよもすほどの嫌悪を覚えながら。それでも差し出されたそばから、クリスの舌は触手の先端へとむしやぶりついていった。

「なに、か……守らなきや、いけないものが、あつた……ような」

延々と続く恥辱と快感の只中で徐々

に女は理性を失くしゆく。

時の流れすら感じられぬ反復運動に溺れて、快樂一色に染め上げられつた。

ぐつ、とインナースーツの股布が引かれ、弄られ過ぎて無残に腫れた肉の穴が姿を見せる。もう、閉じることすら忘れて、ぽっかり空いた口から白い

「化け物の種を漏らす、肉の穴。中にはその数千、万倍もの量が注ぎ込まれ、すでにその大半を粘膜が吸入してしまつた。」

「も、もうおなかいっぱいだからあつ」ぢゅぶぶ……ずにゅぶぶぶううう！

弱々しい拒絶を蹴つて、異形の肉触手は勝手知つたる肉の内へと突き入つてくる。

「きやあああああツツ！も、もう、おなかの奥、やつ！やあなのお！」まるで幼子のように啼いた肉胎へと、再度新たな触手が突き入つて、潜つた

「そばから腔壁を噛んだ。痛みと同時に湧き上がる被虐の愉悅に、まぶた裏を白い閃熱に焼かれながら悶絶する。」

「たつた三日の内に百回以上もねじ込まれ、力づくでその形と、熱を教えられた。自然と蜜がにじむよう仕込まれてしまつた腔肉が、拒絶する心に反して触手に抱きついていった。」

「奥ツやあつや、なのにいっつやう！ひッ、ぐ、うああああんツツ！」

「牝獣の如き嬌声にインナースーツの裂ける音が被さり。」

「スーツの裂け目を狙い這いずる群れと、腔内の極大。肉の内外から一斉に噴き出し染みだした異形体の効能で、瞬く間に弾け出した悦楽を押し流される。」

「ぢゅぶぢゅぶうううつ！」

「ひきあああああ！い、痛いッ、のにッ、いいイイイッ！」

「裂かれたインナーの隙間から、あるいはおかまいなしに布地の上から。数えきれぬほどの触手が群がっては、乳肉を這いずり、理め尽くした。強く絞られ、時に乳房が千切れんばかりに吸入されて、鋭い痛みが胸の奥にまで奔る。なのに。」

「（い、痛いの、ジンジンするのが、いいイッ……いいよおお！）」

「耐えられない。耐える理由すら失つた唇が、ひとりでに次々とはしたくない嬌声を漏らしてしまふ。」

「にゅぶしゅ！ぬごつぬぶぢゅうう！」

「ひくつつ！つあ、ひつあああああ！同時に、なんてえつ、ひは、あああひいイイッ！」

「乳を吸い絞られながら、胎の奥の奥まで深々と突かれ、氣を失うほどの甘美に酔わされる。」

「かは……あくううううつ！擦つれ、りゅう……つ！」

「そして間髪いれず。腔肉ごとずるずると肉触手を引き抜かれて、また苛烈な快樂の力で現実を引き戻された。ぶるっ、ぶるるっ……」

「や……熱いのは、もおおつ……」これ以上注がれたら、壊れる——。

「吐糟の予兆。身をもつて覚えた小刻みな鼓動と震えに、強い恐怖と——それに倍する期待とを仕込まれ」

「くひッ、ううつ……さちや、ああううつ！とびきり強いっ、ピリピリ、きちやうよおおつ……!!」

「恐怖を期待が塗り潰した途端、拡張され緩みがちだった腔ヒダが、目一杯異形の触手を締めつける。」

「化け物の思いが伝わったみたいの小刻みに、重なる腔ヒダ一枚一枚が歡喜の鼓動をあふれさせる。どつと噴き出した本臭汁が潤滑油の役目をはたして、最奥へと異形の肉先をいざなつた。」

「ど……ごぶぶぶぢゅぶぢゅうううツ！」

「いッ、ひ……ッツツ!!」塗り潰れる。恐怖のみならず、わずかに残る人としての矜持、すべてがどぶううつ！びゅぐ！びゅぶるるる!!ぶびゅつびゅぐぶるるるる!!

「やはア……ッッッ！はひッひッひッ！いぐつひぐつううううッ！」

「空になつた心と火照る胎を、染み入る肉の喜びが満たしゆく。」

「肉悦が弾ける瞬間。不意に視界に飛び込んだ鋼の鎖の残骸から、とても懐かしい誰かの声が聞こえた気がした。」

「（だれ、だつたっけ……ああ、すぐくイイ。氣持ち……イイ）」

「消えゆく自我の片隅で、胎奥に染みだした鼓動と熱を、ただただクリスは刻み続ける——。」

聖なる力炸裂です！

…そして

闇の眷属をしりぞけ
我等を導きたまえ

♪輝きをこの手に…♪

聖なる鈴の 啼くセカイ

第6話 与える者達

漫画 慈琴

すごーい
エマさん!!

これで
もっと奥まで
探索できるな

お役に立てて
光栄です♥

♡♡♡♡♡



せっかくまた
パーティに入れて
頂いたんですから

ゴゴゴ

ご…
ごめんね

無理言って
引っぱって
きちやって

いいえ

私も一人では
さびしかった
ですし

こんな事で
良かったら

何でも言って
下さいね

お二人の様子も
気になって
ましたから

…その後
何もトラブルは
無かったん
ですよ？

な…

トトト
トラブルって

？

…あ…
えと…

そのっ

な…んでも
ないっ

うん

なに
あせてんのよ
あたし！

エマさんが
あんな事
知るわけ
ないのに！

無かったわよ！
トラブル
なんて…





あ…
うん!
うん!

なに
ポーツと
してんだ

早く
来いよ

…アイリ!



なに…これ!?

…って



キモいだろ?
淫茎の一種
みたいだが…

森のより
さらに防御力
高いっぽく
てな—

お兄さんが
切りつけても
全然きかない
んですよ

この先にも
何かありそう
なんだが…

…んん?

あのー

すみません

お前等も
「聖鈴」を
求める…?

—まあいい
教えてやろう

どうせ
この先もすいぶん
長いのだ

この淫茎の巢
一人でぬけたん
ですか？
…どう
やって…

すこい
服…

ここに
いる
淫茎達は

洞窟天井に
巢食っている
本体一つに
つながっている

積極的
に
攻撃はして
こないが…

何もせず
ここを通るのは
まず無理だな

奴等の力の源である
体液を放出でも
させないと…



体…液？

ちようど
良かったじゃ
ないか

神官さんと
そのの
ちっこいの

兩人共に
淫蕤好みの
大きな乳を
している



やっぱり
そういう系?!

うきーん

ああの
二人共…

このくらい…
「聖鈴」を手に
入れるためなら

何てこと
ないんだから

本当に
イヤだったら無理
しなくても…

こんな事で
通れるのかどうか
わからないん
だし…

お兄ちゃんは
黙ってて!!

は…はいっ
私も…
なんですけど…



まさか
自分から淫妻を
身体にまきつける
日が来るなんて

思いません
でした

こらっ!!
エマさん
緊張感が
足りないわよ!!

さっきの
戦士さんも
この方法で
通ったん
だから

あたし達だって
…絶対…

でも
アイリさんこれで
本当に…?



お…兄ちゃん

ん?

てっ…

照らすのは
いいけど

あんまり
こつち見ちゃ
ダメだからねっ!!

そっ…

んな事
言ったって…

絶対…
「聖鈴」はあたし達が
見つけるんだから

「聖鈴」の
ためなら
命だって
惜しくない
けど…

お兄ちゃんの
いる前で…
…こんなこと

はすかして
死ねるわよ…

…ひゃうっ!!

っ?!

エマさん
どうし…

セウウウウ

ひ…あっ!!

…っあ

なあ…

そ…んな
いっぺんに…

や…タメ
その先っはあ…

んあ…あっ!!

カクッ

MMAR

ズ

ウ

あの敗北の日以来

私は陵辱され続けている



原作小説「精霊騎士アクエアル」発売中!
PCゲーム版は29ページをチェック!!

精霊騎士 アクエアル

隷属の花嫁

漫画 たかはまたろう **高浜太郎** 原作 さかいひとし **酒井仁**



何度も…何度も



昼も夜も関係なく
あの男のモノで
買かれた





最初は
屈辱でしかなかった

でも今は…

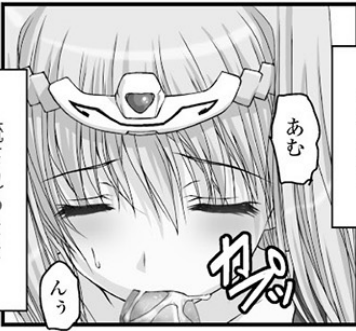


あの男は
今夜も来るだろう



これは
待ちきれない私の心が
呼び出した水の触手？

こんなものを召喚するのは
やはり私にも…





私の身体は精霊の則を超え
こんなにも淫りな感覚を
覚えてしまった



あの人に弄られ続けた乳首が
いやらしく勃起してる…

ふあッ



□も…
前も後ろも

いつも男のモノで
満たされていないと
満足できない

んう

ん♥

ん♥

ぬる

ぬる

んっ



ああ
あの人のを
思い出して…

くっ



くっ



あー♡

あう

こんなじやらしい事をしてるのは
おっぱいが汚れるぞ退くなっぺ



あッ

胸で挟んでしこく行為
これもあの人に教えられた



んっ
んう

ふっ♡

くっ



戦時だからこそ燃え上がる愛に
歴戦の女將軍様もメロメロ!?

ハーレムシネラル

THE LEGEND OF HAREM GENERAL

第二章 激突! 女騎士

小説 竹内けん 挿絵/かな

『闘神艶戯 Vol.10』より『ハーレムキャッスル』コミック連載開始!

「うん、うむ……むちゅ、ジュルジュルト」
 熱砂の砂漠の国フレリア。西の最前線を守る磐工
 パーグリーン。その士官室の一つにて、リュシアン
 は仁王立ちしていた。

まだ初陣さえ済ましていない若僧だが、国王の甥
 にして、現在は二千の兵を率いてやってきた援将で
 ある。

彼の腰に懸^かくのは、この砦を預かる女將軍マー
 ジョリー。元々はセルベリア王国の將軍職を拝領し
 ていたが、祖国が減んだので亡命してきた。そして、
 この最前線の砦を任された実力者である。

「くつ、じよ、上手ですね」

リュシアンは一度イカされたマジョリーは、
 タガが外れてしまったかのように、赤紫色の豊かな
 頭髪を振り乱しながら、豪快に亀頭部を吸い上げて
 くる。

「ムチュ、うふふ……噂に聞かされたマジョリーは
 お褒めいただけるなんて、ジュル……嬉しいわね」
 男がだいぶ追い詰められていることを察した女は、
 逸物から口を離すと、肉感的な唇と逸物を糸引かせ
 ながら見上げてきた。

褐色の肌に、白目は目立つ。その奥で赤い瞳が妖
 しく光る。

その煽情的な表情が、ゾクゾクするほどに淫らだ。
 「いや、ほんと凄いです。こんな凄いの初めて……
 です……」

「うふふ、お上手ね。でも、あはっ♪ さすがは噂
 に聞かされたらしのチ、ホね。美味しい、チュ……
 っ♪」

改めて亀頭部を口に啜えたマジョリーは、頬を
 窄めて吸い上げてきた。

「おお……っ!?」
 年齢のわりには女慣れしているリュシアンだが、
 思わず歓喜の悲鳴を上げてしまった。

まるで尿道をストローにして、寧ろから直接、精
 液を吸い出されてしまっそうだ。

さすがは三十路も半ばを越えた痴女のテクニク
 は、並ではない。

(き、気持ちいいいい、絞り取られる……)

必死に耐えていたリュシアンが限界を迎える直前
 チュポソツ!

景気のいい音を立てて、女は一旦肉棒から口を離
 した。

「あらあら、こんなにトロトロとエッチな液体を垂
 れ流しちやって、女つたらしを気取っているわりに
 は若いわねえ♪」

マジョリーは右手で肉棒をシコシコと扱き、左
 手で肉袋を揉みながら、先端から溢れ出す先走りの
 液体を舌先で美味しそうに舐めた。

「あはは……」

リュシアンは冷や汗を流しながら乾いた笑い声を
 漏らす。

(こ、この姐さん、すげえ……)

マジョリーは意図的に、男があと少しで射精し
 そうな、ギリギリのラインで押しとどめて、弄んで
 いるのだ。

そのことがビシバンと伝わってくる。

(こんな芸当、先輩じゃ絶対できない)

生まれながらの王族であるリュシアンは女に不自
 由したことがない。最近のお気に入り、副官のオ
 ルタンスである。

出陣してからも、毎夜、彼女との楽しみを欠かし
 たことはなかった。

その関係に不満を感じたことはなかったのだが、
 オルタンスはマゾ気質な女性で、このように積極的
 に男を弄び、楽しませるといふことはしない。

(真面目な女より、淫乱な女のほうがセックスは楽
 しいのかも)

追い詰められる男の顔を見上げながら、マジョ
 リーはトロトロと溢れ出る先走りの液を楽しむ。
 「うふふ、びつくんびつくんさせちゃってかわい
 わね。このまま口に出してもらおうのもいいけど。あ
 たくししては濃い一番搾りは、下のお口で楽し
 みたいわね」

もう我慢できない、ということをもつて示す
 ため、男の前で膝を開いて屈み込んでいる淫乱お姉
 様は、右手を自らの下半身に這わせて、クチュクチュ
 と卑猥な水音を立てさせた。

ポタポタポタ……と床に滴が垂れる。

そのあまりにも卑猥な挑発に、好き者の青年はゴ
 クリと生唾を飲んでしまった。

「エッチな人だな」

追い詰められていることを悟られるのが癪に障つ
 たリュシアンは精いっぱい虚勢を張って皮肉を言う。

それに対してマジョリーは、猛り狂う逸物に頬
 擦りしながら質問してきた。

「あら、エッチな女はお嫌い？」

「いえ、大好きです！」

もう我慢の限界だ。一刻も早く淫乱お姉様の胎内
 にぶち込またいと欲したリュシアンは、彼女を抱え
 上げるようにして、ベッドへと移動した。

「きゃん♪」

ベッドに仰向けに押し倒されたマジョリーはわ
 ざとらしく悲鳴を上げてみせる。

そういう声を出すことによって、牡がますます牡
 として狂うことを知っている女の演技だ。リュシ
 アンはベッドに飛び乗った。

「覚悟してください。牝犬のようにヒイヒイとよが
 り狂ってもらいますからね♪」

「あは♪ 楽しみ」

牡欲に目を血走らせたリュシアンは、彼女の
 ショーツを奪い取り、背後に投げ捨てた。

そして、豪快なM字開脚にしてしまう。

赤紫色の恥毛に彩られた陰唇は、ぼっくりと開いており、失禁でもしているかのようにダラダラと愛液が垂れ流されている。

ここまで濡れていたなら、もはやクンニとか余計なことは不要であろう。

「それじゃぶち込んであげましょう」

いきり立つ逸物を愛蜜溢れる蜜壺に添えるリュシアンは、そのまま一気に叩き込んだ。

ズブズブズブズブ……

「ああああああ!!!」

牝鳴を上げたマジョリーのたくましい両足が、かつちりとリュシアンの腰に絡まってきた。

「くっ」

さすがは女将軍。その足の力は強い。もはや、かつちりと固められて逃げられなくなってしまう気がする。

（すげえ、奥の奥までぐつつより濡れている。それにおま……コもよく縮まる。熱くてドロドロのお肉の膣が縮まるとつまる場所は筋肉のおかげである。鍛え上げられている女性の膣洞が縮まるのは当然だ。

いわゆる未成熟なゆえの狭さではなく、成熟した女性ならではのヤワヤワとした締めつけだ。

（極楽♪ で、出そう……ってちよっと待て！）

入れたと同時に射精しそうになったリュシアンは、騎虎の勢いだったというのに、逸物をぶち込んだと同時に硬直してしまったりリュシアンを、マジョリーは咎める。

「あああら、どうしたの？　なんで腰を動かしてくれないのかしら？　あたくしのことをヒイヒイと牝犬のように鳴かせてくれるんじゃないかなかったの？」

悪戯っぽく笑いながらマジョリーは、下からかつちり固めた腰を突き上げてきた。

「ああ、ちよっと、そんないきなり……」

「あたくし、もう我慢できないの！　思いつきお願ひ！　あん♪」

若い牡が射精を必死に我慢しているのは、性に慣れた女には丸わかりなのだろう。マジョリーは悪戯っぽい笑みを浮かべながらも、気持ちよさそうに腰を使ってくる。

そのお姉様の淫腰に、リュシアンは乙女のように翻弄された。

（わ、畏だ。畏にかかった……っ!!）

フレチャオで絶頂寸前まで持つていかれていた逸物である。それをこんな凄まじい膣穴に入れたのは、たちまち射精してしまいたくなるのは自然の理。

しかし、仮にも漁色家を気取る男が、入れたと同じ時に出すなどというみっともない真似はできない。

リュシアンは必死の思いで尿道を締める。しかし、女のほうは容赦なく腰を突き上げてくる。

（あ、そんな……動かないで……で、でちやう、思わずそんな泣き言を口走りそうになるのを必死に我慢して、反撃の糸口を探したりリュシアンは両手を伸ばした。

そして、目の前にある美女のたくましい肩にかかった肩紐を外すと、ビスチュエの胸元を引きずり下ろす。

「あん♪」

バインツという擬音が聞こえてきそうな勢いで、黒い下着を突き破らんばかりの双乳が姿を現す。

（で、でかい……爆乳つてのはまさにこれだな）

さらにリュシアンは、その黒いブラジャーをも奪い取る。

白い大きな乳房がまろび出た。皴色に日焼けした

胸元とは違い、乳房は白かった。

ミルク色の乳房の中にあつて、ワインレッド色の大粒の乳首が生々しい。

（エロ乳だ。しゃぶりごたえがありそうだ）

下から女の荒腰でガンガン突き上げられているリュシアンは、完全に主導権を奪われていたが、それを取り戻そうと、両手で乳房を鷲掴みにする。

「あん♪ そんなに強く採まれたら、たまらないわ」

射精を必死に我慢しているリュシアンは、気を逸らす意味もあつて、目の前の爆乳を必死になって採みしだき、ぼつてりとしたエロ乳首にむしやぶりついた。

「あああら、うふふ、どうやら、あたくしのおっぱいは殿下の御眼鏡になかったみたいですね。気に入っていただけたようで、嬉しいですね、ああ♪」

マジョリーの両手が、リュシアンの背中を抱いた。そして、より一層激しく腰を突き上げてきた。

（ああ、ちよぼが振り回される。雁の裏にザラザラしたところが……ダメだ、気持ちよすぎる。で、で、で、で……）

牝犬のように鳴かされると嗷嗷を切って始めたセックスだが、リュシアンのほうが牡犬になり、女体に貪りついている。

女の荒腰に釣られて、自然と自らも腰を使わずにはいられない。

「あん、いいですわ。ああん♪　さすがは噂の豪ちゃんですわ。こんな太いのでザクザクやられていたら、ああ、あたくしも、もう……」

男を抱え込んだマジョリーは、背筋を弓なりに反らして限界を訴え始めた。

「ああ、イク！　イク！　イク！　イク！　イク！　イク！」

「ぼくも、いく!!!」

女の歡喜の聲に釣られた。

ドビュドビュドビュ……!!!

我慢に我慢した牡欲をついに解放する。いや、掛
け値なしに女に絞り取られた。

「ああああ……!!!」

膣奥に、瀑布となつて襲いかかる若い牡のエキス
に、マージョリーの四肢は一段と強くリュシアン
の身体を締め上げてきた。もちろん、膣洞も、きゅっ
と肉棒を絞り上げる。

（気持ちいい、この姐さん相手なら、ぼく一晩中
も楽しめる）

事が終わると、マージョリーはリュシアンの頭を
抱いて唇を求めてきた。

拒む理由もないので、素直にその唇を受け入れる。
「うむ、んむ……うむ……」

肉感的な唇が、リュシアンの唇を食り、自然と互
いの口が開き、舌を絡みあわせる。

上から覆いかぶさるように接吻したものだから、
唾液が流れていく。それをマージョリーは貪り飲む。

そうやって思う存分に接吻してから口を離した。
マージョリーは満足げにリュシアンを抱き締める。

「はあ、はあ、はあ……さすがは音に聞こえた女つ
たらですわね。お上手ですわ」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。でも、ぼくつて
そんなに女つたらし？」

「はい。殿下のスキモノぶりは、この最前線の唇に
まで聞こえておりますわ」

マージョリーは艶やかに笑う。

「でも、これであたくしも殿下の女の一員ですわね」
その言い回しの微妙さを察して、リュシアンは忠
告した。

「あの、もしかして、ぼくが王族だからこういう関
係になったの？ だとしたら、見当違いだ。ぼくは
王家といつても主流とはいえないよ。ぼくの女に
なつたからって、特にいいことがあるわけではない」
実際、王族とは名ばかり、いつ消されるかわから

ないような不安定な立場だ。そんなことは承知して
いる、と言いたげにマージョリーは首を横に振るつ
た。

「あたくしは祖国を消失した根なし草です。だから、
フレイア王国に見捨てられるのが怖い。あたくしは
一人ではない。あたくしを信じ従ってきた部下たち
の生活を守る義務がある。そのためにはなんでもす
るつもりです。これはちよつとしたい保険のつもり
リュシアン殿とて、いざというとき、自分の女を見
捨てるのは躊躇うでしょ」

「なるほどね。すべては計算ずくですか」
結構、彼女を本気で気に入っていたリュシアンは、
残念だと溜め息をつく。

「ぼくは基本的に綺麗な女の人は拒まない主義だけ
ど、損得計算で寄ってくる女性はある限り好きじゃ
ないな」

身を起こそうとするリュシアンを、マージョリー
は慌てて抱き締める。

「気を悪くしたのなら謝ります。打算が後押しした
とはいえ、大前提として殿下が好ましいと思つたか
ら、こういう関係になつたのです。女として好きで
もない男に肌を任せるほどに落ちぶれていなくなり
ます。お詫びとして今度はあたくしが上にになりま
しょう」

「え」

抵抗する暇もなく、リュシアンは仰向けに寝かさ
れていた。その腰にマージョリーが跨がる。逸物は
未だ彼女の胎内だ。

「リュシアン殿は若いのですし、一発だけでおしま
いという条件はないでしょ」

「う、うん……」

裸の美女を見上げて、リュシアンは畏怖されたよ
うに頷いた。

確かに逸物はもう復活している。抜かず三発ぐら
い苦もなくできるどころか、一日に十発出したこと
もある絶倫だ。

しかし、この淫乱お姉様にかかつては、干からび
るまで吸い取られるような本能的な恐怖を覚えた。
しかし、漁食家としてここは逃げるわけにはいかな
いだろう。

リュシアンは両手を伸ばすと、乳房を鷺掴みにし
た。

「こんなエロエロな身体、もう一発なんかじゃ満足
できません。抜かず三発、いやヌカ六。いやいや朝
まで付きあつてもらいますからな」
「それは楽しみかも」
二人はその後、理性をなくしたただの牡と牝と
なつて貪りあつた。

「ああ……またパンヤパンヤ入ってくる。穴という
穴から溢れそう、あ、お願い休ませて、こんな立
て続けにイカされたら、ああ、もう、死ぬ！ 死
ぬ！ 死ぬ！ 死ぬじやう！ 許してええええ!!!」
「ダメです。どうぞ死んでください。ぼくのおち
ち」で殺してあげなす」
いかにタフそうな女傑といえども、所詮は女。男
の体力にはかなわない。それも若く活きのいい無限
の性欲のある牡に滅茶苦茶に犯されたのだ。
宣言通りの抜かず三発から、ヌカ六が始まつた
ときには、マージョリーは快感が飽和状態を超えたの
だろう。

吸り泣き始めてしまつた。

獣のように四つん這いになって、何度も何度も強
制絶頂に晒されて、おしっこも何度か漏らしている
ようだ。

シーツには大きい染みができてしまつている。

（あらあら、すっかりアへ顔晒しちゃつて。鬼のよ
うにおっかない女將軍もこうなつたらおしまいだ

「ハーレムマイスター」「ハーレムプリスター」「ハーレムウェディング」「ハーレムキャッスル3」「ハーレムパラディン」
「ハーレムレジスタンス」「ハーレムウィザードアカデミー」「ハーレムクライシス」

なあ)

一時はどうなることかと思つたが、完全に主導権を握つたことにリュシアンは満足する。

(しかし、ぼくもそろそろ打ち止めだな。次が最後だ)

肉棒が擦り切れてしまうのではないかと、思えるほどの激しい抽送運動の果てに、腎虚になりそうだ。

「それじゃ、そろそろまたいきませよ」

リュシアンの宣言に、マジジョリーは目を剥いてイヤイヤと首を左右に振るう。

「ウ、ウソ……もうダメ、おなかいっぱい。これ以上はいらない。こんなに入れたら産んじやうわよ」

絶対受精しちゃう。受精したら産んじやうわよ」

「別にいいですよ。養育費はしつかり出しますからご心配なく」

魔法で避妊をしているのだ。妊娠の心配はない。しかし、気分の問題であろう。リュシアンはせいぜい露悪的に宣言する。

「それじゃ、妊娠してくださいっ！ くう……!!!」

宣言と同時に、リュシアンは最後の一滴まで絞り出すような射精をした。

ドビュ、ドビュ、ドビュ……!!!

さすがにもう液量はそう出なかつたと思うが、肉棒は激しく脈打つた。

「あ、ああああああああ!!!」

四つん這いで犯されていた牝は、断末魔を上げながらまたびくと股体を痙攣させる。

「ふう、満足」

美人で有能で淫乱な女將軍を、自らの男根で完全に屈服させたのだ。リュシアンは充実感に浸つた。

そして、蜜壺から小さくなつた逸物を引き抜く。

「あんっ」

一晩中、胎内で暴れ回つていた肉棒がようやく抜

けたことに、マジジョリーは安堵とも名残惜しいとも取れる吐息をつく。

逸物を引っこ抜いたりリュシアンは、添い寝をするようにそつと肩を抱いてやる。

「マジジョリーさん、ぼくとこのセックスはどうでした？」

一晩かけて犯し抜かれたマジジョリーは湧ききつた表情で、息も絶え絶えに答える。

「ああ、ああ……はあ……はあ……気持ちよかつたあ……こんな初めて」

「それはよかつたです。ぼくも頑張つた甲斐がありました」

これは自分の女だ、という実感を持つたりリュシアンが優しくキスをしてやろうとしたが、マジジョリーのほうは恥ずかしそうに、シートに顔を突っ込み、高く翳した充実した尻肉をブルブルと震わせた。

「あ、でちゃう……っ！」

羞恥の悲鳴とともに、肉栓の抜かれた膣穴から白い液体が、水鉄砲のように噴出した。

ビュ……ッ!!!

うつ伏せになり、尻だけを高く上げた女の割れ目から、白い液体が天井近くまで弧を描く。

膣内いっばいに注ぎ込まれた精液が、膣圧によつて噴き出したのだ。

(うわ、飛んだな)

感心して見送つた先で、思いがけないことが起こつた。

「失礼します。閣下、そろそろ出陣のお時間なのですが？」

寝室の扉が開いたのだ。そして、鬚髯色の軍服を隙なく着こなした女軍人が入つてきた。

「あつ」

止める暇などなかつた。

パシヤッ!

マジジョリーの膣穴から噴き出した白濁液が、クリスタルのように透明感のある顔に降り注ぐ。

「……」

扉を開けた瞬間に、まさかこのようなものを浴びせられるとは、予想もできなかったであろう。黄金の頭髮を後頭部できつちり結び結び、ベレー帽で留めた女は、扉を開いた姿で茫然というか、硬直している。

その視線の先は、ベッドの上で高く翳した尻。そして、陰唇を真っ正面から直視することになってしまつていくようだ。

彼女は、オルタンズに続けてマジジョリーと、立て続けにリュシアンにやられた直後の女の陰唇を見つまつたことになる。

さすがに気の毒になつたりリュシアンは、茫然自失してしまつている。戦目付殿に恐る恐る声をかける。

「あ……、クリステイナ。大丈夫？」

精液を顔に浴びせられるというのは、それがかたえ好きな男のものであつたとしても、女には強い抵抗がある。

まして、好きでもない男の精液を顔面射精されるなど、許し難い恥辱であろう。

その上、大つ嫌いな女の膣内に一旦収まり、逆噴射した精液を浴びせられるのが、どれほどの屈辱か想像できない。

さらに言えば、彼女はエリート街道を突っ走つている、きわめて誇り高いタイプの女軍人だ。

ヒク、ヒクヒクヒク……

リュシアンに声をかけられたことでようやく、我に返つたらしい。

コメカミを引き攣らせ、頬を痙攣させたクリステイナだが、最大限の忍耐力を絞り出したらしく、震える手で懐からハンカチを取り出すと、必死に平静を装いながら顔を拭つた。

「あ、相変わらずお盛んなのは結構なことです」
 ベッドの上に乗る上司に向かってクリステイーナは、にっこり笑ってみせた。しかし、その青い瞳はまったく笑っていない。
 (コワッ！)

震え上がったリュシアンに、クリステイーナは苦言を呈する。

「お互い大人でなし、合意の上でのことでしようから、とやかく言うつもりはありませんが……。閣下は仮にも王族であり、將軍でもあるのです。抱く女ぐらいいは吟味して欲しいところです」

敵国からの亡命者であるマージョリーと一夜をとにもするなど不用心に過ぎる、と言いたらしい。

しかし、それは余計なお世話というものだ。リュシアンは反論する。

「あ、あの……戦目付殿、なんでここに……。いきなり他人の寝室に入ってくるのはマナー違反じゃないかな」

逆噴射精液を浴びることになったのは自業自得であり、ぼくの責任ではないよ、とリュシアンは暗に主張する。

それに対して、クリステイーナはぐつと右手を握り締めて、殴り飛ばしたいという本能を必死に抑えるかのように、懸命に言葉を絞り出す。

「何度もノックは致しました。一向にご返事がないので、失礼だとは思ったのですが、勝手に上がらせてもらったのです」

セックスのクライマックスであり、もつとも盛り上がりつつあったときだから、ノックの音など耳に入らなかった。

リュシアンは得心して話を促す。

「そ、そうなんだ……それでなんの用？」

「出陣命令です」

「なんでこんな夜更けに」

リュシアンの能天気な答えに、クリステイーナの理性はプチ切れたらしい。
 大声で応じた。

「敵が動いたんです！ 敵はこちらの都合なんて考えてくれません！」

「ああ、そうだね」
 その迫力に圧倒されたリュシアンは、慌ててベッドから抜け出した。

※

「あれがフルセン軍か。強そうだねえ」
 夜が明けきらぬうちに、フルセン軍の動きに呼応する形で、フレイア軍は、エバグリーン砦の守備をマージョリー將軍に任せて出陣した。

その数八千人。
 朝の強い日差しを浴びながら姿を現したフルセン軍は、約一万三千人だという。もつとも、敵は遠征軍であり、多くの輜重隊なども入っているから、実戦兵力としてはそう大差ないであろう。

白い砂を踏みつけて進み来るフルセンは、密集隊形を取っている。いわゆる魚鱗の陣というやつである。

一方迎え撃つフレイアは、左右両翼に広く展開していた。いわゆる鶴翼の陣だ。

リュシアン率いる二千人の部隊は最後尾で後陣を守る。

その砂丘の小高い丘に陣取ったリュシアンは、巨大な日傘を用意させて、その木陰で床几を置いて、高みの見物を決め込む。

その周りには、戦目付のクリステイーナ、実戦指揮官のルキノ、副官のオルタンスなど幹部が立つ。

「この布陣つてさ。ぼくらの参加する余地ないよね」
 リュシアンの感想に、クリステイーナが答えた。

「はい。ダングラール將軍は、明らかに我らを戦力外とみなされています」

「ああ、やつぱり」
 「納得しないでください！ こんな不名誉なことがありますか!？」

すこぶる機嫌の悪いクリステイーナは血相を変えて怒鳴りつけてくる。

そのキンキンとした甲高い声に、顔をしかめながらリュシアンは、今一人の実戦幕僚に声をかける。

「ルキノ、きみの意見は？」

三枚刃の戟を持ち、水色のピキニ鎧と白いマントに身を包んだ彼女は、キャンキャン口うるさいクリステイーナとは対照的に、無口で、怒揚迫らざる雰囲気頼れるお姉さんだ。

「ダングラール將軍は緒戦で決めるつもりだ」
 ルキノの見立てによると、ダングラール將軍も、マージョリーと同じ意見らしい。

つまり、フルセンの新国王エルフィンには、どちらかというど知将肌の人。必ず小細工をしてくる。戦場における小細工とは、わざと負けたフリをして、自ら有利な布陣の中に誘い込むというのが基本である。

「だから、逃げられる前に、その餌を撒こうとして」
 腕を叩き切ろうというわけだ

「ふん、なるほどね。では、ダングラール將軍及び、諸將の健闘を祈ろうよ」

リュシアンはすっかり他人事の顔である。その能天気な上司に戦目付のクリステイーナは嘔みつきそうな目で見ているが、リュシアンは気にしない。

「先輩。喉渴いた、水ちょうだい」
 「もう、水は貴重品なんですすよ」

リュシアンが先輩と呼ぶのは、オルタンスだ。軍部の後方支援を担当する典型的な軍官僚だが、官僚的な匂いはしない。物腰柔らかで、軍人というよりも女教師のような雰囲気がある。

「でも、こんなに暑い中、待っていたら、いざとい

うとき声も出ないよ」

「はいはい」

元上司にして、現在の部下兼恋人のオルタンスは、なんだかんだ言ってるリュシアンに甘い。

溜め息をつきながらも、用意していた水をグラスで差し出す。

「飲ませてよ」

「もう仕方ないわねえこの甘えん坊は」

オルタンスは素直に、リュシアンの口元にコップを運ぶ。

うっぐ、うっぐ、うっぐ。

「はあ、生き返る。ぼく今日、朝ご飯も食べてないんだよねえ」

水を一気飲みし満足の声を上げたりリュシアンに、オルタンスはさらに小包を隠してみせた。

「そんなことだろうと思って、サンドイッチを持ってきましたけど、食べますか？」

「さすが先輩、気が利きますね。あーんっ」

「はい、あーんっ」

椅子に腰かけた若き將軍の口元に、後方支援の責任者は、サンドイッチと水を交互に運ぶ。

その光景に、クリステイナは目を刺き、ルキノは息苦しそうに首を横に振った。

幕僚たちが見て見ぬふりをしていると、行為はほとんどエスカレートしていく。

「やっぱ先輩の料理理って最高だな。お礼したくなっちゃう」

「あつ、ダメよ、こんなところでっ」

リュシアンの手が、オルタンスの乳房を制服の上から捕らえる。しかし、オルタンスは抵抗するそぶりを見せても、とてもではないが本気には見えない。

そんないちやつく二人に、クリステイナが切れた。

「ここは戦場であつて、恋人同士のピクニックでは

ありません！ 第一、ただバンにチーズを挟んだだけのサンドイッチなど料理理とは言えません！ 上手も下手もないですよ！」

どうやら、クリステイナの怒りの臨界点を突破したのは、サンドイッチのことらしい。

「いや、ほんと美味しいよ。クリステイナも一口どお」

「いりません」

グイッと顔を背けるクリステイナの口元に、リュシアンはサンドイッチを押しつける。

「そんなこと言わずに、同じ釜の飯を食って親睦を深めるっていうのも悪くないでしょ」

「サンドイッチは釜では作られません！」

後方部隊の司令官と、その戦目付が、暇に任せてくだらない言い争いをしているところに、一人真面目に戦場を見ていたルキノが口を挟んだ。

「敵、動きました」

根負けしたのか、フルセン軍の先鋒が動き出したのだ。

ヒタリヒタリヒタリ。

白砂の大地を、フルセンの兵士たちは進む。それをじっと待ち構えていたフレイア軍の中央部隊が迎え撃つ。

クリステイナはさっとあたりを確認した。

「早い。太陽はまだ我々の背です」

太陽を前にしては、眩しくて戦い辛い。つまり、太陽を背にした軍が有利だというのは、古来言われていたことだ。それなのに、太陽を前にして攻めてきた。

「やはり敵はわざと敗れてみせて、我が軍をどこかに誘導しようとしている」

クリステイナの観測は、フレイア軍全体の観測であった。

「両翼も出撃。三方から包圍殲滅せよ」

ダングラール將軍の指示に従って、フルセン軍の左右両翼が動き出した。もちろん、命令のなかったリュシアンは一兵も動かさない。

敵の意図が誘導であることがわかったのなら、話は簡単だ。

敵が負けようとしているところを一気に叩き潰す。そして、伏兵の待ち受ける場所にたどりつく前に戦闘を収めてしまえばいいのだ。

そうすれば一方的な勝ちとなる。敵の伏兵がどこにいるかわからないが、戦線参加しない以上、それは遊軍に過ぎない。後日、再戦となれば、先発部隊を壊滅させている敵は、純粋に戦力は半減しているし、士気も下がっている。

「なるほどね。みんなの読み通りの展開ってわけだ」

さすがに人の死ぬさまを見物しながらでは食欲がなくなる。リュシアンは食事を片づけさせた。

戦争の第一幕。

三方から包圍するフレイア軍が、フルセン軍の先鋒を潰す。そして、追撃戦になる。問題はどこまで追撃するかだ。

しかしながら、予想外のことが起こる。

いきなり、敵の先鋒の将に、七人ばかり叩き斬られたのだ。

「何あれ、鬼神？」

リュシアンの眩きに、クリステイナが答えた。

「旗印から見てロックス將軍でしょう。フルセン軍を代表する戦巧者で、闘将と聞いております」

「へえ」

ロックス將軍の異様な奮闘もあつて、戦は膠着状態になってしまった。それどころか、出血はフレイア軍のほうが多い。

「あれ、なんか、我が軍が押されてない？」

リュシアンの能天気な感想に、同じく戦況を見下ろしていたクリステイナが叫んだ。

戦巫女

鳳凰院小夜

ENCOUNTERING THE SHAMANIC PRINCESS

漫画 たちばな COMIC

はあ...
しよ触手なんて
初めてなのに...
気持ちよくさせるって
どうすれば
いいんだろ.....

はう...

ずんずん

清らかな巫女さんが
触手に奉仕する!!?

シヤラシヤ

お師匠様!!

なんなんですか?
この妖魔はっ!?

キヤツ!?

わっ

ふんずん
ふんずん
ふんずん

そして妖魔は
快樂のママ、
お前自身は
けっして

小夜よ
この妖魔を
イカせてみせよ!!
妖魔と戦えば
いずれ必要となる
修行じゃ

え〜っっ!!
でもこんなの
ムチャですよ
!!

イって
はならんぞ?
耐えることが
修行じゃ

いね
うね
あろ
ゆる

ちよと
行つて
くる

えっ!!



お師匠様には「イカせてみせよ」なんて言われたけど……

あ……こころかな……

ぬるぬるが出てきた……♡

もしかして気持ちよくなってる……？



うわあ……もうこんなにな……♡

それに……この触手の液、いいニオイ……



こっちもなの……？



口で奉仕してみようかな……



つわっさー
あはれて
困る

ずぼお



中へんおろろ...
身体熱くなり
きた...

ずるる

うんぱん

ジュン



喉の奥で
出てる

この味...スゴい!!
喉が焼けるみたいに
熱いっっ!!

トクン

ジュルルル

!!

トクン

怒濤の触手責めに痴情まみれの
アへ顔を晒す魔界のプリンセス！

まかい
おうじょ

魔界王女

金眼のファルジア

最終話 肉の宴に墮ちる王女

小説 NOVEL
うえだ
上田ながの

挿絵 ILLUSTRATION
ピエ〜ル☆よしお

登場人物紹介



ファルシア=メルル=カナル=レリアリア

魔界六名家の一つであるレリアリア家の王女。短気でワガママ傲岸不遜な悪魔嬢。



夜霧東子

ファルシアを人魔界でサポートする役目を負う。優しく気立てがよい。



エリス=クライトン=教鳥

六名家のガレスに仕えていたが、自らの野望のためにその力を奪った。



アレイア=ミール=ソレイユ

ファルシアに敵れてガレスの慰み者となる。ガレスの死後はエリスの配下。

前号までのあらすじ

魔界六名家が最後の独りになるまで殺しあう儀式「魔神転生の儀」。ファルシアは六名家のアレイアを倒し、陵辱の憂き目に遭いつつも魔神ガレスを討ち滅ぼす。しかし、そこで本性を露わにしたエリスによって、学園を舞台にした謀殺劇の顔食とされるのだった。

「お前の子供。可愛い？」
「首を傾げてエリスが訊ねてくる。が、その言葉はファルシアの耳には届かなかった。
(一) 殺さないで……。あんなのはいやいやいやいやいやい。存在しなきゃいけないんだ。殺さないで……。思考は殺意のみに塗り潰されていく。あつてはならない現実、消し去らなければならぬ。
金眼の魔神は全身に力が入らない状態のまま、ゆつくりと立ち上がった。ずらされた下着から乳房が覗き見え、開ききった膣口から流し込まれた白濁液が流れ落ちていることも気にしない。唐突なこの行動に、エリスも少し驚いた様な表情を浮かべ、髪を掴んでいた手を離した。
「こ、殺す……。殺さないで……。」

「お前の子供。可愛い？」
「首を傾げてエリスが訊ねてくる。が、その言葉はファルシアの耳には届かなかった。
(二) 殺さないで……。あんなのはいやいやいやいやいやい。存在しなきゃいけないんだ。殺さないで……。思考は殺意のみに塗り潰されていく。あつてはならない現実、消し去らなければならぬ。
金眼の魔神は全身に力が入らない状態のまま、ゆつくりと立ち上がった。ずらされた下着から乳房が覗き見え、開ききった膣口から流し込まれた白濁液が流れ落ちていることも気にしない。唐突なこの行動に、エリスも少し驚いた様な表情を浮かべ、髪を掴んでいた手を離した。
「こ、殺す……。殺さないで……。」

魔神を母胎に生まれ出したのは、巨大なナメクジの様な妖魔だった。
全身を粘膜に覆われた、醜い軟体生物。大きさは子犬程はあるだろうか？ そんなものがゆつくりとうねる様に蠢いている。
「生まれた。お前の子供……」
そんな化け物を陶酔する様な瞳で見つめるエリスが、ファルシアの髪を無造作に掴んでいた。
「ひっく!!」
未だ金眼の魔神は正気を取り戻していない。情けない声を漏らしながら、エリスに引つ張られるままに妖魔を見せつけられた。
視界に映り込むのは下等生物。
腐臭漂うその醜い化け物を生み出した者は――。
「う、嘘……。嘘よつ!!」
現実がファルシアに正気を取り戻させる。悪魔少女は金眼を見開き、髪を掴まれたまま少女の様に何度も首を振った。
「こんな現実是有り得ない。いや、あつてはならない。私は、ファルシア=メルル=カナル=レリアリアは、魔王となるべき存在なのだ。魔神を従え、世界を統べる者なのだ。その私が、魔王が、下等な妖魔

を生むなど」。
「嘘じゃない。現実。あの魔力が証拠……」
だが、エリスが現実を突きつけてくる。
醜い肉塊の様な妖魔の全身には、異様なまでの魔力が詰まっていた。下等生物だというのに、並の魔神すらも凌ぐ様な力を感じる。その強大なまでの力が、子犬並みだというのが妖魔の肉体を、凄まじい早さで巨大化させているのが見て取れた。
「違う……。違うの……。こんなの違うつ!!」
否定をしても現実とは変わらない。
醜い妖魔は膨張を止めることなく、肉塊はファルシアの数倍にも及ぶ程の巨体へと成長していった。
「すげえなあ。こんなかいかい化け物見るの初めてだ」
「そんな小さい身体で、よくこんなでかいの産めたよなあ。まさに女体の神祕だよ」
体育館の天井にまで届かない程の巨体を持つ妖魔を見上げて、生徒達が暢気に呟く。彼らも完全に正気を失っていた。
「お前の子供。可愛い？」
首を傾げてエリスが訊ねてくる。が、その言葉はファルシアの耳には届かなかった。
(三) 殺さないで……。あんなのはいやいやいやいやい。存在しなきゃいけないんだ。殺さないで……。思考は殺意のみに塗り潰されていく。あつてはならない現実、消し去らなければならぬ。
金眼の魔神は全身に力が入らない状態のまま、ゆつくりと立ち上がった。ずらされた下着から乳房が覗き見え、開ききった膣口から流し込まれた白濁液が流れ落ちていることも気にしない。唐突なこの行動に、エリスも少し驚いた様な表情を浮かべ、髪を掴んでいた手を離した。
「こ、殺す……。殺さないで……。」

それだけを吹きながら、封じられた魔力を右手に集中させる。本当に僅かな力しか集まらない。その上、これを放てば鼻血を穿る力も残らないだろう。それでも、妖魔を消し去らなければならない。あの妖魔を始末しなければ、ファルシアはもう生きていくことができない。
「消えろ……。私の前から消え――」
刹那、巨大化した妖魔から幾本もの触手が伸びた。ふらつく肉体では避けることも叶わない。あつさりとならぬファルシアは両手足を拘束されてしまう。そのまま金眼の魔神の肉体は、妖魔によって簡単に持ち上げられてしまった。
「ひっく!! ひいひいっ!!」
空しい絶叫だけが響き渡る……。
*
「こんな学校の前でマジかよ」
「何かの撮影か? あんな綺麗な娘が、スゲーマニアックなプレイしてるな。たまんねえ!!」
結界によって囲まれた校舎の外。学園の校門前に、人集りができていた。集まった人間達は一様に興奮した様な表情を浮かべている。彼女の視線が向かう先には一人の少女。夜霧東子の姿があった。
「み、見ないで……。こんな所見ないで下さい……。みんなんつ!!」
東子は頬を真っ赤に染め、ポロポロと涙を流しながら首を振る。募るのは恥ずかしいという羞恥心。
(見られてる。こんな姿を見られちゃってる……。いや……。恥ずかしい。恥ずかしいです……。) それもその筈だった。現在東子が人々の前に晒しているのは、まともな格好ではない。スカートを持ち上げ、ショーツを脱ぎ去り、俗に言ううんこ座りという体勢を取っている。下半身を剥き出しにしたまま「んふっ!! くふうっ!!」と息んでいた。
「こんな所で野暮なんて、最近の学校はどんな教育



をしてるんだまったく。出したら食べさせて」
人々から野次が飛ぶ。

「ち、ちがーわ、わたっしは、そんなことと、するつもりじゃーんいっ！ あっあっあっ!!」

耳に届くだけで心を引き裂かれそうになる人々の言葉。東子はそれを否定しようとしたが、その言葉は腔内に蠢く存在に掻き消されてしまった。

「どうしたの？ 早くしないと貴女死んじゃうわよ。貴女のマ……コの中にいる蟲は、人間程度の生命力なんか簡単に吸い尽くしちゃうんだから」

そんな姿を脇に立つたアレイアが妖艶に微笑む。そう、腔中で蠢くものは、アレイアによって産みつけられた妖蟲だった。何十、何百という芋虫の様な蟲が、肉壁の中で蠢いている。この蟲を胎外に排出しなければ、アレイアの言葉通り、東子の命はない。だというのに、東子の身体の自由は奪われていた。手を動かすこともできない。排出の為に与えられた方法は、息むこと以外になかった。

「死にたくない。死にたくないっ!!」
自分の死……想像するだけで恐ろしい。

「んいっ！ んいいっ!!」
改めて突きつけられた現実には、東子は人々の誤解を解くことを諦め、再び息み始めた。両手を握り、まるで脱糞でもするかのように力を入れる。

「お、尻を放いたぞ。くせー」
下腹部に力を入れるのだ、当然の様にガスも漏れてしまう。

(き、聞かれてる。でも、止められない。止めたら私、死んじゃう。まだ、まだ死ねない。まだ私は死ねないの……)

死ぬことへの恐怖——それと同時に、ファルシアを救わなければならないという想いがあった。自分を救ってくれたファルシアの為に、ここで死ぬわ

けにはいかない。彼女を救うまでは絶対に死ねない。だから東子はブスブスツと放屁しながらも、息むことを止めなかった。

「んっっ！ うごいて、てる！ あっあっ！ わたっしの、なっ！ 虫が、うご——んふう」

息むと蟲が腔中でジュズツと蠢く。大量の蟲が腔壁を擦り上げた。途端に全身を性感が駆け巡る。甘い声を上げたくなる様な気持ちよさを覚えた。ジュワリツと蟲によって開かれた腔口から愛液が分泌される。全身から力が抜けていきそうだった。

「んほっ……あんっ……だっめ、出す、の……しねないのっ!!」

だが、東子は快楽に抗い、更に力を下腹部に込める。ファルシアを救わなければならないという想いが、東子を支えていた。

「あっ！ で、てる！ おしっこ、おしっこでちゃう……んふっ！ ふぐーふぐー。んあ……み、見ないでくだ——んひいっ!!」

「ひぎっ！ で、てる……おしっこでひやってますうっ!! いや、いやあああああっ!!」

腔内からの圧力で膀胱が決壊し、失禁までしてしまふ。溢れ出す黄金水が、アスファルトの道路を濡らした。自分の意思で止めることもできない。その失禁と共に、

「んふ……く、くっる！ 蟲、蟲が!! ひっ、ひいいっ!!」

腔壁が収縮し、胎内の蟲を押し出していく。腔口がより開き、肉壁が外側に捲れ上がった。ブルブルと尻肉が震える。

「ひはーひはーひはー」
吐き出される荒い吐息。蕩ける様に瞳は潤む。身体中が敏感になっていた。制服が擦れるだけで、ピ

クツビクツと全身が痙攣する様に震える。身を委ねたくなる程の肉悦を感じた。

(ファルシア様……た、助けるの……私が、ファルシア様を……だから……)

が、ギリギリのところまで少女は耐え続ける。パタパタ羽を振りながら強がる悪魔少女の姿を思い出し、東子は必死に息んだ。

ピンク色の腔口から、糸を引きながら愛液が流れ落ちていく。開いた花弁の奥で何かが蠢いているのが見えた。そして——

「あ、でっる！ でますう……あああっ!! んあああ……!!」

あびゅぽっ！ あびゅぽおっ！
開いた肉穴から蟲が溢れ出す。

「ひっ！ んひいっ！ んひいっ!!」
あびゅぽっ！ どっぴゅぽおおおっ！

数十、数百という妖蟲が、まるで脱糞でもしたかのように辺りに飛び散った。

「んあああああっ！ で、でった。蟲出たあっ！ んいっ！ いっく、いっくううううっ!!」

胎内の解放感が絶頂に変わる。東子は息み姿のまま瞳を見開き、達した。全身が肉悦に震える。蟲を排出した蜜壺から、プバァツと愛液まで噴き出した。

「あ、あひ……ひはあああ……」
更に再びの失禁。黄金水が周囲に飛び散っていく。

「あ、あひ……ひはあああ……」
氣息がが股体を包む。半開きになったままの口から、東子は甘い息を漏らした。

「蟲なんか出したぞ。どんなブレイドだよ？」
「あんなもん出してイクなんて、変態か？」
野次馬達から心ない言葉が向けられる。
(見られた……こんな姿を見られちゃった……)
より大きな絶望を心にもたらず。ただ、東子には、そうして落ち込んでいる暇さえも与えられなかった。

「よくやったわね。でも、休んでる暇はないわよ。何せ、本番はここからなんだからね……」

アレイアが妖艶に微笑みながら、自分自身のスカートを捲り上げる。ピクピクと震える肉棒がそこにあった。ファルシアのモノよりも大きい。カリの大きい黒光りするペニスだった。肉茎には幾本もの血管が浮かぶ。

「や、そ、それ……それだけは……やめて……」

東子は恐怖混じりの声を上げ、しゃがみ込んだ体勢のまま後退る。ファルシア以外の誰かに犯されるなど、考えたくもない。

「駄目よ。どうせあのクソガキに散々犯されるんではしょ？ だから、奪ってやるの。この私が……あのガキ以上の快楽を、この私が教えてあげるわ」

アレイアの切れ長の瞳がこちらを捉える。ただそれだけで、東子の肉体は勝手に動き出す。ゆっくり立ち上がると、両膝に手を添え、敵に対して腰を突き出す様な体勢を取ってしまった。

剃き出しになった体液塗れの腰を、アレイアに向けて振ってしまふ。

「や、やめて……か、勝手に私の身体を動かさないで下さい……」

相手の魔力によるものだというところはいは分かる。が、当然抗議など受けつけられなかった。アレイアはニタニタ笑ったまま、背後に立つと、何の容赦もなく東子の膣口に肉先を押しつけ、そのまま肉棒を挿入してきた。

じゅぐっ！ じゅぼっ！ じゅぼぼおっ！

「くひっ！ お、おっき、おおきすぎます！ んあつ！ あ、穴が、穴が開いちゃうつ！ 私に穴が開いちゃういますうっ！」

ファルシアのペニスにならされた蜜壺には、大きく過ぎる。膣壁が肉槍によって二つに割られていくかの様に感じた。アジョバツと愛液が飛び散る。しかも、

先程絶頂を迎えたばかりの肉体は、挿入されるペニスの感触に、どうしても快楽を覚えてしまふ。腰を引いたような体勢の少女に密着する妖艶な女。二人の下腹部は醜悪な肉によって繋がっている。むっちりとした太股同士が絡みあう。

「くふっ……堪らないわ……貴女のマコ。ふうふ……このマコならあのガキもきつと悦んで腰を振ったでしょうね。こんな風に」

容赦なくアレイアが腰を振る。何度も何度も膣奥に、肉棒を叩きつけてきた。クイッククイッと盛りの付いた犬の様に振られる腰。カクカクと膝が震えた。子宮口に肉先が密着し、そのたびに目の前が真っ白になる。プルプルと大きな乳房がピストンに合

わせて激しく揺れた。

「あつあつあつあつあつ……」

（な、んで？ こ、こんなに気持ちいいの？ わ、私は、ふあ、るしあさまのものなのに……）

戸惑いながらも感じてしまふ。惚ける瞳。開いた口端からは唾液が垂れ流れた。

「なんてエロい娘だよ。も、もう我慢できねえっ！」

「まったくエロい。あのプルプル揺れるおっぱいを前に、じつとてんかいらねえよっ！」

立ちバックで犯されるこちらの姿に、周囲の男達が目も眩しさと瞳を輝かす。こんな痛態を見せられて我慢できる筈もない。彼らは犯される東子に近づいてくると、容赦することなく制服を破り捨てる。下着も同時に突き取られ、弾ける様に乳房が晒された。

「ひっ！ み、みな……んくひっ！」

増幅する羞恥心。しかし、男達は斟酌してくれない。彼らは「うほっ！ 堪らんおっぱい！」などと嬉しそうに呟くと、乳頭にむしゃぶりついてきた。

「お、おっぱいすわ……んひっひっひんんんっ！」

乳頭。簡単に形を変えられてしまった胸から、全身に甘い痺れが広がっていく。

（転がされてる。お、おじさん達の舌で、おっぱいが転がされちゃってます……。いや、いやなのに……何で？ どうしてこんなに気持ちいいの？）

自分自身が分からなかった。自分を犯す相手は敵であり、見ず知らずの人間である。そんな相手に汚されているというのに気持ちがいい。ファルシアに抱かれている時以上の快感を、東子は覚えてしまっていた。

「さあ、こつちも握って」

ニヤニヤ笑う男達が、肉棒を無理矢理握らせてくる。掌に生温かい感触が伝わってきた。東子は無意識のうちにそれを握り、抜き出してしまふ。

「ハアハアハア……こんなに腰を振って……んっんっ……そんなに気持ちいいの？」

そんな東子の耳元でアレイアが囁く。

「ち、がいます。き、気持ちよくなんかありません……あつあんんんっ！！」

少女は魔術の言葉を決意する。だが、敵の言葉通り、東子は自分で腰を動かさず、アレイアのピストンに合わせて腰を振り始めていた。悪魔の下腹部に自分自身の腰を擦りつける。膣口から愛液が溢れ出し、太股を伝って流れ落ちていった。

「あつあつあつあつあつ…… だつめ、もう、もうだつめええええっ！」

乳房を男達の唾液で、掌をカウパー液で、下半身を自らの愛液でぐしょぐしょにしていながら、東子の肉体はいつしか限界まで昂つていく。

「いいわ。たっぷり流し込んであげる。はあはあはあ。ほら、しっかり受け取りなさい！」

そんな東子に微笑むアレイア。彼女の肉棒は挿入時の倍くらいにまで膨張していた。

じゅぼっ！ じゅぼっ！ じゅぼっ！



より激しいピストンが少女を襲う。一回突くごとに、更にペニスは大きさを増していた。東子も「あーあーあー」とよがりながら、何度も身体を震わせた。立ったまま二人の女が淫らに腰をくねらせあう。東子の口は半開きとなり、口端からは唾液が垂れ流れ続けた。その光景に乳房にむしやぶりつく男達も自らの肉棒を抜き出す。

「で、射精するわっ！」

破裂しそうなまでに亀頭を膨らませたアレリアが限界を告げた。ピクピクッと胎内のペニスが痙攣する。それと同時に男達も「お、俺達もだ」と限界を告げた。ジューコッジュコッと肉棒を抜く水音、臭気が増していき、そして――

「びゅぽっ！ どびゅっ！ どっびゅるうっ！！
「で、射精するっ！！ ひいっ、ひいひいっ！！ な、陰中に熱いのが、あぢゅいのがあああっ！！ いぐっ、いぐのおおっ！！」

白濁液の射精が始まる。膣内のペニスがかんぴクンツと痙攣し、ポンプの様にザーメンを膣中へ流し込んできた。それと共に、男達の肉棒からも白濁液が撃ち放たれる。無残に制服を破り捨てられ、剥き出しとなった乳房、鎖骨、下腹部、顔にまでザーメンシャワーが降りかかった。

「あぢゅっ！ あぢゅいのお……やけるしちゃうの……わらひっつひやうのおお……」

「あぢゅっ！ あぢゅいのお……やけるしちゃうの……わらひっつひやうのおお……」

「あぢゅっ！ あぢゅいのお……やけるしちゃうの……わらひっつひやうのおお……」

「あぢゅっ！ あぢゅいのお……やけるしちゃうの……わらひっつひやうのおお……」

「あぢゅっ！ あぢゅいのお……やけるしちゃうの……わらひっつひやうのおお……」

「あつ！ あーあーあーあーあー」
途端に少女の表情は、再び快楽に墮ちていった。

「んぶえっ！ ふげっ！ うぶえええっ！」
「フルシアを捕らえた妖魔の行動には、何の容赦もない。まるで玩具の様にその小柄な股体を体育館床に擦りつけてきた。」

「ぐじゅっ！ じゅぐぶっ！ ぐじゅるっ！
体育館床には先程男達が散々射精した白濁液が、水溜まりの様に広がっている。それを身体中に擦りつけられていき、まるで最高の食材にソースを絡めるかの様な行動だった。

「んひゅっ！ んぶっ！ んえっ！ んええっ！」
床に擦りつけられる頬。口腔や鼻の穴にも白濁液が入ってくる。皮膚の中にまでザーメンが染み込んでくる様に感じた。そんな屈辱的な行為でさえ、肉悦を覚え込まされた肉体は快楽として感じてしまう。

「く、しゃいのに染み込む……あつあつ……ゆる……んひゅっ！ おっ、おほおっ！」
口に詰まったザーメンでまともな言葉にならない。六名家最大の魔神のものととても思えない程に、無様な姿だった。

右足首を触手で絡め取られ、宙吊りの姿勢にされる。全身に絡んだザーメンが、糸を引きながら床に向かつて流れ落ちていった。肌の上を精液が流れる感覚すら、心地よく感じてしまう。

フルシアは全身を桜色に染め、甘い発情臭を漂わせる。時折ヒクヒクとし小柄な股体を震わせた。「気持ちいい？ 今のうちにたっぷり味わえ。お前はこれから全身の魔力を吸われ、死ぬんだから」

そんな様子を見上げるエリスが口を開いてくる。勝利を確信している為なのか、彼女の頬も紅潮していた。

「す……う？ そ、そんなこと……」
「できる筈がない。如何に結界で魔力を遮断されていても、生きた魔神から死ぬ程までに魔力を吸い出すなど――」

「ま、まひやかっつ！！」
「そこで気がつく。それと同時にフルシアの顔色は一瞬で青黒めた。つまりこの妖魔は……」

「そう。その妖魔は魔力吸収に特化している。妖魔が吸った魔力を私が貰う」
エリスが笑った。

同時にナメクジの様な妖魔の口に当たると思われる部分が開いた。粘膜に覆われた肉壁が覗く。吐き気を催させる臭いが漂ってきた。

「わ、私を喰うつもり！！」
有り得ない。たかが妖魔が魔神を喰らうなど、あつてはならないことだった。

「や、いやっつ！ いやあああっ！！ こんな……の、やめ、やめさせなさいいっつ！！」
フルシアは絶叫を上げ、羽を、尻尾を、全身を振って逃れようとする。しかし、妖魔を振り払えるだけの力は、まるで戻っていないかった。

「グエッグエッグエツ！！」
暴れるフルシアの姿に、妖魔が笑う。あまりに不気味過ぎる笑い声だった。そのままこちらの身体に自分の口元へと運び出す。

「やだ、私は……ま、魔王になる……魔王なのよ……こ、こんな……こんなの……許されない……許されないのよ……」
抵抗もできずに、自身の権威を振りかざす。あまりに滑稽過ぎる言葉だった。当然妖魔は止まらない。「すげー！ フルシアの躍り食いだ！」





「喰つてみたら美味そう……なわけねー！ ザーメン塗れできたねーっつ！」

あまりに非日常的過ぎる光景。が、これを見る生徒達は笑っていた。男子生徒も女生徒も、こちらを指さし、歓喜の表情を浮かべている。が、それを気にする余裕はファルシアにはなかった。

徐々に妖魔の口が近づいてくる。鼻を突く臭いもより濃くなっていく。

（いや、こんなの……こんなこと……）

妖魔に喰われる——想像するだけで、ファルシアの身は震えた。

「いや……いやあ……」

「ハアアアアアア」

下等生物が与えられた餌に歓喜の息を漏らす。

「だ……め。や、やめ、やめて……やめ、さ、せて……お、おね、お願いだから。お願いだから、こんなのはやめさせなさいよ……」

この時、金眼の魔神は生まれて初めて恐怖を覚えた。カタカタと歯が音を立てる。相手が見下してきた人間だということも忘れ、ファルシアはエリスに對して懇願していた。

「……やめさせて……？ 頼み方が悪い」

が、敵は聞き入れない。

「そっぞ。お願いなら言い方ってものがあるだろ」同時に生徒達が囁き立てる様に口を開いた。

（に、人間があっ！で、でも……こ、このままじゃ……わ、私は……）

妖魔に喰われ、捕食されてしまうだろう。想像しただけで、ぶつぶつと鳥肌が立った。ジワリッと瞳に涙さえ浮かぶ。

（やだ、死にたくない……死にたくないのお……）

敵に頭を下げるくらいなら、死ぬ方がマシだと思っていた。だが、現実を突きつけられたファルシアは、恐怖を覚える。死にたくない。だから——

「ゆ、許して……助けて、助けて下さい……。死にたく、死にたくない……。私……。死にたくないのお……ごめんない。ごめんない……」

涙が零れ落ちる。ブライドをかなぐり捨て、許しを請うた。

「おあつ！ マジで謝ったぞ」

「許して下さいだつてよ。ぎやははつ」

人間達が笑う。その声が、心に深く突き刺さった。彼らに合わせるようにエリスも微笑む。

「よく言えた」

こちらを褒めてきたりもした。

「じ、じゃあ……」

僅かな希望をファルシアは覚える。しかし、そんなものは甘い考えでしかない。

「でも駄目。お前の魔力は私のもの」

あつさりとは希望は打ち砕かれ、ぶらりと垂れ下がった両手が、ゆつくりと妖魔の口の中へと——

「ひっ！ や、いやっ！ いやああああつ！！」

少女の様な悲鳴が漏れる。誇り高い魔神の見せる姿ではなかった。

ただ、そんな悲鳴を上げたところで妖魔は止まらない。手だけではなく、頭から身体まで、妖魔の口腔に飲み込まれていく。ムワツとした生温かさが、ファルシアの全身を包み込んでいった。

「ひいっ！ ひいひいっ！」

恐怖に引きつる。

「じまぼっ！ じまぼぼぼぼっ！」

失禁。下腹部が熱くなっていく。が、それを気にする余裕はない。自分が尿を漏らしているという事実を認識するよりも早く、妖魔の舌らしきものが、ファルシアの股体に絡みついてきた。

「ひっ！ やっ！ く、臭いっ！」

腰に赤い柔肉が絡む。妖魔の唾液が全身を濡らし

ていった。ぬるま湯に浸かっているような感覚を覚

える。そのまま舌が全身を舐め回してきた。

「じゅぶっ！ ぐじゅぶっ！ ぶじゅるるるっ！」

「んひっ！ あつ！ 気持ちわ——んあああつ！」

巨大な舌が金眼の魔神を弄ぶ。口腔粘膜が全身を包み込み、全身が肉壁に圧迫された。

「あつあつ！ 熱いひいひいっ！ ひっ、ひーひーひーひー」

熱液につけられているような感覚を覚える。肌がちりちりと焼かれているように感じた。その感覚を

肉体は快楽として覚えてしまう。

ざらついた舌の表面が、脇の下から胸を舐め上げ、頬を擦る。同時に口腔内でも伸びる触手が、太股に絡みつき、ぶじゅぶつと容赦なく腔内に先端部を挿入してきた。

「くひっ！ は、挿入って——んひっ！ おつき、おつき、こ、こんなの……あつあつあつ！！」

身体を内部から押し開かれるような感覚が走る。

何とか声を押し殺そうとするが、どうしても甘い嬌声が漏れてしまった。全身を舌で舐め回され、転がされる。

「おぼっ！ おぼっ、ほあああああつ」

腔内を這い回る触手。全身を押し潰そうとする肉壁。身体中を締め上げる舌。その舌からより多くの触手が分岐し、乳頭や淫核を責め立てる。

「うひっ！ ひっひおっ！ そ、それいじよ、うはつ！ ぽおおおっ！！」

自分の身に何が起きているかさえも理解できない。唯一認識できていることは、これが異様なまでに気持ちがいいということだった。

ぶじゅぶつ！ じゅぶつ！ ぐじゅるるっ！

「おひよっ！ ひっ！ ひっひっひんんん！！」

二本、三本と新たな触手が腔壁を押し開く。

（や、破れる……私のマ……コが破られるっ！ あつ

「魔女狩り」の手から救った魔法少女はどうやら妹系？



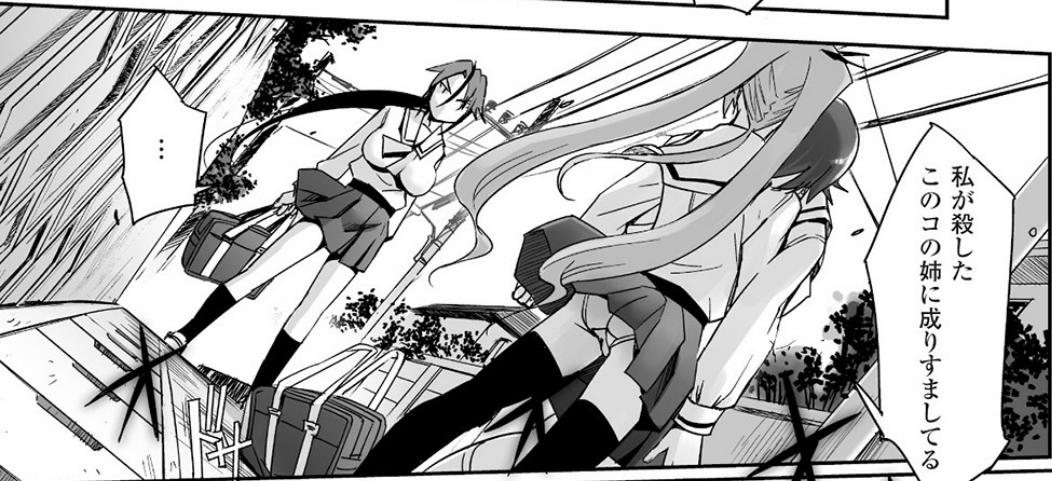








答えろ…



私が殺した
このコの姉に成りすましてる



キミはなんだ？

くっ！



起動っ！

サテユルメ
マグネシア…



その姿はっ！



待てっ！



私は…





魔女かつ

その姿...



ああ...

じゃあお前も?



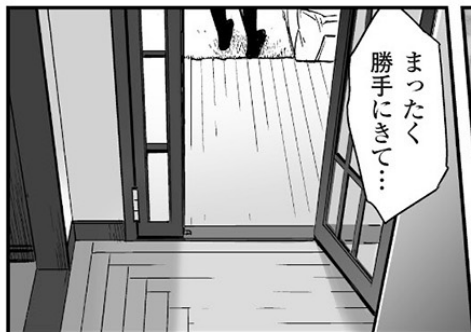
私はイスカ

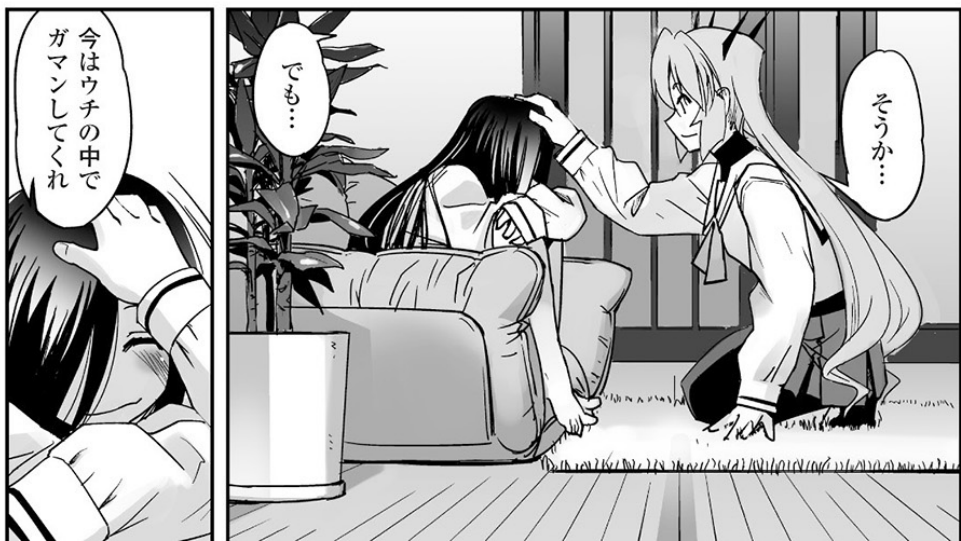
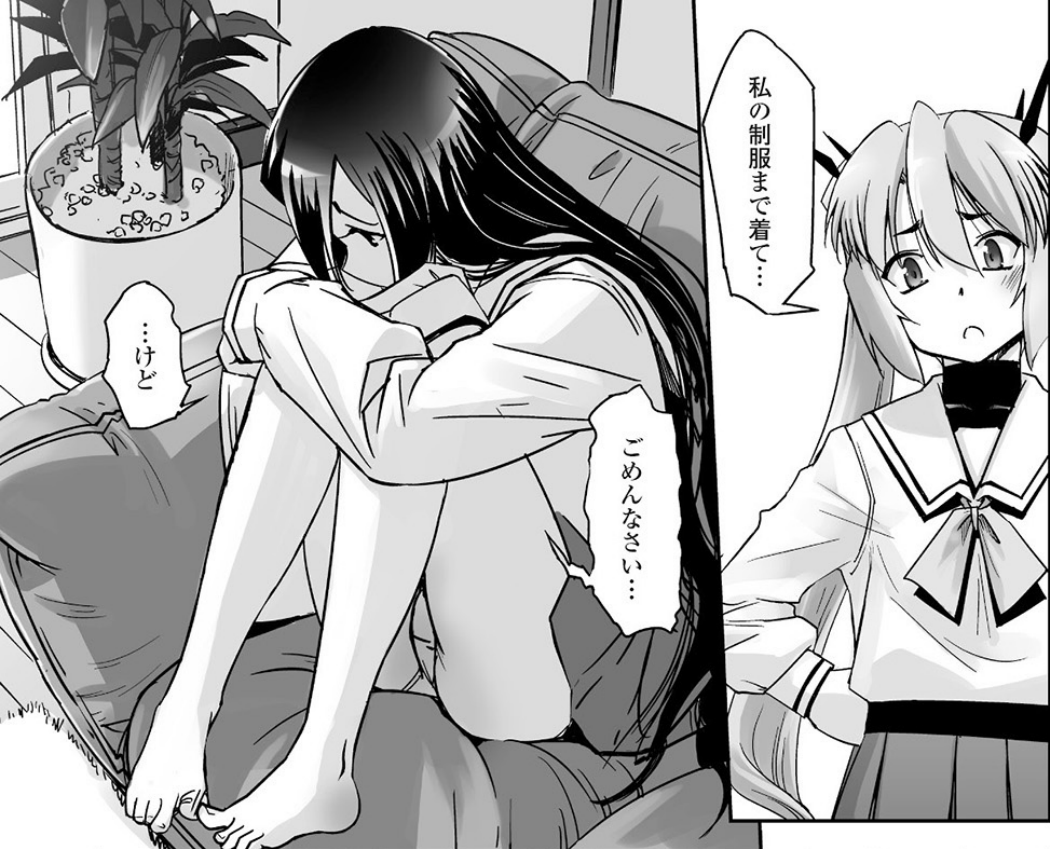
こっちはヨゾラ

魔女だ

...セツナだ











長靴をはいた 猫耳少女

ねこみみしろうじ

しなやかなるネコミミ騎士の肢体を
規格外の巨軀が蹂躪する!!

小説 NOVEL 黒井弘騎
挿絵 ILLUSTRATION jema

むかしむかしのお話です。
心優しい少年ペローは、悪い兄弟に親の遺産を騙し取られ放浪の旅を続けおりました。

ある雨の日、ペローは、自分と同じように孤独な一匹の猫と出会います。

ペローは「こんな冷たい雨の中、裸足で歩くのは可哀相だ」と、唯一残された親の形見の長靴を猫に与えました。するとどうしたことでしよう！

猫はみるみる美しい猫耳少女の姿となり、ペローにかしずきました。

「ああつペロー、キミみたいニヤ気高い人間は初めて！ だから、キミをわたしのご主人様にしてあげるわね！」
驚くペローを半ば無視し少女は押しかけるように主従の契りを結びました。

彼女の名はシャル、知勇に長けた猫の妖精ケットシーの女騎士。勝手気ままな猫少女は無垢なペローを尻に敷きながらも、主君が大侯爵になれるよう尽力する、と誓います。

こうして長靴を履いた猫耳少女と心優しい少年の旅が始まったのです。

※

「ねえご主人様、寒くなあひ？ よかったらあ、もつと身を寄せて……」

「う、うわつ！ いいよシャル、そんなに近づいたら……あつ、シャル」とある宿場町のとある安宿、路銀もろくにない二人は、一つのベッドの中で、身を寄せあつて暖を取っていた。

いや正確には、一匹が一人を半ば強引にベッドに連れ込んでいるのだが。

「あつ、ご、ごめんねシャル！ 狭いから、へ、変なところ触っちゃって……」

「ふふ、謝らなくてもいいのに。キミはわたしのご主人様なんだから。だからあ、もつと好きにしてもいいの！」

「ほ、あ、遠慮せずに……にやはつ」

少し身じろいだけで、互いの身体が触れあう。擦り寄ってきた少女の乳房に、少年の手がむにゅりと触れた。

「わ、わ。柔らかい……じやなくて！」

意識していないわけではない。大人

びたシャルの胸はとても豊かで、騎士の矜持を表すかのように凛と張られた姿はとても素敵だ。そんな誇り高き騎士もやはり女の子。いざ胸に触れてみれば、蕩けそうな柔らかさに男心を探られる。だが純朴な少年は背徳感に耐えられず、逃げるように身体を離れた。

「や、やつぱりだめだ！ シャルは女の子なんだから、一人でベッド使つてよ。ボク、床でも大丈夫だから！」

ベッドから飛び出したペローは、恥ずかしさで顔を真っ赤にしていた。

「うふふつ、照れちゃつて。相変わらず可愛いねペローは。それに……」

悪戯に微笑み、少女も少年を追つてベッドから降りてきた。白いニツを

はね除け、健康な肢体が露にすると

「本当に……優しいんだから……」

「わー！ シャ、シャル、裸、裸！」

端正な美貌に満面の笑みを浮かべ、主人にのろけてみせる猫少女。純朴な少年は余計に顔を赤くし慌てふためく。

だがそうは言つてもペローも男だ。あまりに魅惑的なシャルの肢体に、思わず視線は吸いつけられていた。

すうりと伸びた美脚に、きゅつとくびれた腰、スタイル抜群の長身は四肢の先々に到るまで凛々し引き絞られ、それでいて女性らしい柔らかさも兼ね備えている。大人びた外見通りに乳房や尻峰はむっちり肉をつけ、魅惑的な色気を放っていた。年端もいかなない少年でも、思わず見惚れてしまつた。

そんな、雌豹のように美しい肢体だつた。そして実際に、シャルの肉體には雌豹さながらの特徴がある。肉感的な尻峰からしなやかに伸びる、艶と光る獣の尻尾。黒々と輝く長髪の頂には、立派な三角形の猫耳が飛び出していた。

シャルは猫の妖精ケットシーだ。その証である猫の耳と尻尾は、気高くも可愛らしいアクセントとなつて、美少女の魅力をも増している。

(シャル……すく、綺麗だ……)

最初は慌てていたペローも、そんな彼女の一条纏わぬ姿について見惚れてしまつていた。主の視線に気づいて、猫の尻尾と耳がびんんと反応した。

「あつ……ちよ。そ、そんなに見つめられると……は、恥ずかしいカモ」

「あ、ご、ごめん！」

大人びた美貌を赤らめ、シャルはさつとシートで身体を覆つた。ドキン、ドキンと胸が高鳴り、顔が赤くなる。

(も、もう！ 何やつてるのよシャル！ 誘つたのはわたしなのに！)

いつもこうだつた。少年を手玉に取るように誘惑するも、参つてしまつているのは自分のほう。実際には好きな相手はどうしていいかわからず、悪戯してしまつていただけなのだ。

「だ、だから謝らなくてもいいつて言つてでしょ！ キミはわたしの主人で、それに明日からはカラバ侯爵になるのよ。もつと威厳ある振る舞いをしてもらわないと……わたしの計画が水の泡になつちゃうでしょ！」

照れ隠しに、いつも通り生意気な口調で語る。とても従者とは思えない態度だが、これがいつものやりとりだ。

「うん。シャルが頑張つてくれてるんだもん。ボクも努力しないとね」

二人が結んだ主従の契約。旅の終点は、もう近づいてきている。

周囲への根回しは十分だ。あとは城さえあれば、ペローをこの地方の領主として国王に認めさせることができる。

「でも……本当に大丈夫？」

「なによ、まだわたしの腕前を信用してないの？ 今まで通り計画は完べ」

「そうじゃなくて！ シャル、ボクのために色々無理してるでしょ……？」

「ん……ペロー」

主の純朴な優しさが、胸に染み入る。高い猫耳が、ふにやつと垂れた。

(本当に、キミは……優しいニヤ)

不幸な境遇にもかかわらず、自分より他人のことを気遣える優しさ。それはあの出会いの日から、少しも変わつていない。純朴なこの少年に、生意気

な猫の妖精は心奪われているのだ。

「シャル……もう、無理しなくていいんだよ？ ボクはお城なんてなくても、シャルさえ一緒にいてくれれば」

「……ありがとうべく！ その言葉、すごく嬉しいですよ……ううん。だからこそ、わたしはキミのナイトとして、最後まで全力で働いてみせるわ！」

「おらずと語られる言葉を、シャルは打ち切った。相変わらず素直になれない猫少女だが、尻尾だけは感情を隠せず左右に大きく揺れている。

「シャル……」

「大丈夫だって！ 今まで通りすべて上手くやるから。だから、今日はゆつくりこの宿で待ってるのよ。それとも、独りぼっちは寂しいかニヤア？」

「え……も、もう！ シャルったら」

「にやふふ。それじゃ行ってくるよ！」
見事な女体を銃士衣装に包み込み、手早く旅支度を整える猫の騎士。鏝広帽からもスカートからも猫の部分は丸見えだが、ケットシーとしての誇りを自ら隠す気など、彼女にはない。

（ペローはわたしが入外の魔物と知りながら一緒にいてくれた。だから……この姿こそが、わたしの誇り！）

スタイル抜群の肢体を華麗な銃士服に包み込み、マントをたなびかせた騎士の姿は、誇り高く美しい。流麗に伸びた思い出の長靴で飾ると、シャルは電光石火の早業で窓から飛び出した。

「シャル……気をつけてね」

「うん、夜には戻るから。そしたらさっ

きの続きをしようね……にやふふ！」

※

「なアんだメス猫、見ない顔だなア？」

「お前、ここが偉大なオーガ王カズール様の領地と知って近づいたのか？」
人の近づかない広大な荒地、切り立った崖の上にそれはあった。

カラバ地方を恐怖と暴力で支配する人食い鬼の居城。巨大なオーガの門番が、訪れたシャルを威圧する。

「ええ、そうよ愚かなオーガども、貴様たちに用はないわ。わたしは用があるのは、お前たちの愚鈍な主だけ」
だが猫は、不遜な態度を改めない。

「もつと言えは、用があるのはお城だけなんだけど」
主人に対しても生意気な言動が目立つたが、オーガたちに対しては、もはや見下しているかのような尊大さだ。

「喜ばなさい。このシャルと偉大な主人ペローの役に立たせてあげる。貴様たちの主のもとへ案内しなさい」
自身より数倍も大きな人食い鬼たちを前に、あまりに不遜な物言い。

愚鈍なオーガたちも怒りに震える。
「なんだとてめえ、猫ごときがなめやがって。身の程思い知らせてやる！」

「はあ……やれやれ。なんて愚劣な反応かしら。まったく、脳まで筋肉で出きているような連中ね。もつとも……」

切れ長の瞳が、鋭く輝く。シャルは腰に帯びた長剣に、そつと手を伸ばす。

「そのほうが、手つとり早いけどね！」
猫耳少女は、まるで獲物を前にした

獣のような野蛮な笑みを浮かべていた。

※

「ヒ、ヒギヤアアアアア！」

凄まじい悲鳴が、城のホールで響き渡った。全身に深々と切り傷を刻まれたオーガの一人が、逃げるように主の間になだれ込んだ。

「フン、口先だけね！ ま、道案内の役目ができただけ褒めてあげるわ」

ドガツ！ その尻を蹴飛ばして、一人の少女が入室する。屈強の大鬼を相手取りながらも、猫の騎士には服装の乱れ一つさえもない。ただ腰に帯びた剣に、返り血がついているだけだ。

「で……お初にお目にかかる。貴方が噂に名高き魔王カズール陛下？」
部屋の奥、巨大な玉座に座る一匹のオーガに、シャルは不敵に歩み寄った。

「ほほう、悪知恵ばかりが取り柄のケットシーにしては腕が立つようだの。それに、どうやら肝も座っている」
他のオーガより二回りも巨大な体躯に、ねじくれた何本も角が生えている。

カラバ地方を支配するオーガの魔王カズールは、重々しい声で答えた。
「勝手には暴れてお終いではあるまい」

「流石は陛下、下々のオーガとは違い話かわかる。手短かに言えばこのシャル、陛下にお仕えしたく参つたです」

つまり流浪の身の自分を雇って欲しくて来た、と猫の騎士は語る。配下の門番をあしらってみせたのは、自身の腕を実際に見せるためだと付け加えた。

「カズール様の高名は道中幾度となく耳に致しました。騎士の剣は強く気高き者にこそ捧げるべきもの。それに、わたしは、強い雄が大好きな……」

と、猫の騎士は上目遣いな視線を送った。これまでの不遜な態度とは一変し、恭しくカズールの前に膝まつく。

「陛下、ぜひこのシャルを配下にお加えください。そして、お好きにお使いください……この剣も、身体も……」
しなやかな太ももをミニスカートから大きく覗かせる、細い指先でだけなく胸先をなぞる。上目遣いの濡れた視線を送りながら、シャルはそれとない所作で自身の魅力をアピールする。

「なるほどいい心がけだ！」
その艶やかな仕草に、愚鈍な魔王は鼻息荒く答えた。

「いいだろうシャルとやら、気に入ったぶり！ 望み通りワシの配下に加えてたつぷり可愛がってやろう！」

「はは、ありがたき幸せ」
（あーあ。男なんてバカばっかね）
品性下劣な言動に、シャルは内心、嘲笑を堪えるので精一杯だった。

（オーガなんて種族は総じて愚鈍で浅はかなものだけだ、こいつはまた絵に描いたような馬鹿殿だわ！）
もちろん、これまでの話はすべて嘘だ。すべてはただ一人主君と決めた少年のため。この暴君を騙して倒し、居城を手に入れるための策略なのだ。

そして成功までは、あと一歩だ。
「グフフ！ それではシャルよ、早速

触手奉仕と言えは……ってええ。ストレートなヤツも書きたかつたんですけどね、よく考えればいつも書いてますよね。

だが貴様の身体好きにさせてもらうぞ。貴様も満足ではないのだろう！」

玉座から立ち上がり、カズールは好色丸出してシャルに近づいてきた。極上の獲物を前に期待感を押さえきれず、早くも巨大な逸物が発起している。

「お、お待ちください！」
〔部下が脳筋ならボスは下半身まで筋肉なの？ どうしようもないわね！〕

あまりにもわかりやすい、しかし勢いのありすぎず雄鬼の言動に、シャルは内心呆れ返っていた。嫌悪感に思わず後退りながら、猫少女は語る。

「強い雄に抱かれることは、雌として望むべくもない幸福。しかしながら、まずはその前に、カズール様のお力を拝見させていただきたいのです」

「何、貴様ワシの力を試そうというのか？ 一体何様のつもりだ！」

「お怒りはごもっとも。ですがこのシャル、陛下の如意変幻の魔力について聞き及ぶたび、胸焦がしておりました。だから……お願いします」

はあつ、と熱い吐息を吐きながら、潤んだ瞳で魔王を見上げる猫少女。もじもじと身体をくねらせながらおねだりするその様は、愚鈍な悪鬼の自尊心を痛く刺激するものだった。

「そうかそうか、可愛い奴だ！ いいだろう、特別だぞ？ 見せてやろう」

気を良くしたオーガの魔王は、猫少女の誘いによって己が力をひけらかす巨軀に凄まじい魔力が宿り、全身が大きく膨らんでいく。最初から見上げ

るほどだったオーガの巨軀は、見る間に数倍、いや数十倍にも巨大化した。

「ガハハハ、どうだ！ これが魔王の血筋に備わる如意変幻の魔力よ！」
小山のような巨体を揺らし、勝ち誇る魔王。古樹のごとき角は城の天井に届くほどで、巨軀の影で部屋は真つ暗になってしまふ。フン、と荒い鼻息

ばされそうになってしまふほどだ。
「おおお！ 噂に聞いてはいましたが……なんとというお力、感服です！」

驚愕するシャル。これはかりは、不遜な猫にとつても演技ではなかった。如意変幻の魔力、即ち万物を自在に変えられる魔法の力。実際に目にするのは初めてだが、凄まじい魔法だ。

〔脳筋でも流石は魔王だわ。でもせつかくの魔力も、使いこなす頭脳がなければ宝の持ち腐れよ！〕

巨体の迫力に気圧されながらも、計算高い少女は冷静さを失わない。
「なんとご立派なお姿……このシャル、陛下に惚れ直しました。ですがさしものカズール様も、逆にお身体を縮めることはできないのですか？」

「ワシを誰だと思ってる。そんなことは朝飯前だ！ 何ならば、ネズミのように小さくなることもできるぞ」

美辞麗句に酔いしれてか、あるいは侮られたことに怒ったか。カズールは鼻息も荒く即答した。

「いや、にやんと?! ますますもつて非の打ち所もない御方……ああつ、お

願いです。ど、どうかこのシャルめに、そのお力もお見せに……」

わざとらしくしなを作り、猫耳を伏せてしおらしく恭順を示す。潤んだ瞳で強者に媚びるその媚体は、男心を痛く攪るものだった。

「わ、わたし……正直に言いますと、今のカズール様は少々怖いっつ。だから、小さく可愛らしいお姿で、できればその……し、して欲しいと……」

「グフフ、なるほどなあ。だが残念だが……ワシはこのまましたいのだ！」
「にやつ?!」

そこからは一瞬の出来事だった。鬼の腕が、シャルめがけて凄まじい速度でなぎ払われた。俊敏なケツトシーもサイズ差のありすぎず相手からは逃れられず、巨大な掌に囚われてしまふ。

「い、痛ッ！ 何をなさるのですか……あ、あら、乱暴なのは嫌あい！」
「こ、この……いきなり何するのよ、わたしに汚い手で触るな！ 低能が！」

自分より遥かに大きな掌にガツンリと掴まれ、少しも抵抗できない。鷲掴みにされたシャルは、そのままオーガの股間へと押しつけられた。今や猫少女よりも遙かに大きなペニスの上に、跨がるような格好で下ろされる。

「な、何するのよ汚らわしい！」
愚劣なオーガの中でももつとも不潔な部分に全身を押しつけられ、気高いケツトシーは嫌悪感に身震いした。

すぐにでも剣で突き刺してやりたいところだが、しかしこの体格差ではま

ともに戦っても勝ち目はない。
「そ、そうよ。焦る必要なんてニヤいわ。あと一押しニヤんだから！」

まずは相手を煽ってその気にさせ、小さくしてから安全に踏み潰す。それがシャルの計画だった。ここが相手の機嫌を損ねるだけだつて、この水の泡だ。

「カ、カズール様、痛いつ。こ、こんなに乱暴にされたら壊れちゃいますから……お願い、もう少し優しく……」

できる限りなよなよと、弱々しい少女を演じておねだりする。だがカズールはそんなシャルの媚体に、いっそう鼻息を荒くするだけだった。

「おいシャル、貴様ワシに従うと言いながら先程から命令ばかりだな？ 本当にワシに敬意を払っておるのか？」

「そ、それはもちろんです。今も敬愛するカズール様とこんなにお近づきになれて、もう胸が張り裂けそうです」

「そうか、ならばその証を見せてもらおう。そのままワシの分身に抱きつき、全身で奉仕して満足させてもらおうか」

「にやつ?!」
「そんなに……ふ、ふざけるニヤ！」

あまりに下卑た提案に、シャルは取り繕う余裕もなく総毛立たせた。騎士の誇りにかけて、そんな屈辱的な命令に従うことなんて絶対にできない。
「今まではお前の頼みを聞いてやったのだ、今度はお前がワシの命令に従う番だと思わんか？ グフフ、お前が可愛く誘うせいで、ワシももう限界でな」

密着している巨大ベニス、ビクビクと脈動しているのが伝わる。

「一度満足させてくれれば、今度はまたお前の望みを聞こう。どうだ？」

「う……。そ、それは……」

策士の脳裏で、めまぐるしく損得の計算が回る。こんな最悪の淫獣にご奉仕するなど屈辱の極みだが――

（で、でも……これもペローのため。主君のために負う傷は、騎士の誉れ！）

そうだ。これさえ終われば、あとは計算通りに進む。愛する少年のため、ここで退くわけにはいかない。

（それに……一度気持ちよくしてやれば、余計に頭も緩くなるでしょ。そ、そうよ。すべてはわたしの掌よ！）

結局は自分のペースでことは進んでいるのだ。問題は無い。そう結論すると、シャルはオーガ王に恭順を示した。

「わ、わかりました。他ならぬカズール様のお望みとあれば……お望み通り、そ、その……させていただきます……」

かつと顔を赤らめるシャル。恥辱を押しさえきれない表情は演技ではないゆえに、いつそう魅力的なものだった。

「よろしい。それではそのままワシのモノに抱きつき、全身で奉仕するのだ」

「う……は、はい。仰せのままに」

逐一やり方まで指示されては、誤魔化すこともできない。シャルは迷いを振り切るように軽く頭を振って、命令通りにベニスに抱きついた。

「う……く、ふう。にや……くう」

細い両手を肉胴に回し、両足で挟み

込むようにしてなんとかベニスに抱きつく。形良い乳房が押し潰され、ショーツ越しに股間と肉茎が密着した。ドクドクと鼓動するベニスの脈動が、遅しい質感が、雄の熱が匂いが、衣服越しに伝わってくる。

（こっ、この。こんなにガチガチにして……すぐ熱くて、硬い……！）

巨大化したオーガのベニスは、サイズはもちろん、その質感も恐ろしく剛健だった。黒々と光る砲身はガチガチに充血し、たぎりきった肉塊は火傷しいほどに遅しく、ドク、ドクとベニスが蠢くたび、抱きついていっているシャルのほうか揺さぶられてしまうほどだ、

（うあ、う、動いている。ドクドク……うう、元気づけるわよ！）

あまりの存在感に、たまらず圧倒される猫少女。熱せられた鋼を思わせる巨肉に、抱きついていられるだけで汗が滲む。蠢く肉塊から振り落とされたいように抱きついていられるのが精一杯で、ご奉仕するなんて不可能に思われた。

「どうした、早く始める。そのまま身体を上下させて、全身でワシの分身を洗うようにシゴくのだ」

「にやっ!? そ、そのにや」

あまりに破廉恥な命令に、たまらず声を上げるシャル。感情に反応し、猫の耳がピンツと立つ。

「ワシも我慢の限界だ！ 早くせねば、このまま振り落として殺してしまおうぞ」

「うにやっ、そ、それはお許しください。す、すぐにしますから……あ」

小刻みに腰を振られ、脅し通り腰から振り落とされそうになる。これ以上機械を損ねたら命令に従わないと、シャルは仕方なく命令に従った。

脈打つベニスにぎゅっと身体を押しつけ、ゆつくりと上半身をくねらせてベニスを摩擦する。柔らかな乳房が形を崩し、むにゅむにゅと揉む。

「ふにやっ……にや、にやふ。こ、これで……にやあ。いいですか……」

「おお、そうだ。いいぞ、そのまま続ける……グフフフ、気持ちいいぞ」

「は、はい……にや、にやふ」

しゅ、しゅ、むにゅ、むにゅ。

暗君の機械を伺いながら、命令通りに奉仕を続ける猫妖精。衣服越しに伝わってくる熱と脈動が、雌心に響く。

（ああつ、す、すごい。こんなに遅しく脈打つて……くうう、最悪だわ！）

あまりに野卑な反応に、嫌悪を抱かずにはいられない。それでもシャルはそんな本心を悟られないように我慢し、表面上は健気に奉仕を続けた。

（こ、こんなに早く終わらせてやるわ。この反応だ、たぶらずに……）

激しく脈打つ様子から、オーガもまた感じ入っていると確信する。

一度満足させてやれば自分のものだから屈辱には目を瞑り、早く射精まで導いてしまおう――そう割りきり、シャルは全身愛撫のペースを上げた。

胸が揉むほどに強く押しつけながら、

両足でもぎゅっとベニスを挟み込み、肉感的な太ももで圧迫して奉仕する。

「くふう……ど、どうですかカズール様。も、もう……ふにや、あ、あつ」

ビクン、ビクンツツ。激しい脈動が、押しつけた秘部に伝わってくる。遅しいビートに下腹を揺らされ、シャルはたまらず怯えた声を上げた。

（す、すごつ！ お、大きいだけのことはあるにや……お、お腹に響いて……シンシンしちゃう……）

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

抱きついていられるのも精一密着した巨肉が、さらに肥大化した。密着していた股と乳房に雄肉がグイグイとめり込み、激しい脈動が地肌 directly 伝わる。

さらには膨れ上がった亀頭部分が激しく脈動し、大量の先走りを溢れ出させはじめた。まるで滝のような先走りが、先端から砲身を伝わってシャルの

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

終わりが見えた――だがそんなシャルの見立ては、見事に裏切られた。

「ああ、ようやく準備ができてきた！」

巨大なオーガのベニスは、その耐久性もまた抜群だったのだ。猫少女の奉仕に反応した極太ベニスはムクムクと怒張し、二回りも径を増す。

「はあ、はあ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」

「あ、あ……ああつ!? そ、その、そのにや……また、大きく……うう！」



にやいで……やああ、あああ！」

頭上で、眼下で煌めく無数の牙。挟み込まれ咀嚼されれば、一瞬でバラバラにされてしまうだろう。死の恐怖に、さしもの強気な少女も戦慄した。

「くっ、い、嫌にやー！ こんにやのー！」
舌の上を四つ三つ這いで這って脱出しようとするも、捕食者の動きはそれより早かった。口門が閉じられ、シヤルはオーガの顎に挟み込まれてしまう。
「う、くうっ！ は、はにやせ！ この、このおっ！」

「グフフ、なかなか活きがいいのう。このまま踊り食いにしても美味そうだが、安心せい。今回は味見だけだ」

涎まみれの巨大な肉舌が、口内に囚われたままのシヤルの下半身に迫る。もがく足の先から太もも、そしてお尻までを一気に舐め上げられた。

「ひっ……にや、ああっ！」

粘液にまみれた生暖かい肉塊に下半身をなぞり上げられ、たまらない嫌悪感が駆け巡る。おぞましさを足をもじらばたと暴れさせるシヤルだったが、そんな抵抗はお構いなしに肉舌は往復を続けるのみ。舌の先端を股関節に食い込まされ、尻割れを押し開かれながら何度も何度も陰阜をしゃぶられまくる。

「うあつ、や、やめろお！ き、気持ち悪……ひにやあ、お、お尻いやあ！」
にゆる、ぐちゃ、にゆるっ！ 窄めた舌先でグリグリと尻割りを探られ、ショーツを食い込まされながら尻穴を穿られた。恥辱にびいんッと立ってし

まった猫の尻尾までを、悪戯半分に絡め取られシゴかれる。

「うにやああ、にやふう！ ら、らめつ……そこ、し、しつぽは……ふにやあ、た、食べやめなよ！」

瞬間、シヤルは今まで以上に身体を強ばらせて、甘い声で鳴き喘いだ。肉舌に尻尾を包み込まれ、ぐちゃぐちゃと唾液を塗られながらシゴかれると、たまらない快感に力が抜けてしまう。
「ううっ、尻尾はだめ。わたししつぽだけは、よ、弱いよ……！」

ペロロにだつて触られたことはない。猫の誇りを体現する尻尾は、同時に鋭敏な性感帯でもあるのだ。催淫魔術の影響によりさらに快感を増した弱点を舐られ、たまらない快感が駆け巡る。

「ふあああ、ふ、ふにやあ……あ、あ」
「ほう、なるほどここが感じるのか。メス猫らしい弱点だな、面白！」

生意気なメス猫らしからぬ弱点を見つけ、魔王はさらに責めを激しくしてきた。舌先で根元から先つぽまでをなぞり上げ、快感に痺痺する弱点をシコシコと擦り立てて追い詰める。鋭敏な弱点を虐めながら尻への責めも忘れず、執拗に肛門を穿りまくって尻割れを引き伸ばし肛愛がする。

「にやふ、にやあ、にやうう！ し、しつぽだめ……しつぽばつかそんにや……にやあ、お、お尻も許してえ！」
気持ちよすぎる弱点と恥ずかずすぎる急所を同時に責め立てられ、恥辱と快感が止まらない。執拗極まる舌責め

に、ついに泣きを入れてしまう妖精騎士。強気だった表情は浅ましく蕩け、秘唇からは屈辱の証が漏れ続いていた。溢れ出した恥蜜を味わうべく、巨大な舌が股関節を押し秘唇へ迫る。

「ひっ、やあ、やあ、そ、そこはだめ……あああ、にやうううう！」
オーガの狙いを察知し、咄嗟に内股気味に両足を閉じるシヤル。だが、快樂で脱けた身体には逆らう力など残されていない。力任せに太ももの間へ潜り込まれ、疼く秘唇へ思いっきり舌を食い込まされた。

「ひっ……くう、うにやあああ！」
野太い肉塊をきつく食い込まされ、鋭敏な割れ目が熱く疼く。ショーツがぐつと押し込まれ、中に溜め込まれていた愛蜜がじゅわあつと染みだした。

「グフフフ、いいやんに濡らしおつて。メス猫らしいやらに濡らさるわい……じゅび、じゅゆるるっ」

股に食い込まされた舌が小刻みに蠕動し、愛蜜を吸りとる。搾りたての恥蜜の味に舌鼓を打つと、カズールはもつと甘露を味わうべく、激しく舌を前後させて股間を擦り立ててきた。

「や、ああ、の、飲まないで……そんなや、は、恥ずかさないうつゆ……んはああ、し、舌動かさないでえ！」
疼く秘部を太肉塊で何度も何度も摩擦され、たまらない快感がほとばしる。羞恥に顔を染める猫騎士だったが、身体は従順に快樂に応じ、要求通りにだらだらと愛蜜を零してしまふ。それ

を味わおうとさらに舌責めは激しさを増し、股間に肉舌を食い込まされて擦られた。あまりの激しさにショーツは引きちぎれ、剥き出しになった秘裂に直接舌をつけられ吸い込まれた。

「ひああ、にやあ、にやあああ！ やああ、そ、そ直接……ひいっ吸わないでえ、す、吸うの激しいいっ！」
守るものを失った急所を容赦なく責め立てられ、シヤルは猫耳を痺痺させて悶絶した。グラブに包まれた指先が助けを求め震えながら空を掻く。

（あああ、ペロロ、ペロロ！ わたし、こ、このままじゃ……！）

明滅する脳裏に浮かぶのは、最愛の主人の姿。だが当然、彼女の手をとつてくれる主君はここにはいない。

「グフフフ！ 貴様はこのままワシのモノになるのだシヤル。それ、邪魔なものすべて破壊してやる！」
今まで獲物をくわえていただけだったオーガの顎が、突如咀嚼を開始した。鋭い牙の先端が両足に食い込み、銃士の証である長靴を一瞬で噛み砕く。

「あつ！ あ、ああああ……あああ！」
（そ、そんなに！ ペロロにもらつた長靴……わたしの、宝物が……！）
一番大事な宝物が、あつげなく粉碎された。喪失感やショックと同時に凄まじい怒りが騎士の胸で湧き上がる。「カッ、カズールッ！ よ、よくも……よくもご主人様にもらつた長靴を！」

理想の果てに天使は……

すでに
魔界の者ともは
浄化しつくしたと
いうのに

まったく
いつまでも
泣き虫だな

……
ミラリエル
お姉様……?

リアリエル！
もう
泣くのは
やめよ！



心安らかに
おるが
よい

いつも
いつでも
私がそばに
ついていて
やるからな

エリ アリ

天使の零と リアリエル

後編



漫画
COMIC

おおたけし

「ウキウキ」ステーション!!
好評発売中!



お姉様...?

お...

あいつをとめる道は
虚無に帰してやる事
だけだ!

救ってやると
約束したん
だろう!?

愛しい姉を
人間の魂を
すすり続ける
醜い化け物のままだに
しておいて
いいのか!?

殺せ
リアリエル!



槍よ

っ



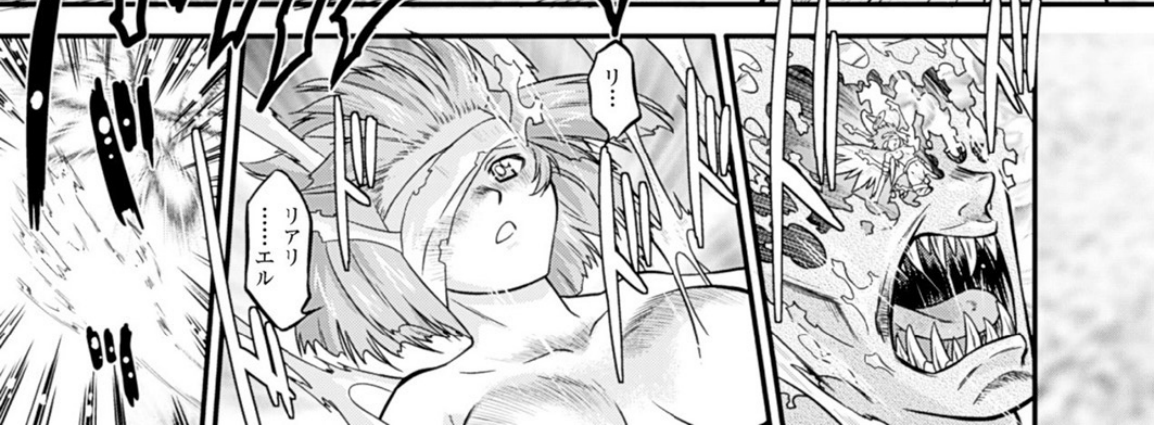
ふははははは!
天使が
虚無に帰って
ゆく姿は
美しいだろう!

そうだ
槍が悦んで
いるのが
わかるだろう!?
お前と槍で
あの化け物を
殺してみせろ!



う...う...う...
う

この人間の
魂だけは...
リアリエル
すまないな...
私は
この子の魂だけは
何としても守って
やりたいのだ...

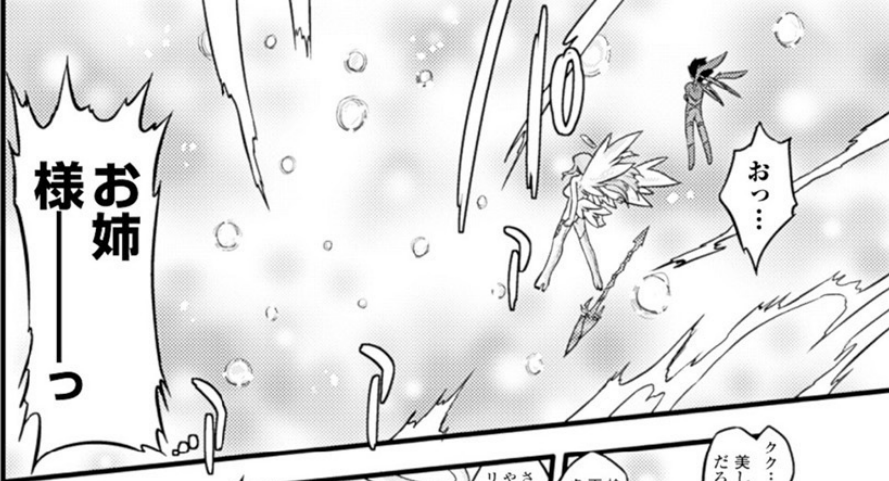


リアリ
...エル

リ...



こんな権
なんかで...



お姉様

おっ...



まさか

お前が
お姉様を
.....!?



救済の
チャンスだった
だろ?
あの化け物を
地上に放して
やっつ甲斐が
ないじゃないか

さあ泣くのは
やめろエル
リアリエル
槍は
天使と魔族のみを
虚無に帰すんだ
魂たちは
この通り!
肉体を
与えてやろう



クク...
美しい
だろう



.....
?



あう





はあ...
くっ...
はあっ

ま...また
私をイカそうと
してるのね...っ



な...
なんて...

こんな
事お
ござい

ふっ
深いっ

おしりの
あなこわれる
おおっ

そうだろう

お前が
いく時

槍はお前の身体を
つくりかえようと
してるんだ
からな

お前の全ては
槍のものに
なるんだ

い...
いやあつ

さら
イけっ
あつ

究極の快樂と
ひきかえに全てを
さし出すんだっ

あ
こっちも
深いっ

イっ
いくもんかっ

おおっ
心臓どまっざやう
いぐっ...

イセリア 英雄戦記

The Legend of the Acepia War

第7話 魔騎士覚醒

あまくさしろ ぼたん
小説 天草白 挿絵 牡丹
NOVEL ILLUSTRATION

グラマトンからの侵攻を食い止めるため、
フェイエン軍と合流したセリーヌと氷継。
国家間の戦争が更に激化する!!
一方、ゴメスの調教を受けるリアは、
奴隷へ堕ちていく!!

フエイエン武踏会は大陸の東に位置する大國だ。「賢王」と呼ばれる名君に治められていて、治安のよさは近隣諸國随一を誇る。食糧の生産も豊富で大陸でもっとも理想的な環境といえた。

その平和な國が今——戦火に晒されていた。

フエイエン武踏会の最北端にあるテエンヘイという名の村。木造の家が建ち並ぶ村に、牧歌的な雰囲気にはそぐわない勇壮な閣の音が木霊する。純白の甲冑を纏ったグラマトン聖教會の騎士団が楔をふたつ重ねたような、不思議な隊列を組んで前進した。いずれも弁髪に武闘着姿をしたフエイエンの正規軍がそれに立ち向かう。

「押されているな。やはりグラマトンは強い」

セリーヌはフエイエンから借りた騎馬に跨がり、最前線へと進んだ。同じく騎馬で併走するのは長身の女執事、氷織だ。

「あの陣形は『祝福の風』を使用していいようですね」

祝福の風、とは特殊な陣形と神官からの加護魔法を組みあわせることによって、絶大な防御効果を生む地形魔法の一種だ。

フエイエン軍の戦士たちは、この國獨特の戦闘技法「フジュツ」を駆使して立ち向かっているが、気の力を込めて威力を倍化させた拳も、蹴りも、魔法のごとく撃ち出した気の弾丸さえも、

祝福の風の防護によってすべて弾き返されていた。

「私たちは側面からフエイエン正規軍の支援を行いましょう。『祝福の風』は特殊な陣形を保つことで効果を発揮する魔法です。僅かでも敵の陣形を崩すことができます。効果は弱まりませんが、あの防御魔法さえなくなれば、フエイエンにも勝機が生まれるというわけか。たしかに遊撃部隊を務めるには私たちが適任かもしれないな」

「申し訳ありません、セリーヌ様。我が國のために、他國の騎士様にこのような危険な役目を負わせてしまうなんて……」

革製のアイマスクと眼鏡で顔を覆った女執事が申し訳なさそうに謝罪する。

「謝る必要はない。フエイエンを守り、各國の戦力均衡を保つことが、ひいてはイセリアを守るのにも繋がります」

「最新線となつている村の中央広場まで到着すると、セリーヌは騎馬から降りてクラウソラスを構えた。

「私が剣を振るうのは、いつだってあいつの——フィオナのためだ」

主の意志に呼応するかのよう、黒曜石にも似た美しい刀身が鳴動する。

アリーノドレスの裾を翻し、セリーヌは天空高く跳躍した。ロイヤルブルーの長髪を靡かせながら空中で反転すると、赤光を纏った剣を手に敵軍の密集地に向かつて一直線に降下する。

「弾ける、グラマトン！ はあああああああつ！」

インベリアアルダイブ——セリーヌの魔法剣が一閃し、数十人の神殿騎士が一瞬にして吹き飛ばされた。いかに『祝福の風』で守られているとはいえ、それ以上の破壊力をぶつければ打ち破ることは可能だ。無論、陣形を崩せるまでこの術を連発するのは体力的にも魔力的にも無理な話だ。

さらにもう一撃、セリーヌが続けて魔法剣を振るうと、後には武器や甲冑を砕かれ、その場に折り重なって倒れた十数人の神殿騎士の姿が残るのみだった。巻き添えを受けた家々は文字通り木っ端微塵に吹き飛んでいる。

「すごいですね、セリーヌ様。やはり私の見込んだ通りのお方でしたわ」

「いや——まだまだ」

馬から降り、賞賛の声とともに駆け寄る氷織。裏腹に、セリーヌは表情を険しく引き締めて前方を見据えていた。未だ魔法剣による衝撃波が渦巻き、爆光さめやらめ視界の向こうに、すらりとしたシルエツトが佇む。

「インベリアアルダイブに耐えたか。他の騎士とはわけが違うらしいな」

「『祝福の風』の防護を力任せに打ち砕くとは大した剣技だね」

長身の女騎士はどかか進つ葉な口調で囁いた。他の神殿騎士の鎧が純白で統一されているのに対し、目の前の騎士はスレンダーな肢体に燃えるような真紅の甲冑を身に纏っている。短く整えられた髪もまた鎧と同じ真紅。鮮やかな翡翠色の瞳がセリーヌの眼光を真

正面から受け止める。

「あたしはグラマトン神殿騎士長、ベロニカエルルグラマトン」

（こいつが噂の『神速の弓騎士』か）

彼女は「聖女」と呼ばれるグラマトン王の娘でありながら、戦場を飛び回る変わり種の大無双。その名はグラマトン国内のみならず、遠くイセリアにまで響き渡っている。紛れもなく超一流の騎士だ。

「……イセリア公國の騎士、セリーヌIIアウアリアレスだ」

騎士の礼に則つて名乗り返すと、セリーヌはキツとベロニカを睨んだ。

「なぜ貴公らは帝國に加盟する。フエイエンを、いや世界中を戦火に包み込むのか」

「それを考えるのは國を治める人間の仕事。あたしたち騎士の役目はただひとつ。主のために剣を振るい、戦う。他のことなどどうでもいいわ」

「どうでもいい……だ」と

「強き者は生き、弱き者は死ぬ。神が定めた絶対の掟よ。あたしはその掟に従い、敵を狩る。巻き添えで死ぬような弱い者など眼中にはない！」

ベロニカの意志は身に纏う鎧同様、真紅の炎を思わせる苛烈さだった。瞬間的にセリーヌは悟つた。ベロニカは生粋の戦士だ。言葉で説き伏せ退くような相手ではない。神速の弓騎士にとつて戦いこそがすべてならば、言葉ではなく剣によつて応えるしか

いだろう。

「氷継、こいつは私が相手をする。貴女はフエイエン戦士団のフオローに」

「——お氣をつけて、セリーヌ様」

丁寧に一礼すると、濃紺のスーツ姿の女執事は先ほどのインベリアルタイプの被書を免れた家の陰へと滑り込んだ。物陰を伝うように移動し、敵騎士の背後から飛び出した。

「ぐあつ」

後頭部に不意打ちの手刀を食らい、敵は呻き声とともに昏倒する。

「アイマスクをしたまま戦うつもりか、舐めるな！」

別の神殿騎士が長剣を振りかぶり、怒りの雄叫びとともに氷継の頭上へと振り下ろす。鋭い一撃は、しかし女執事の身体にかすりもしなかった。

「いきなり斬りかかるなんて野蛮な方たちですね」

氷継は僅かに半歩、横に身体をずらしただけだ。剣の軌道があらかじめわかっていったかのような足運びで、敵の斬撃を優雅に避ける。体勢が前のめりになった騎士の腹部に、白い手袋を嵌めた掌底が打ち込まれた。

重い甲冑を纏っているはずの神殿騎士が信じられないほど吹き飛ばす。

「馬鹿な、視界を遮っていなせ!!」

左右からさらにふたりの神殿騎士が迫る。氷継はアイマスクと眼鏡で覆った顔をふたりへと向け、穏やかな笑みを浮かべた。綺麗な黒髪を軽かき上げ、

「いけませんね。私の心眼の前にはあなた方の動きなんて筒抜けです」

女執事の長身がグンと沈み込んだ。正面から突き出された剣と側面から迫った剣とを、同時に避ける。そのま

まカウスター気味に、低い体勢からの回し蹴りで右の神殿騎士の足元を薙ぎ払う。

鈍い破壊音が響き、神殿騎士の足を覆うすね当てが粉々に砕け散った。

「な、生身で甲冑を砕く、だど!!」

驚愕した左の神殿騎士も、氷継が伸び上がるようにして繰り出した膝蹴りに頸を砕かれて昏倒した。

「これぞ我がフエイエンに伝わる格闘法『ブジュツ』。私の身体は全身凶器

なんです。お氣をつけくださいませ」

丁寧に口調とは裏腹に、凶悪なまでの破壊力で氷継が村を駆け抜けた。家の陰や路地の死角などを利用し、正面からではなく敵の側面や背後から襲いかかる氷継はまさに神出鬼没で、グラマTONの騎士たちはひとり、またひとりと倒されていく。

スーツを纏った豊富な肢体が、踊るように優雅な動きに合わせて揺れた。内側から弾けそうなるほど膨らんだ胸元が上下に弾み、むっちりとした腹部は蹴りを繰り出す度、下半身を捻る度に尻肉の稜線を浮き立たせる。

セリーヌはその戦いぶりを感嘆の面持ちで見詰めていた。

氷継は魔力こそないが、相手の攻撃を上手く受け流し、さらには相手の攻

撃の威力を利用して自分の攻撃の威力を倍化させている。正面から敵を切り

払うセリーヌとは対極にあるような戦い方だ。

「さすがに王の傍に仕える守り刀だけあって見事だ。これなら氷継のフオローは必要ないな」

一騎当千の戦いぶりを目の当たりにし、セリーヌは安堵するとともに目の

前の敵へ意識を移し変えた。弓騎士の異名とは裏腹に、ふた振りの剣をだらりと下げてペロニカが近づいてくる

（弓ではなく剣で私に挑むつもりか?）

セリーヌが怪訝な気持ちで眉を寄せた次の瞬間、ペロニカが地面を蹴って一気に加速する。

セリーヌ以外の者ならば、おそろくは初太刀で首と胴とを分かれたであろう。クラウソラスを旋回させて、

首筋を狙ってきた右の短剣を、さらに脇腹に襲いかかった左の短剣を、連続して弾き返す。

「防いだが! やるな、ならば——これでっ」

いきなり跳び下がったペロニカが二本の短剣を胸元に交差させた。刃と刃が触れあった箇所から青白い燐光が迸ったかと思うと、ぐにやり、と双剣が異様な形に変形する。一方は長大な

弓に、もう一方は鋭い鎌を備えた矢に。おそろくは、物質の組成を組み替える魔法で剣を弓に変えたのだろう。満月のごとく引き絞った弦からペロニ

カが矢を放った。

「練成魔法……!!」

大気を切り裂いて迫る矢を、セリーヌはほとんど動物的な本能ともいえる

反応で防いだ。クラウソラスを自身の正面に立てて、矢を打ち落とす。「面白い! あたしの剣と弓を両方防

いだ相手はあんたが初めてよ、アウェアアレス卿。褒めてあげる」

強敵と出会えたことが嬉しいのか、ペロニカの表情が喜びに染まった。翡翠色の瞳は爛々と輝き、溢れ出す闘志が勝気な美顔をさらに輝かせる。

「近距離は双剣、遠距離は弓で戦うというわけか。器用な真似を!」

叫びつつ、今度はセリーヌから仕掛けた。黒き長剣を掲げて上段から打ちかかる。ペロニカは長弓を再び二本の短剣に変形させると、頭上で交差させてセリーヌの斬撃を防いだ。

「まだまだっ!」

渾身の一撃を受け止められても、セリーヌは怯まない。クラウソラスが弧を描き、グラマTONの女騎士に縦横から斬りつけた。

虚空を切り裂く黒い軌跡、弾け散る鮮烈な火花、腹の底に響く衝撃音。

「いいよ、アウェアアレス卿。最高だ。さあ、もっともつと打ちあおうか!」

ペロニカの声に戦いの愉悅感が滲む。紅のショートヘアを揺らしながら左右の短剣を巧みに操り、セリーヌの斬撃を弾き返す。二十合ほど切り結んだところで両者は弾かれたように離れ、距

離を取った。

双剣が青白い燐光とともに弓へと変わり、ペロニカが続げさまに矢を放つ。セリーヌは剣を旋回させて矢の雨を防ぐものの、こもも連射されると反撃に移ることができない。

「くっ、こいつひとりにかまっついていては――」

内心の焦りを読み取ったのか、ペロニカの唇に勝誇った笑みが浮かんだ。「あんたさえ引きつけておけば、残りは雑魚『祝福の風』の加護を受けた我が騎士団がフエイエンを蹂躪する誰にも止められないわよ」

「さやあつ……！」
不意に響いた悲鳴は氷継のものだった。

視線を走らせれば、凛々しい女執事が長身を投げ出すようにして地面に倒れている。村々から家屋から逃げ出すうとする村人のひとりや庇り、神殿騎士の攻撃をまともに受けたらしい、アイマस्कと眼鏡が吹き飛ばされて素顔が露出していた。短く切り揃えた艶のある黒髪が大人びた顔立ちを彩っている。アイマस्कで隠すのは勿体ないほど整った容姿に、セリーヌも思わず見惚れてしまう。

神殿騎士たちの顔にもまた、同様の好奇と賞賛の笑みが浮かんでいた。「わ、私は……そんな、ああ見ないでえ……恥ずかしいのお……」

一方の氷継は両手で顔を覆い、嗚咽を始めた。ここが戦場であることさえ

忘れてしまったのか、その場に弱々しくしゃがみ込む。

一分の隙もない執事姿をしているため誤解していたが、どうやら氷継の本性は度が過ぎるほどの恥ずかしがり屋らしい。あるいはアイマस्कはそれを隠すためのものだったのか。

「氷継、今は恥ずかしがっている場合ではない！ 立つて戦え！」

思わず叫んだセリーヌに、ペロニカがすかさず矢を放つ。足元を狙ってほぼ同時に射ち込まれた三本の矢を、セリーヌは魔力で脚力を強化し、大きく跳びあがって避ける。

その瞬間、ペロニカの口元に勝利を確信したかのような笑みが広がった。「しまつ……」

セリーヌは己のミスを悟った。足元を狙った矢はあくまでも間。本命は空中に跳びあがって身動きの取れないセリーヌを狙う二の矢だ。

ペロニカの弓術は神速にして精密。この必殺の距離では避ける術がない。「神よ、この勇者に安らかなる眠りを与えたまえ……クレレッセントブレス！」

敬虔な祈りの声とともに、満月のごとく引き絞った弓から必殺の矢が放たれた。青白い燐光に包まれた矢が大気を切り裂き、一直線に突き進む。

空中にいるセリーヌにそれを避ける術はなかった。鋭い衝撃が胸甲を直撃し、次の瞬間、鎧もろとも肉を貫かれ、熱い感触が胸元を襲った。

時間ははばらく遡り――花柄の壁紙に囲まれ、ピスクドールやぬいぐるみなどで飾られた可愛らしい室内に、精液特有の匂いが漂っていた。「ひっく……ひっく……ひどいよ。リア、はじめてだったのに……」

泣きじやくるリアを見下ろし、ゴメスの胸に心地よい征服感が湧き上がる。この可憐な少女の身体の上に初めて乗ったのが自分なのだと思うと、痛快で仕方がなかった。

ゴメスに処女を奪われるまで穢れを知らなかった、清純さと可憐さとを兼ね備えた美貌。ずり下がったドレスの隙間から見える、僅かに膨らんだ乳房や引き締まった小尻。折れそうなほど華奢な手足。

リアのように可愛らしく、誰の手垢もついていない無垢な存在だけが、ゴメスにとつての「女」だった。ほとんど起伏のないなだらかな裸身を見ていると神々しささえ感じてしまう。

最高だった。逆に、成人女性のようには胸や腰が不必要なほどむっちりや発達し、凹凸のはつきりとしたプロポーションなどゴメスには怖気が走るだけだ。

「あんまり気持ちよかったから、おじさんのおちちも、もうこんなになつてきましたよ。うふふ、もう一度可愛がってあげまぢゅからねえ」
赤子に言い聞かせるような猫なで声でささやきながら、ゴメスがリアの身体

体のしかかろうとする。と、その時だった。

拘束されていたはずの両腕をいつの間にか外したリアが、ばね仕掛けの人の形のように跳ね上がり、ゴメスの腕の間からすりりと抜け出した。

「えっ?!」
「動いちゃだめだよ、んふふ」

突然響いた無邪気な笑い声とともに、咽元に冷たい鋼の感触がして、ゾッと振り返る。いつの間にか背後に現れたリアがゴメスの咽にナイフの刃を突きつけていた。

「り、リアたん……?」
どうやって拘束を外し、いつの間か背後に現れたのか。荷物と一緒に片付けておいたはずのナイフをどのように見つけ出したのか。卓越した暗殺者としての技巧なのだろうが、それはゴメスに理解できる範疇を超えていた。

「クロウの暗殺者をあまく見ないでよね」
可憐な美少女然とした笑顔とは裏腹に、紅の瞳だけは笑っていない。魂まで凍らせるような視線に射抜かれ、ゴメスは動くことさえできない。

「さつまであれだけ泣きじやくつていたくせに、何で冷たい目……!」
指一本でも動かさず、即座に殺す――首筋に押し当てられたナイフを通して、リアの意志が伝わってくる。あるいは先ほどまで泣きじやくつていたのも、ゴメスを油断させるための演技だったのだろうか。

「よくもリアにあんなこと……許さな
いんだからねっ」

リアがナイフの刃をグッと押し込
んだ。咽の皮がわずかに裂け、染みるよ
うな痛みとともに血が滲み出す。

(二、殺される！)

ゴメスが死を覚悟した瞬間、部屋の
ドアが勢よく開いた。

「えっ!!」

それはリアにとつても予想外の出来
事だったのだろう。一瞬動きが止まっ
たところでゴメスが力任せにリアの身
体を押し返す。華奢な手からナイフが
離れ、放物線を描いて床に突き刺さっ
た。

「ゴメスの旦那、自分ひとりでお楽し
みですかい」

部屋の中に入ってきた下卑た男たち
は全部で十人を超えている。フエイエ
ンの国境付近を縄張りとする盗賊団の
ひとつだ。先だって盗賊団のグループ
のひとつが何者かに討伐されたという
報告を受けていたが、彼らはまた別の
グループだろう。

国境守備の任にあたっているゴメス
は裏で彼らと繋がっており、幾ばくか
の賄賂を受け取るのと引き換えに、彼
らの行動をある程度黙認しているの
だった。ゴメスがリアに殺されかけた
光景を見て、すべての事情を悟ったの
か、盗賊たちは丸腰になったリアを取
り囲み、逃げ場を塞ぐ。

「くっ、ほかにもいたの……!!」

リアは青ざめた顔で新たな入居者た

ちを見詰めた。ナイフを失った彼女が、
筋骨隆々とした十数人の盗賊団に立ち
向かえるとはとても思えない。

「相変わらず嘆きつけるのが早いです
ね。……ですがおかげで命拾いしまし
たよ。いつものように全員でこの素
晴らしい少女を責めるとしましよう
か?」

「へへ、こんな可愛らしいお嬢さんを
俺たちの奴隷にできるなんてね。調教
の協力なら喜んでさせてもらいますぜ、
旦那」

屈強な男たちがリアの左右からひと
りずつ迫った。力を込めるとそれだけ
で折れてしまい、そうなほど細い両足を
掴み、力任せに押し開いていく。

「あ、いやっ……!!」
抵抗の素振りを見せるものの、非力
なりは為す術もなく開脚させられて
しまう。ナイフを持っていれば無敵の
暗殺者かもしれないが、丸腰の彼女な
どただの幼女に過ぎなかった。

「はなして……や、やだあつ。やめて
よお。リアの……だいたいじなところ、じ
ろじろ見ないでえ。やあ、はずかしい
よお」

Mの字に開脚させられた美少女は羞
恥に頬を染め、嫌々をするように首を
激しく振った。歴戦の暗殺者も、こう
なってしまうのは童顔を恥じらいの桃
色に染める無力な少女に過ぎなかった。
ゴメスは先ほどリアのナイフによつ
て薄皮一枚を裂かれた首筋に手を当て、
指についた血をべろりと舐め取った。

「ふふ、おいたをしたお仕置きでちゅ
よお。これからリアさんの大事な場所
を診察しまちゅからねえ。おとなし
くしているんでちゅよお」

「し、しんざつて、何? 何をす
る気なの?」

リアがもたらす涙声心地のよいハー
モニートなって響く。ゴメスが部屋の
隅にある棚から持ってきたのは腔内鏡

——医者が女の胎内を診察する時に使
う道具だ。

「さて、リアさんのおまんまをじ
つくり見せてもらいまちゅからね」

ゴメスはM字に開かれたリアの両足
の間に身体を入れ、鈍い銀色に輝く医
療器具を桃色の秘裂に押し当てた。

処女を奪っただけでは飽き足らない
この極上の美少女のもっとも奥深い部
分を目に焼きつけたかった。リアのす
べてを知りたかった。

「ひっ……」
秘処を襲った無機質な感触に驚いた
のか、リアが短く息を飲んだ。

先ほどまでびつたりと閉じていた二
枚の花弁は僅かに充血して赤みがさし、
ぽっかりと口を開けている。ひくひく
と痙攣するように震える肉裂に、ゴメ
スは腔内鏡をゆつくりと差し込んで
いった。

「だめえ、やめてっ! へんたいへん
たいへんたいっ!」

「ほほう! これは……いい
眺めでちゅよ、リアたん。リアたんの
大事なところがよく見えちゅ」

腔内鏡を覗き込むとゴメスの視界
いっぱい美しい桃色の肉裂が飛び込
んできた。■い少女を捕らえて秘孔内
部を検分したことは何度もあるが、こ
れほどまでに美しい色彩の秘肉を目に
したのは初めてだった。

「うふふ、可愛いピンク色してまちゅ
ねえ……おじさん、こんなに綺麗なお
まんまを見たの、初めてでちゅよ」

興奮に意気を荒げ、腔内鏡をさらに
奥まで押し込んでいく。リア自身です
ら見たことがないであろう最深部の柔
肉をじつくりと視察する。

リアのもっとも神秘的な場所……そ
の奥の奥まで検分したのは今までも、
そしてこれからもゴメスひとりだ。他
のどんな男も見ることができない聖域
を征服したのだ。熱い感慨がゴメスの
心を炎のように燃え立たせた。

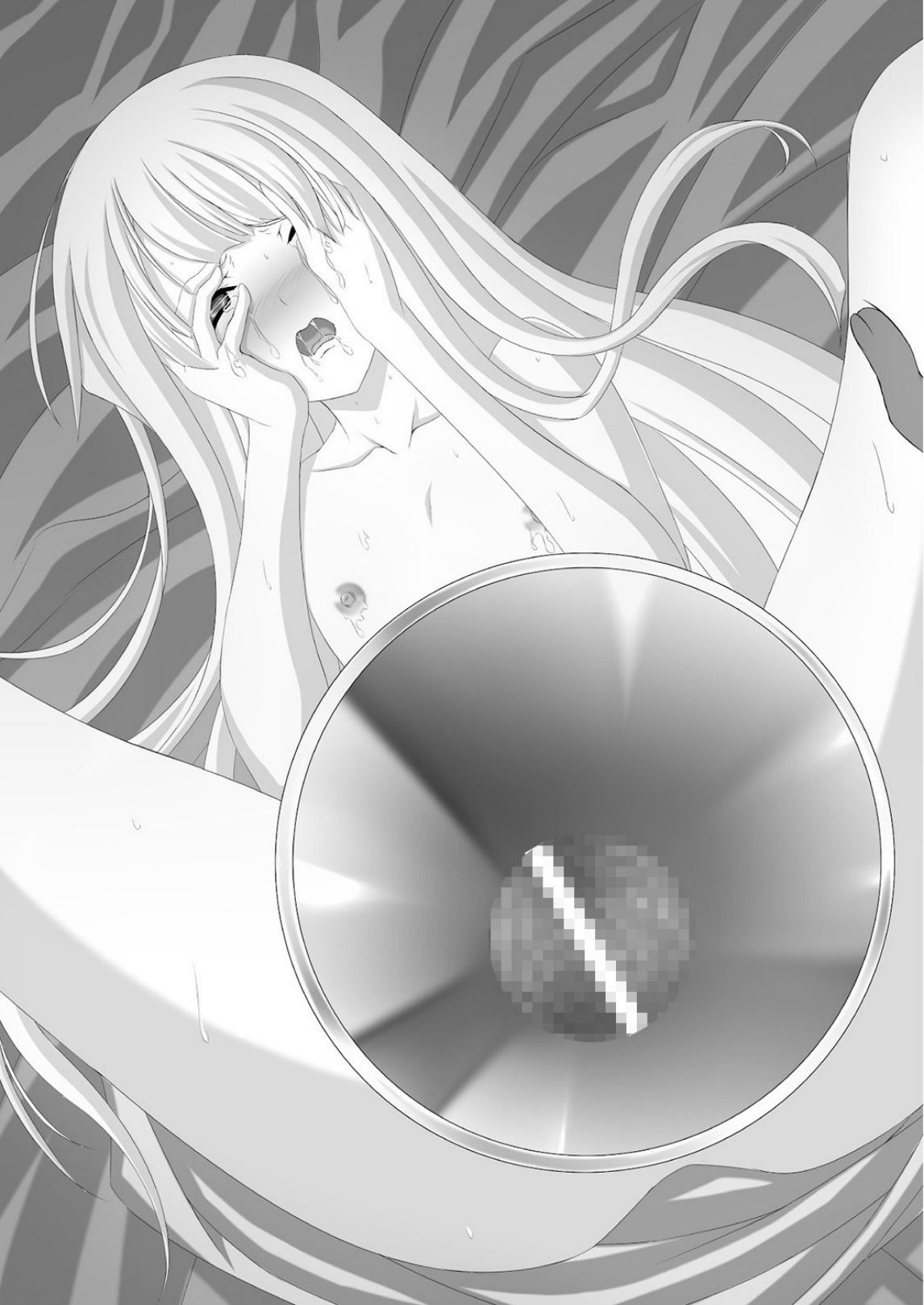
「見ないでよお……リアの、だいたい
じなところ……ああ、ん」

腔内鏡によって幼い秘処が丸く押し
開かれており、ピンク色をした肉裂の
連なりをはつきり確認できる。荒々し
い鼻息混じりに覗き込むと、光沢のあ
る柔肉が小刻みに蠢いた。

「ん? よく見ると、少し血がにじん
でまちゅねえ。おじさんがさつきりア
たんの処女をいっただいちゃったからか
なあ? 痛いでちゅか、リアたん」

「ううう、ひどい……もう、やめてえ」
リアは頬を羞恥のピンクに染め、涙
混じりに懇願した。

一方のゴメスは、リアの身体のすべ



てを目にし、明らかにしたことで陶醉にも似た征服感を憶えていた。見れば見るほど秘肉の連なりは美しく、心を奪われる。いくら室内鏡を覗き込んでいても飽きることがなかった。

「旦那、俺たちも参加させてもらええ」

ゴメスが室内鏡から顔を上げると、盗賊たちのひとりが、先ほど床に突き刺さったナイフを引き抜き、凹凸の少ない肢体へ鋭い切っ先を向けていた。

「ひつ……こ、こんどは何……？」

「下卑た男たちの感想に晒されたリアはつぶらな瞳に大粒の涙を浮かべ、絶望的な表情で周囲を見渡した。勿論彼女を救う者などこの場にはいない。

「い、いやああああっ！」

盗賊のナイフがさらにひらめき、滑らかな乳房のラインを上下に辿っていく。力加減を少しでも誤ると、即座に珠の肌を傷がついてしまい、そうだった。リアの小さな肢体が、びくっ、と震える。

「さやっ！」

数十人、数百人という命を奪ってきたであろう凶器が、その主へと向けられ、緩やかに膨らんだ乳房の上をなぞり出した。

「俺たちの言うことを聞くか？ それとも逆らうのか？ どっちだよ」

「う……」

リアの顔は今にも断末魔の叫びをあげそうなほど蒼白だ。気丈な暗殺者の少女もさすがに度重なる恐怖には勝てないのだろう。震える唇でとうとう降参の言葉を紡ぎ出す。

「あ、だめ、だめえ」

盗賊たちにナイフの先で乳首を突かれ、薄く膨らんだ乳房をなぞられると、リアの幼げな肢体がびくん、びくんと痙攣した。透き通るほど白い肌には静脈がうっすらと透けていて、少女の

「ゆるして……ください……おねがい、します……」

「へへ、やっど屈服したか。ちくしょう、もう我慢できねえ」

盗賊はリアが従順な態度を見せたことで満足したのか、ナイフを放り出し

て衣服を脱ぎ去った。いきりたった男根は中ほどが大きく、ゴメスの粗末なベニスに比べるとかなり長い。先ほどゴメスの欲望器官を受け入れた時でさえ泣き叫んでいたリアにとっては、凶器以外の何物でもなかったらう。

「や、やだあつ……またするの……お!! も、もう、いれないでえっ！」

ゴメスが秘処から室内鏡を抜き取った途端、リアは悲鳴をあげて全身を振らせた。何とか逃げ出そうというのだろうが、華奢な両手両足は周囲の盗賊たちが押さえ込んでいられるため、身動きすらほとんどできないようだ。

「だめ、だめえ！ もう、はいらないよお」

リアの懇願を耳にしても、盗賊は哀れむどころかますます勢いづいて腰をぬじり回っていった。

「さやああああっ！」

紅色をしたリアの瞳が張り裂けんばかりに見開かれた。悲痛な叫び声はゴメスや盗賊たちを喜ばせるための旋律に過ぎなかつた。

「うお、キツキツだ！ こりやあ気持ちいいぜ！」

苦勞しながらも、とうとう肉勃起を最深部まで打ち込んだ盗賊は歓喜の雄叫びをあげた。猛々しい男根によつて串刺しにされた少女は、細い咽を晒しながら断続的な喘ぎ声をもらす。

「うお……ああ、あ……はあ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

「さやあああ……」

男はほとんど括れのないリアの細腰を掴むと、荒々しく抽送を始めた。一度開通しているとはいえ、さすがに処女を失ったばかりの膣孔は長大な肉棒を根元まで飲み込むことができないらしく、男はベニスの中腹までを埋め込む程度までとめていた。

「ぐっ、うう……何て締めりだよ！ こいつはすげえ！」

先ほどゴメス自身も堪能した幼腔の強烈な締めつけは、盗賊の男にも蕩けるような快感を与えているようだ。深く打ち込めば子宮口が亀頭に吸いつき、浅くえぐれば入口付近の柔肉が雁首を擦り上げる。

「たまらねえ！ 中がうねって……くうっ、最高だぜ！」

「あつ、ああんつ、やだあつ。もつと、ゆつくりに……してよお……！ だめえ、きつよいよお……！ リア、こわれちゃっ！」

盗賊はリアの脇腹辺りを両手で押さえ、前傾姿勢になってピストン運動を続けている。ただでさえ細く未成熟な秘孔に巨大な男根が中ほどまで挿入されて、下腹がばんばんに膨らんでいた。逞しい体躯を思いっきりしなせ、子宮まで揺さ振るようなストロークを叩き込む。

「くうっ……いやあ！ もう、ぬいてえ……！」

それでも盗賊の男がピストンを続けているうちに、結合部からは透明な飛沫が飛び散り始め、少しずつ出し入れ

がスムーズになつていく。盗賊は上体の前傾を深めると、なだらかな乙女の双丘に顔を寄せた。

淡い桃色に彩られた乳首を口に含むくちゅ、くちゅ、と音がするとところを見ると、舌先で乳首を舐がしているのだろう。

「あつ！ そ、そこ、だめえつ！」

「処女だったくせにもう感じてるのか？ 乳首をこんなに尖らせやがって！」

「ち、ちがうもんっ！ リア、そんないやらしい子じゃ……あんっ！」

屹立を示す左右の乳首を男が舌や唇を這わせていくと、リアはやるせない嬌声を零した。

（ああ、リアたん……何ていやらしい顔をしているんでちゅよか。おじさんもうたまらないでちゅよお！）

リアの痴態を目にした、ゴメスは下腹部にぞくぞくとした疼きを憶えた。これ以上他人がリアを犯している様子を傍観しているのは我慢がでさなかつた。かといって、リアの秘裂はすでに盗賊の男が貫いてしまっている。

ならば……と、ゴメスは口元に邪な笑みを浮かべた。

「おじさん、リアアたんのもうひとつの処女をもらいまちゅねえ！」

盗賊の男に体位を変えるよう告げる。男もゴメスの狙いを察したのか、身体の位置を半回転させて正常位から騎乗位へと姿勢を変えた。

「え、しよじよって……？ きゃあ、そつちはっ!? ちがうよお」

リアが男の腰に跨がる恰好となり、ゴメスはその背後へと回る。薄い桃色をしたアヌスに野太い指を這わせるように、幼げな美少女は顔を強張らせてこちらを振り向いた。

おのく美少女の唇にゴメスが軽くキスを与える。醜い男とのキスに嫌悪感を露わにしたリアを見て、ゴメスの嗜虐感否が応でも高まった。ひくひくとリアの怯えを表すかのように痙攣する窄まりへ充血しきつた先端部を押し当て、肉棒から漏れる先走り液で窄まりを湿す。

「やめて、やめてよお！ そんなとこ、きたくないんだから」

「大丈夫でちゅよ。おじさんはリアたんくらいの女の子のお尻に、おちんちんを挿れたこともありませんからねえ」

「だめなの……おしりは、いやなお。おねがい……」

「力を入れると切れてちゅいまちゅよ。おとなしくしてましようねえ！」

言うが早いが、ゴメスは全体重を込めて腰を前へ押し出した。

「んぐっ！」

さすがに未開通のアヌスは膣孔以上に狭かった。ただゴメスの肉棒が平均よりもかなり小さなサイズであることが幸いしてか、力を込めると少しずつ直腸の内部へ沈み込んでいく。

一番太い亀頭部が肛環を通り抜ける

と、ゴメスはこのそばかりに体重を浴びせかけた。

「あ、ああんつ！ きゃああああああああつ！」

リアが、処女喪失の時以上の甲高い悲鳴を奏でた。

四方から亀頭が食い絞られるような強烈な収縮に、ゴメスは短く叫びた。さすがに未通のアナルはきつい。まして十代の未発達な肛道なら尚更だ。ゴメスは結合が解けないように小尻に思いつきり指を食い込ませ、容赦なく腰を押し進めた。

めり、めり、と音が聴こえるほど強引にいきりたつた肉棒を腸内の奥深くへと捻じ込んでいく。少女の括約筋は想像以上に強力で、渾身の力を込めているというのになかなか最深部まで入っていない。

「があつ！」

ゴメスは動物のごとき雄叫びをあげて、下腹部全体を叩きつける。めりつ、と腸内が一際大きく拡張される感覚があり、とうとう根元までベニスを差し入れることができた。

「はあ、はあ……これで前も後ろも、リアアたんの『初めての男』はおじさんになりましたよお。どうでちゅか、嬉しいでちゅか？」

「うう、ぬいてえ……もう、やだよお」

リアは涕泣しながら、背後のゴメスを振り返る。涙に濡れた美少女の顔が、彼の征服感を改めて満足させてくれた。これほどまでに可憐な美少女を――

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>